川柳塔

創刊大正十三年　通巻九五六号

日川協加盟

No. 956

同人特集・私の一句

一月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱　看護２A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター

診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

未知への挑戦

河内天笑

あけましておめでとうございます。

昭和九年戌どし生まれの私は、昨年で干支を六回巡り、新たな気構えでこの先のテーマを「未知への挑戦」として参ります。

本年も何卒よろしくお願い致します。

師走のある早朝、NHKの〝小さな旅〟という番組と出会い「天王寺七坂」と題した映像にすっかり見入ってしまった。大阪に生まれ育った私が、自分の行動範囲以外の事を殆ど知らない事に気付かされ「何はさて置いても今日は天王寺七坂を見て歩く」と妻を誘い出す。天王寺警察で七坂あたりの地図をコピーして頂き、いざとばかりに歩き出す。逢坂、天神坂、清水坂、愛染坂、口縄坂、源聖寺坂、真言坂と一番から七番まで南からが順のようだが、車を預けた位置の事情で真言坂より歩く。短いが急な坂道でまわりは真言宗の寺ばかり。源聖寺坂は殆どが石段。きつい石段と平べったい石段と合わせて約八十段ある。それからしばらく松屋町筋を南へ歩いたところに道幅の狭い入口に「口縄坂」とある。

何となく情緒のある石段ばかりの坂で坂の途中で織田作之助の碑に出会う。

「口縄坂は寒々と木が枯れて白い風が走っていた。私は石段を降りて行きながらも、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘きは終り新しい現実が私に向き直って来たように思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛っていた。」『木の都』より

とあり碑の裏側に昭和五十五年三月　大阪市建立とある。織田作は昭和二十二年に三十七歳で早世している。

くねくねと寺の町を折れたり曲がったりして六月三十日の愛染さんで知られる社の前から愛染坂を降りる。清水坂、天神坂と一番南の逢坂を踏破した頃、真黒な空に雷が鳴り出した。逢坂からは千日前、通天閣が見渡せる。正午に歩き出して三時間の未知の旅であった。

昨年十月号で脳の老化防止について少し触れたが、最近新しい実証結果が報告された。「認知症」は大脳皮質の「海馬」という部分が萎縮して短期的記憶喪失や情緒不安定をもたらすが、CT検査で海馬が萎縮していても認知症に進んでいない人が半数近く発見され、それらの人達に共通する事情が明らかにされた。それは「コーラスを続けている」「社交ダンス」「歩く会」など体を使うものと「短歌など同人誌」で脳を継続的に刺激している事で脳細胞内の連絡を司る「白質」（神経の束）が鍛えられている人達である事が判明。川柳を楽しむ私達にはこの上ない朗報であった。

小説の書き出し部分を三六五日分集めた日めくり式音読カレンダーが発売された。織田作の『木の都』など有名な作家の作品がずらり。音読も脳の刺激には最適らしい。（くもん出版）

◆

自選句

旅ごろも一新　人生はSHOWだ　　天笑
日本の朝梅干をいただこう　　〃
身のまわり糺して美しい日本　　〃
お正月ぐらいはゆったりと着物　　〃
水道の水の旨さを見直そう　　〃

座右の句
人恋し人煩わし波の音　（栞）

私の句
踏み込まぬ線引きをして無二の友　石堂潤子

川柳塔　一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「猪乗り天神」

■巻頭言　未知への挑戦……河内天笑…(1)
丁亥考……西出楓楽…(2)
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…(4)
川柳塔の川柳讃歌(25)……木津川　計…(52)
自選集……(53)
水煙抄……奥田みつ子選…(57)
高野山合祀法要……(79)
私の一句〈同人特集〉……(80)
愛染帖……新家完司選…(92)
誹風柳多留一一篇研究 17……(96)

丁亥（ひのとい）考

西出楓楽

おめでとうございます。二〇〇七（平成十九）年、丁亥の年が明けました。

亥年生まれは、逆境をバネに不屈の闘志を切り拓き、最後に勝つ干支で縁起がよく、人との好縁を築きます。こんな干支ですから、今年がいい年にならないはずがありません。

しんがりの猪突を囃す明けの鐘　吐来

この句のように猪が十二支の最後の年に入ったのには、こんな童話があります。

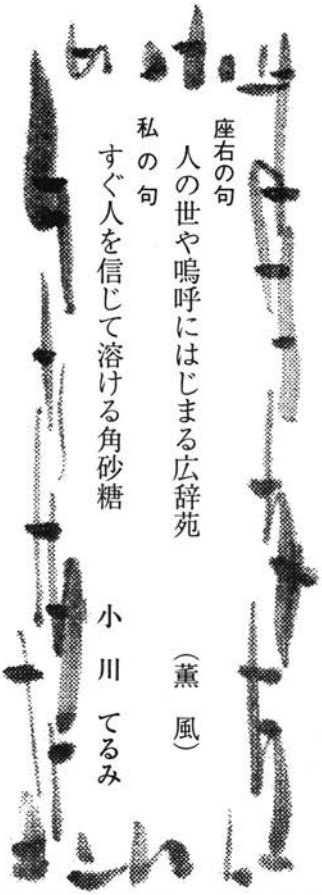
ある年の暮れ神様が動物達に言いました。

「年明けの鐘の鳴る間に御殿へ来た十二番目までの動物を、その年の大将にしよう」。

鼠・牛・虎……とそれぞれ仲よく、また犬と猿は喧嘩をして鶏に仲裁に入ってもらいながら、という風に順調に十一番までに入りました。最後に駈けつけた猪は猪突猛進で御殿をつき抜けてしまいましたが、みんなの応援でめでたく十二番目に入れましたとさ。

猪は豚の原種で偶蹄目の獣。子には背中に白い縦縞があり瓜坊と呼ばれています。私もかつて子供達が幼い頃、芦屋ロックガーデンによくハイキングに行きましたが、芦屋川の川原や道端でたびたび親子連れの猪を見かけ、ほほえま

檸檬抄「家　族」……川上大輪・松本文子共選…(98)
一路集「初　」……米澤俶子選…(100)
「寒　波」……菊地政勝選…(100)
「松　」……土橋　螢選…(101)
初歩教室「詣　る」……三宅保州…(102)
秀句鑑賞「同人吟」……桒原道夫…(104)
「水煙抄」……高田博泉…(106)
■各地句会だより　城北川柳会……板東倫子…(107)
十二月本社句会……(108)
■句集紹介『私の川柳』(宮本三喜夫句集)……牛尾緑良…(112)
各地柳壇(佳句地十選/小玉満江)……(113)
柳界展望……(128)
一月各地句会案内……(166)
■編集後記(ひとこと/井上桂作)……希久子・朱夏…(168)



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑　(薫　風)

私の句

すぐ人を信じて溶ける角砂糖　小川　てるみ

しく感じたものです。

瓜坊のころころ人は子を産まず　愿

今にして猪ほどの子がほしい　智子

昔から人間と馴染みの深い猪ですが、秋も深まる頃になると、餌を求めて山を下り、強靭な鼻で畑を荒らすので農家の怒りを買います。先日もテレビで見ましたが、相当高い柵でも難なく飛び越えていました。

いのししの鼻おかしくも憎まれる　凡楽

いも畑荒らして猪は睡くなり　如水

また、猪肉は〝ぼたん〟と言われ脂肪分が多く、温まるので昔からよく食べられてきました。天武天皇四(六七五)年の殺生禁止の詔から猪・鹿の肉は除かれていたからです。味噌仕立てにすると美味しいと聞きます。

ぼたん鍋食べて心も熱くなる　孝子

雪冷えの自在に煮えるボタン鍋　伊太古

亥・猪のついた用語は、故事・ことわざ・植物・動物・昔話・落語・俳句・和歌・古川柳・苗字・地名・祭り・行事などあらゆる分野にわたっており、いかに人間に身近であるかがわかります。

余談ですが、日本人には亥年生まれのノーベル賞受賞者が三人もいます。年代は違いますが川端康成・大江健三郎・田中耕一氏です。亥年の皆さんの活躍と、今年生まれる赤ちゃんに大いに期待しましょう。

川柳塔

河内天笑選

この歳になった自覚がまだ持てぬ
感心をして聞いた句をもう忘れ
熱燗や鯛も鮃も養殖魚
労りと気づかせぬよう労られ
二三日会わぬと淋しバカかしら
母性愛かける相手を間違えた

堺市　矢倉五月

痛い目に遭ってやさしさ取り戻す
餅肌がサメ肌になり枯れてゆく
百均の刃が人も蕗も切る
泣き上戸時効の話蒸し返す
一冊の本がわたしを旬にする
チャンバラが好きな亭主の無精ひげ

松江市　銭山昌枝

親友の作詞だと言う歌に酔う
美酒とろり伯父の背にある日本海
泣いて極楽嬉し泣きする友と逢う

米子市　林瑞枝

虚しくて思惟の茶碗を伏せておく
風紋を歩く砂丘の大絵巻
はっとする美女に出会った森の中

吹田市　太田昭

翻す叛旗の陰にある迷い
邂逅の友草臥れた靴を履く
動物の形で眠る寂しがり
加害者の人命重く扱われ
振り向けば影も無言でそっぽ向く
紅葉の山の鼓動を聞きにゆく

美作市　大石あすなろ

留守電にひとり芝居を入れておく
引き出しの奥の過去とも握手する
八起き目も大根足で踏ん張った
年輪と共に居すわる皮下脂肪
元気を出せと小春日和が声かける
羽ばたこう賞味期限のあるうちに

永らえて恩ある人の名を記す
あいまいに生きて誇れるものがない
恥いくつ重ねて着いた現在地
ふる里の味にこだわる道の駅
謎解きが過ぎると潮が引いてゆく
背なを押す風が味方と限らない

弘前市　高橋岳水

ロマン咲く時計ストップさせておく
転ぶたび大人になってゆく毬よ
カレンダーの上を走っている人科
スタコラサッサあれはわたしの影法師
秋日和天女に羽化をしたあなた（澤裕子さん逝去）
豪快な笑い残して雲に乗り（谷季芳さん逝去）

鳥取市　倉益一瑶

百均の老眼鏡で見る浮き世
イナバウアーになっても耐えている案山子
あきらめか悟りか親父丸くなり
秋刀魚焼く煙たなびく路地の秋
新しい眼鏡で今日は翔ぶつもり
サングラスなんできれいな眼をかくす

唐津市　樋口輝夫

困一番立冬を忘れない
鉢巻がゆるんだままの国に住む
民主圧勝海のむこうの事でした

羽曳野市　徳山みつこ

人前は優しい妻で恐ろしい
落ち着いているのではないノロマです
私の怠け心とハッケヨイ

寝屋川市　森茜

ブロンディのアメリカだった頃は佳き
さっそうと出かけバス酔いしたツアー
ジーンズの微罪お尻がちょっと見え
故里はよそよそしくて光満ち
いじめる子される子同じ時流れ
どっぷりと墨含ませて書く亥の字

弘前市　高瀬霜石

賽銭はするがおみくじ引きません
目の前のハードルをまず跳び越える
貧しさも真ん中くらいかな妻よ
駆けっこは遅いが歩き続けます
出た後がさわやか風呂と美術館
釣り好きの話は終わることがない

芦屋市　黒田能子

ザーザーと降ればあきらめつくものを
惜しげなく老師手の内見せている
目をつぶり情けかけぬも思いやり
初心に返り見えてくるものがある
たっぷりと暇があるのに遊び下手
いち早く異変に気づき猫逃げる

吹田市　山本希久子

母います里　雪降らぬよう冷えぬよう
過去形にかわると苦労糧となる
世相とや世話女房は死語となり
風呂沸いたごはん炊けたと電子音
髪の白さよ失うことに慣れました
やさしい嘘わたしの扉開けて待つ

鳥取市　岸本孝子

七十の坂に似合った荷を背負う
不器用な泳ぎも味な夫婦旅
世話好きで情けごころが顔を出す
喪が続き笑い袋が干涸びる
福耳に惚れられ嫁にしてもらう
考えることは同じかくじ売場

鳥取市　岸本宏章

耳元で聞いた話は忘れない
灯油売る機械の指示が親切だ
打たれ強い子が代表で叱られる
客入りのまばらな店の無愛想
君が代に二番がなくてありがたい
万物に命もらった恩がある

堺市　村上玄也

砂漠化が進む大地も魂も
非常用バッグに酒を詰めておく
老犬を労りながらする散歩
責任がないから好きなことが言え
隠蔽が蔓延してる日本国
未熟でも熟練過ぎも事故起す

河内長野市　水谷正子

同窓会男三人姫九人
裏の裏知らずの批判止めましょう
ウインクをしたら平成十九年
猪よ猪突猛進ご勘弁
気苦労が多いか総理やつれてる
明日ありと思い眠れる有難さ

堺市　柿花和夫

ケイタイが伝言板を駆逐した
菊花展旅の途中の顔で見る
結んで開いて私の脳が始動する
納豆は真面目にまぜる反抗期
世事に鈍酒の味には小煩い
元日に国旗はためく過疎の島

鳥取市　鈴木公弘

まつたけの北朝鮮は遠くなり
気前いい訳が裏金だったとは
路線バス廃止高齢化のけじめ
憲法を読まない公務員が増え
未履修の科目が視野を狭くする
北窓に目張りとりあえずの自衛

砂川市　大橋政良

風の泣く声をしんみり聞く夜長
腑甲斐ない答えに舌の根が渇き
あせらずに半歩ずつでも前に出る
勝つための消耗品となる選手
捨てる日が命日となる蔵書たち

弘前市　須郷井蛙

よく食べて飲まない人が取り返す
個人情報うっかり署名出来ません
レジを出てすぐ割引の札はずす
雑巾が走ったような書道展
新道に村の地蔵がだだをこね

弘前市　福士慕情

カウカウと白鳥がくる朝まだき
セーターの虫食い妻へ見せる指
手袋も編まなくなった毛糸針
冬物のポッケにあった諭吉さん
これしきの雪にたじろぐ足と腰

弘前市　岡本花匠

まだ生きる五年日記の過信買う
真冬日の暖炉の至福ありがたい
寒雷や脅し文句に息を呑む
筆文字の友の賀状に達者知る
鴨鍋に食指が動く顔と貌

弘前市　今愁女

肌寒さ月光冴える十三夜
十三夜いよいよ澄みて栗熟れる
神の留守金の雨降る大銀杏
新蕎麦に呼ばれていった文化の日
石蕗の咲いて門口灯がともる

弘前市　櫻庭順風

作詞作曲自信でぴんと来ない歌手
和製ブルースすんなりと受け入れぬ
満州で口ずさまれて国内へ
別れのブルース魂のすすり泣き
流行歌手の地位を固めたブルースよ

黒石市　相馬一花

疑えばきりがないから疑わぬ
スランプの壁を壊して立ち直る
岩よりも硬い名前に憧れる
教養と美貌の牛につく高値
土壇場でダルマに化ける強硬派

黒石市　佐藤古拙

蓑虫の揺れ禅僧の貌になる
閉じよ胡麻呪文に難儀するブッシュ
セクハラよ大根足と言うなんて
熊がきた食をもとめて里に来た
七十路がなんだりんごの苗木買う

人柄はとてもいいけど口軽い
コロッケを見て想い出す母の味
妻の墓参りかかさぬ律義者
二十代迷い続けた日々でした
面倒見よい妻でしたなつかしい

十和田市　阿部　進

二日酔い朝からカラス鳴き続け
寝転んで一畳ふさぐ僕はゴミ
鬼灯が熟れて呪縛は流れ出す
少年の傷は赤チンを知らない
指切りが恐くて明日が眠れない

平川市　小寺花峯

大漁を見ればみすゞの声がする
人間のポストが出来る哀しいな
札束に踊る阿呆を見る阿呆
不愉快を笑って清まし自己嫌悪
恋多き女の言葉は自信満ち

さいたま市　星野育子

輪台をつける日楽し菊作り
輪台をつけ終えやっと俺が秋
マンションに菊鉢並べ秋を呼ぶ
八十路にも欲あり五年日記帳
八十路にも先輩が居て威張る人

さいたま市　八田　敏

寒波こぬうちにガラスを磨きあげ
子の辞書に我慢を知らぬ自己主張
法話中足を投げ出す祖母の膝
ハンドルにケチを付けてる酔っぱらい
少子化の加速が年金を叩く

日高市　根岸方子

菊持って行けば見事な菊の庭
学校の苛め教師の体たらく
世界史に皺寄せが来た五日制
体重減血圧までも低くなり
体力が衰える頃来る介護

柏市　永峰宣子

飽食へ欲求心が減ってくる
減量が熟女の魅力まで奪い
病弱の私に茶断ちの母がいる
ブランドを見れば平常心が消え
土手鍋に海の香りも入れて煮る

柏市　河野桃葉

元旦や北を外して三拝す
幸いへ向いて瓜坊猛進す
成人式恐る恐るで開催す
いのちの糸切る子は釈迦も救えない
義務教育終えたら食えるようにせい

佐倉市　岡井やすお

東京都　清原悦子

直筆の賀状が温い字で届き
吹っ切れた日から草木の芽に気付き
いつも見て通る神社に初詣で
枯れ急ぐ葉から真っ赤に染めてゆく
文学の香り溢れる城下町

東京都　岸野あやめ

猪も御馳走欲しい里の味
美しい国と総理の自画自讃
孫九人みんな子供は産まぬ主義
警察も大変ですな熊退治
ネグリジェの下にズボンを履くも年齢

東京都　小川賀世子

立食いそば姉と旅情に触れている
着ぶくれて足湯出来ない初氷
久びさの諏訪湖はどこか異国めき
落ち葉さらさら暦も薄くなって来た
孫来ると我が家はすぐにお祭りだ

東京都　長谷川康子

渋皮がむけた熟女に惚れ直す
関西でうどんの舌を鍛えられ
ドレス着た妻に気づかずすれ違う
バッグ買う女の乱は安いもの
美術館映画をハシゴ秋だもの

国分寺市　野崎勝

そのボタン押したら地球闇になる
お出掛けは通勤時間避けている
縄暖簾くぐって今日の無事を呑む
胃薬と縁切れになる定年後
古稀はまだ若いと友は事業主

八王子市　播本充子

新しい風を呼び込むのぞみ号
男性が霞んで見える同期会
胃薬を飲み飲みピンチ切り抜ける
泣き付かれふらり協力してしまう
裏切った人が頼れと書いてくる

武蔵野市　亀井円女

殖える皺立派な勲章かくすまい
欲は無しだが夢だけは人の倍
子供の瞳は正に神さま仏さま
十年前にガンを殺して今ケロリ
土も木もみどりも人を裏切らぬ

横浜市　小野句多留

出る釘になるヴェンチャーの勇み足
独り居のテレビ涙を隠さない
ボーナス日遠く聞いてる年金日
ちょっとした段差にころぶ老いの足
美しい国へ夫人の後ろ押し

横浜市　菊地政勝

モナリザの笑みを浮かべて妻出掛け
寝込まれて主婦の大役肌で知り
その事に触れると機嫌悪くなる
順調な老化と診られほっとする
流暢な祝辞に残るものがない

富山市　島ひかる

白檀の香りに義兄の忌がめぐる
煩悩をひと時消して経を読む
ごちそうさん一言に幸満ちてくる
考える葦で考えまだ足りぬ
真っ黒な雲が北から押し寄せる

可児市　鶴留百合

また浪費言われるだろう娘に内緒
孫がいて他所の子みんな可愛くて
目印が撤去で迷う待ち合わせ
わだかまり解けずに出向く重い足
事務服がうらめし山は抜ける青

可児市　板山まみ子

万端の準備のなかにまだ不安
数々の不安がつまる胸の中
どう見ても親子以外にない眉毛
若がえる手だて聞いても年は年
子供より親に我慢を教えたい

静岡県　薗田獏沓

性別は神に任せて嫁の腹
なすが侭妻の出す物箸を付け
きっかけは下駄の鼻緒をすげただけ
車座の座長になってビール注ぎ
盗み酒うぐいす張りの床が鳴る

愛知県　早川盛夫

呑まぬ日の一日ぐらいあっていい
生きて行くための生ゴミ粗大ゴミ
宴会の余興は下手な方がいい
一本の道を逸れたり戻ったり
善戦をしたといっても負けは負け

犬山市　金子美千代

困ったな外交辞令真に受けて
憧れた人の落差にショック受け
医学書を読んで納得した見立て
これ以上何を望もうガン完治
飲めるから接待役を言い付かり

犬山市　関本かつ子

仲良しのティータイムにもある嫉妬
前うしろ乗せてペダルとママの汗
良い方にとれば落ち着く胃の具合
寄せ植えの出来映え目立つとこへ置き
コンビニのおでんに夜の親子連れ

犬山市　吉田幸子

親指の傷で暮らしがままならぬ
幼虫の住家に堆肥乗っ取られ
コンバイン息子出番で日本晴れ
真夜中の暴走怪我を案じたり
張り替えた障子初冬の陽がまぶし

大津市　中宗明

理由なく相手を誹謗けしからん
秘めた恋炙り出しても苦にしない
戦場の体験談を子に伝え
帰郷してさびしい過疎地身にしみる
増税でこつこつ貯めた貯金減る

京都市　都倉求芽

夫唱でも婦唱でもなく五十年
猪が街を出歩く訳があり
路地奥に世界に通じる扉あり
お世話にはなりたくはない非常灯
拍手したいくらい喪主のご挨拶

京都市　高島啓子

お元旦少しうきうきする金魚
正確に葉書の届く現住所
カバの顔魔法にかかりそうもない
信用できぬ十時きちっと明けぬ店
アンケートとるのは自信ある旅館

亀岡市　井上森生

何思うシルクロードを往く駱駝（平山郁夫展）
汗かくと欲まで消える山登り
生かされた古稀ありがたく富士登山（来年こそは）
球魂が北の大地にビッグバン（日本ハムがアジア一に）
なせば成る愚痴もくるっと裏返し

長岡京市　山田葉子

ぬるま湯が好きじっくりとつかっとく
青い空帰りたくないブーメラン
コスモスがハミングしてる青い空
言い過ぎをたしなめている波の音
片方のガラスの靴がみつからぬ

八幡市　結城君子

柔らかい栗をみつける難かしさ
ひ孫来てバアバいっぱいと嬉しがり
秋の季を味わう暇のない暮し
孫嫁ぐロンドン寒さ気にかかり
ほん少し太ったような影ふたつ

大阪市　板東倫子

あきらめを悟りと思い生きている
新米のうまさしみじみわかる年齢
迷子札がわりケイタイ持たされる
つっこもかぼけよか仲裁むつかしい
秋本番熊が親子で柿食いに

大阪市　西川更紗

手の届く範囲で子等がいてくれる
寒鰤に熱燗つけて貴方待つ
盛り皿の鰯の中に器量良し
土壇場で浮輪を投げてくれた人
何枚も試着してから他所に行き

大阪市　福岡末吉

かたくなに父の座守る背を丸め
気にかかる途切れ途切れの医師の声
発言を質せば誤解と身をかわす
訥なれど孫の意見に気を貰う
宙を舞う方程式の解けた夜

大阪市　近藤正

脅したりなだめたりして六カ国
美しい国に不粋な基地強化
当確を開票前に出すテレビ
やらせたり漏らしたりして文科省
熱燗を健診終ってぐいとのみ

大阪市　川端一歩

いいことがありそう今年年男
好きな人さりげなく書く年賀状
古稀過ぎて歯の一本が惜しくなり
七十路の夫婦ゲンカはうつ払い
路郎語録挑戦すると書いて初春

大阪市　大川桃花

セピア色のハガキに父の紀州弁
ハガキから手紙へ愛が深くなる
覚悟して立てばすんなり席が空き
揺れる中うまいもんだなアイライン
無駄な抵抗くるくる変える化粧品

大阪市　池上清治

馬が合う訳でもないが五十年
就職の社で定年が迎えられ
馬の腹知らずに蹴って駆け出され
ちぐはぐで待たされること多い日だ
独り身の美食がたたる二段腹

大阪市　前たもつ

七十四歳若狭に集う同期会
美しい日本蘇洞門の海に見る
月五句の芭蕉に出会う気比神社
熊の出る話に旨い鯖の寿し
六年も生きるつもりの幹事決め

大阪市　鶴田遠野

媚びぬまま生きた男が病んでいる
おしゃべりにのど飴あげた日の不覚
来ぬ人を断ち切るように発車ベル
遺影だけ余分にくれた遺産分け
すぐに消すメールは妻に怪しまれ

大阪市　古今堂　蕉子

電話ファックスメールに手紙どれにしよ
紅さしてデイサービスのバスを待つ
かんにん袋緒が切れなくて破裂する
汚い手使って勝った夜寒かな
新米新酒ボジョレヌーボー好きな国

大阪市　井丸昌紀

追伸に見え隠れしているドラマ
言いたい事括弧で閉じた中にある
異文化が夜のコンビニ占拠する
文化人などと煽てて奢らせる
穏やかな笑顔で隠すあれやこれ

大阪市　中村叡子

梨林檎柿栗供え召し上がれ
膝折れず椅子に腰かけ経をよむ
夕御飯済むと夫はベッド入り
独り身の友を羨やむ罰当り
十六夜の月に誘われコンビニへ

大阪市　川原章久

稲荷山赤い鳥居に白い霜
今日だけは女になって高島田
止まり木にキャリアウーマン横並び
ドシャ降りの中駆けてゆく迎え傘
若い時の極道今は好々爺

大阪市　岡本久峰

男の意地やたらに頭下げるなよ
父さんはエライと賢母もち上げる
しょうもないメールが自殺そそのかす
音も無く赤字が増えてゆく怖さ
草履の子自殺なんかはしなかった

大阪市　小谷集一

良い人と言われ得したことが無い
留守電の声で用件すぐわかる
金のない方が楽しい夢を見る
ピンチには強いが情けには弱い
日曜日でも目覚ましはちゃんと鳴る

大阪市　清水絹子

少子化の手助け祖母の荷が重い
改革だ先ず矢面に高齢者
夫の年忌毎に元気が目を覚す
墓参り言い渡すのも姉の役
昼夜兼行励む臓器にただ感謝

大阪市　渡部さと美

美し国あまねく照らせ御来光
じいちゃんがやっと携帯受け入れる
野菜安喜んどれぬ温い秋
やぶれルック若さが光る長い脚
ライバル意識勝手にもって突いてくる

大阪市　小泉　ひさ乃

ささやかな幸せ今日の笑い声
見る夢がだんだんと似てきて夫婦
振り向かず明日を信じて種を蒔く
耐えること覚えた子の背抱いてやる
秋日和外にだあれも出ていない

大阪市　津村　志華子

一筆を添えた賀状の温かみ
農機具へ父は律儀に〆飾り
注文のお節は何故か味気ない
迷いごとふっ切れました鎌の月
年金の財布はいつも風邪を引く

大阪市　町田　達子

気分転換歳なりの旅考える
気候良い時は少しで長い冬
家いえのプランターの花眺め行く
千人塚の由来を今日も読んでいる
香煙が絶えぬ堤防の地蔵さま

大阪市　小糸　昭子

愛憎は紙一枚の裏表
針鼠針千本で子を守り
欲という字がこの子に足らないな
ガソリンを入れても車に酒いらぬ
白ワイン瓶詰うにがあれば良い

大阪市　川久保　睦子

運の無い男無駄口多すぎる
風向きで捨てた未練が舞い戻る
独り居に辛抱だけと書く日記
一本の藁に逆転かけている
みそ汁の湯気立ちのぼる大家族

大阪市　神夏磯　典子

世話好きな人だ荷物を持ってくれ
合図来ても喋り出したら止まらない
聞き上手相槌ばかりが物足りぬ
出ぬ答えちょっと道草してみよう
心臓が強すぎ唄が負けている

大阪市　津守　柳伸

御来光世界遺産に立つ至福
初日の出猪もしっかり子を守る
朝晩の風呂ゆったりと病除け
握りめし肌身はなさず旅馴れる
作務衣ではわかぬ情緒のお部屋食

大阪市　津守　なぎさ

旅鞄フル回転の行楽期
黒姫で民話にあえたいもり池
検査値に左右されてる身の動き
草原に牛つかの間の青い空
紅葉に白樺まじる赤倉路

大阪市　松尾柳右子

ウォークの合う人毎のオハヨサン
懐かしい記帳見つけた探し物
川づたいウォークあきぬ水模様
投げ入れの真っ赤なバラは貰い物
カマキリにちょっかい出して日が暮れる

大阪市　岩崎公誠

七癖を揃えて男自立する
非まじめとまじめの二面混ぜて生き
お開きのあとがいちばん盛り上る
割り勘で一気に飲んで救急車
美しい国で貧富の差が開き

大阪市　榎本舞夢

別べつに遊ぶ幸せ老夫婦
また一人楽しい友が増えました
やわらかい笑顔かわして騙される
おばあちゃん弟生んで孫の無理
同窓会老いらくの恋芽生え出し

大阪市　中村れんげ

長髪をぱさりと何かあったかな
臍の緒というテープ切る嬉しい日
怪しいと二の足をふむ年の功
やわらかく話して深い落とし穴
残時間余白作らぬ生き上手

大阪市　榎本日の出

減ってゆくサイタサイタのクラス会
核持って自爆しそうな国の意地
ぬか漬も生きものですと白い黴
売り言葉上手に買ってしまい込む
梅に桃さくらと会える散歩道

大阪市　伊藤博仁

ビール券まずは電話でありがとう
朝刊でまず日と曜日確かめる
寝違えて元にもどらぬ笑う筋
タコ焼きの手さばき見事舟で買う
生き過ぎと思う日もある七回り

大阪市　升成好

不文律それは心の奥にある
好きだから別れるなんてドラマだけ
滅入ったら迷わず好きな事をする
やわらかな言葉できつい叱りよう
猿にも劣る戦好みの人間よ

大阪市　熊代菜月

猪が出番待ってる年の暮れ
魚影追う夫の春はもう近い
病名を知らないままで旅プラン
ガス出たか医者はにっこりカルテ見る
残月よ今日の元気を見ておくれ

池田市　栗田久子

茜空なんとしあわせふかし芋
一振りの塩で魔法の味となる
苛めへの盾に命は使わせぬ
新年のカンフル剤にこの笑い
皺の手は硬いが笑みは柔らかい

和泉市　横山捷也

農を継ぐなれぬ手つきの鎌を研ぐ
誘蛾灯のような女の赤い爪
等分に分ける上手な母でした
悔しいが女房の側についた孫
種蒔いて秋の青空一人じめ

和泉市　西岡洛酔

堪え抜いたいじめに生きた今の俺
苛立ちの背中を諭す地酒なり
薬包に命預けて今日も暮れ
城域を守って豊か四畳半
手袋の白さガイドの爽やかさ

泉佐野市　山本蛙城

いい朝だ切取線が歪まない
喪中葉書へ悔みの返事友の愛
献立が賞味期限できまる主夫
ダイエットあれこれの果てキャベツ噛む
年末の漢字ことしは虐めだろう

茨木市　藤井正雄

帰国して日本の虫の声と寝る
耳でなく心で聞けという訓辞
言い訳の知恵を絞っている歩幅
寸法が合わぬか大工煙草吸う
ぎりぎりの家計学費は惜しまない

大阪狭山市　矢野梓

シグナルに気付かなかった大人達
コーヒーが飲みたくなったコマーシャル
用がなくなって出てくる探し物
思い出が邪魔して整理捗らず
捨てる気で出してた服をまた仕舞い

交野市　森本弘風

色づいて渋滞誘ういろは坂
鳴き竜は健気に凜と人混みへ
東照宮人人人の荘厳さ
咳き込んで妻も逃げ出す古希の風邪
追い出され病院へ来た古希の風邪

交野市　田岡九好

飽食の果てに薬膳料理あり
細長いうどんは立って食べるべし
ゲルマニウム入りのパジャマを着せられる
ゴッドイズラブとあるけど逆も良し
免許証見せて本人ですと言い

交野市　山川日出子

輝いて太陽の塔凜と立つ
五十年通天閣の誕生日
船箪笥底に隠せる仕掛けあり
新庄は花と笑いのある選手
エアギター優勝したよ日本人

河内長野市　坂上淳司

褒めるとこ無いかと懸命にさがす
リタイヤの団塊カルチャーで燃える
団塊の世代のスーツ着る案山子
受け皿にこぼして見せる立飲屋
漏れるのが楽しみここだけの話

河内長野市　山岡冨美子

戦いを未だ阻止できぬ人の知恵
うたた寝をしてる間に浦島に
ぼんやりとしている亀にある打算
身の丈でのびのび暮らす秋の里
リニューアルしたい私へ除夜の鐘

河内長野市　村上直樹

やっと古稀さあこれからが忙しい
悪知恵の働くうちはまだ元気
切れ味もますます妻の変化球
年金を食ってどっぷり白寿まで
句碑ひとつこれを墓標にするつもり

河内長野市　井上喜酔

連ドラの謎が茶の間で人気呼ぶ
タフな馬頭一つをぐっと出し
晩秋の山が燃えてるフィナーレ
食べる時だけは携帯切って置く
偶然が重なりあって三りんぼう

河内長野市　植村喜代

診察日帰れませんよ即入院（夫）
柿の木に柿ついたまま秋が行く
ひと昔をすっかり変えた現代人
いつまでも咲かせていたいバラの束
セレベスも入れて秋のまぜごはん

岸和田市　岩佐ダン吉

夢を追う汗ならたんと流したい
九条のどこが悪いと言いますか
清貧に甘んじてなどおりません
三万余自死が軽あるい記事になる
汗かいて私の策は体当り

岸和田市　原さよ子

ささやかな幸せこわす医療高
免状に恥じぬ心で花生ける
友訪えばせんじ薬の匂う部屋
虎屋のよと聞いて羊かんうまくなる
個性だと思い欠点とは気づかず

岸和田市　井伊東吉

霧雨の煙る高野の合祀祭（高野山合祀祭　4句）
塔刻む石碑を前に手を合わす
七曲り車窓に迫る朱のもみじ
高野来て大師偉業に思い馳す
起きるのが辛くなりだす朝の冷え

岸和田市　堤　楢代

戦争がない世界とは夢の夢
わいわいとガヤガヤですむ同窓会
老いてこそ生地むきだしはなさけない
しあわせを数えて生きる喜寿の秋
消し忘れテレビがわめく丑満時

岸和田市　土橋房枝

めでたさも人それぞれの賀状来る
にらみ鯛客寄せ付けぬお元日
心の奥見抜かれている神の前
新春もエプロン似合う妻の顔
ああしんど白足袋履いて三が日

岸和田市　森元ふみよ

指差され汚職天国恥ずかしい
恥知らず頭を下げりゃ済むのかね
いい加減聞き飽きました厳粛に
恥ずかしい行為広めるヒト科たち
ひと昔恥と言う事知っていた

岸和田市　雪本珠子

家を出る勇気をくれた冬の海
心配の虫がぼちぼち顔をだす
旅の宿二人じめした露天風呂
音楽が萎えた心に火をともす
ごめんねの一言で場が和みだす

堺市　石堂潤子

神様のいたずらですの丸い鼻
ごまだれで食べて居ります安い肉
散歩道どこ選んでもアスファルト
嫁さんに合わす火加減水加減
すっきりと片付けてまた物を買う

堺市　奥時雄

認知症テスト真顔で勧められ
聞かされてしまった秘密持て余す
すみませんパチンコでした文化の日
お裾分けしないと余るようになり
アルバムを閉じた姿勢のままでいる

堺市　加島由一

今度こそ本当らしい店じまい
先生と社長ばかりが来るお店
いいことがありそう美人から賀状
八十の恋を邪魔するものはない
四畳半ガラス障子がよく曇る

外人のうしろで見てる法隆寺
デパートのおせち売場に目を見張り
半袖のあくる日炬燵欲しくなり
窓ガラス目がけて鳩が体当り
遊んでるつもりのいじめ許せない

堺市　齋藤　さくら

助産婦の米寿を称えてる卒寿
旬の味生かした母のおばんざい
単線にワンマンカーの過疎の駅
過疎の駅タクシー有るか気に掛かる
故郷を恋う名士等の町起し

堺市　源田　八千代

ざわざわざわ秋の木の葉はよう喋る
薔薇が咲く心を覗きこむように
反省のし過ぎか疑問ふとよぎる
方言を辿ると母が現れる
クリスマスリースのドアをお住職

堺市　宮本　かりん

おみくじの大吉あれはきっとギャグ
豚まんのかすかに匂う心斎橋
病室に映える夕日やオペを待つ
髪軽く染めてうれしい退院日
しまい湯にコンニャクになり浮いている

堺市　志田　千代

朝いちばん場所とりにゆく運動会
入場門退場門の帽子たち
運動会すんで夕日がまっかっか
あさがおの棚をたためば秋だった
いつの日かいじめの自殺ゼロになれ

堺市　近藤　豊子

猪突猛進ついて行けない気弱な亥
瓜坊の前向きもらう回り年
快復に病歴競う待合室
元気よく細く長くと晦日蕎麦
使いすでに角が出てきたチルドレン

堺市　西村　りつえ

新しい暦に喜寿の年明ける
どっぷりの墨迸る筆始め
昂りを静めて雪は降り積る
文庫本一冊読んで夜が白む
食文化変えようもない御飯好き

堺市　山本　半銭

まっすぐを否定したがる僕がいる
君を知る前を詮索せぬように
愛という芯を基準に生きてみる
厭世の闇で仏の笑みと会い
霜の行すませ水菜が艶を増し

堺市　和田　つづや

四條畷市　吉岡　修

バーゲンの元正札は語らない
臍曲りらしく自画像描けている
もう一度会えるときまで生きてるよ
今に見ろ思うが僕は蛙の子
原稿の丸読み熱意見えてこぬ

吹田市　大谷篤子

お下げ髪猛アタックで夢を追う
奥さんと言われた遠い遠い日よ
持ち時間私いったいどのあたり
笑うたび命のグラフ伸びてゆく
絵はがきにおとぎの国へ誘われる

吹田市　瀬戸まさよ

勇ましい言葉の政治信じない
おいしいと聞いたそば屋で鉢合わせ
自宅より居酒屋がよし鰤秋刀魚
夢満たす思いは雑誌インテリア
知らぬまに命令口調長女です

吹田市　穴吹尚士

ストレスがあるのは呆けてない証拠
ケータイをしないと指が震え出す
そのうちに離婚したいと脅される
安物を買っては悔やむ繰り返し
美しい国にそのうちなると言う

吹田市　早川棲世

賀状また今年も一年生と刷る
鳥の目に地球つばさの下を出ず
薔薇が一番だろう読めるが書けない字
水族館にいる顔並んでいる車内
わが余生旅と病院　時々詩

吹田市　野下之男

負けた日は烏たちにも笑われる
関白に成り損ねては仕事増え
思い出は初サラリーの母の顔
モネの絵に何故か好かれる日本人
私等は柿でもあれば良いのです

吹田市　須磨活恵

新年を迎え節目の年おんな
気がつけばあっと言う間の七十年
試行錯誤まだくり返す古希の坂
初詣で無欲になって鈴をふる
孫が来る張り切っている五目飯

吹田市　木下敏子

身の丈に合うた秤で生きてゆく
どの辺が年寄りなのか医者に聞く
鍋かこむ笑顔で今年締め括る
なるようになるわと前へ行く踵
ありがとう今年も書ける年賀状

高石市　浅野房子

波瀾万丈ひとごとならば面白い
常識で計れぬ世相裏返る
あきらめの早さは自慢にはならぬ
一つミス二つ三つとつづくミス
親がいる孫の心配する勿れ

高槻市　大﨑侑子

開運の兆し見えたが尻すぼみ
余所目には幸せに見え火の車
手相見の言うほど運が向いてこず
娘の姑と何とはなしに馬が合い
これからもゆっくり馬齢重ねます

高槻市　傍島克治

気短かと言われて直ぐに怒りだす
空咳の意味をさとって欲しかった
父には閻魔孫には菩薩母の顔
点呼ばかりする老人ハイキング
頭髪の豊かな遺影使いたい

高槻市　生田義一

眠れない秋の夜長はナツメロで
秋深み三日続きのおでんの香
しんどいです医者やんわりと歳ですな
名も知らぬ赤い花咲く散歩道
ついてないまたも出会った嫌な人

高槻市　執行稲子

躾です手加減をしてちょい抓る
がっかりだ夢の中だけ逢えた彼
私にも一生守る自負がある
嫁の笑み無愛想だが憎めない
あいつとはウインクで済む好い絆

高槻市　左右田泰雄

中座する客は目立たぬように消え
たてつけの悪い障子を開けたがる
泳がせて悪の根城を突き止める
街灯がまだついている霧の朝
入るとこ別だとおはぎまた食べる

高槻市　西谷治三郎

少子国野猿と年寄り増えている
国技館この名も改革しまへんか
税務署に睨まれていた頃が華
同じ酒飲んで泣く人笑う人
道草ができず二列で登下校

高槻市　佐甲昭二

一日のリズム狂わす休刊日
コンビニに虎のニュースを買いにいく
あの人がいつも絡んでいる噂
白旗は掲げぬ妻の無言劇
旅先のドラマが染みたパスポート

高槻市　富田美義

意地のまど開いて閉じて生き延びる
不納得の受信料まだ払ってる
アバウトな記憶あつめてモンタージュ
萎びかけ隠すいつしか厚化粧
死神に見せるためです旅プラン

高槻市　瀧本きよし

遊び癖消えないうちはまだ元気
同窓会やあヤアやあと手を握る
髪メッシュ入れて小粋に洒落た母
カラオケは元気老人生む薬
揶揄された傷をぬるま湯で洗う

高槻市　井上照子

嘘ついてシャワーで流す自己嫌悪
理路整然きびしいメール送られる
教育は何かと聞きたい昨日今日
十六歳母になったと親泣かす
ポインセチア葉の化け方を考える

高槻市　杉本義昭

足跡をたどれば悔むことばかり
子離れの夫婦にもある小さな秋
退屈な奴だが何故か外せない
親ゆずり頑固な色で生きている
逢える日が私の心弾ませる

高槻市　指宿千枝子

携帯をのろし代りにしています
立ち止まり力を溜めて歩き出す
食卓の雑魚は国産無漂白
ばあちゃんの髪が紅葉に染まってる
咲き終えてバラはゆっくり冬支度

高槻市　乙倉武史

殺伐な世に人情が廃れゆく
使い棄て哀れ小泉チルドレン
無人化で灯台守が死語となる
お医者とは疎遠薬屋顔馴染み
歳と共身近になった神仏

豊中市　吉田あずき

一年の命寿ぐ屠蘇の味
この先のドラマを神に委せてる
待たされて策戦変える応接間
無駄いっぱい混ぜてあるからやわらかい
さりげなく春がどこかで待っている

豊中市　江見見清

何だって美味いといえる味音痴
坂の下坂だと脚に言いきかす
台風で家族揃ってとる夕餉
嘘ひとつ言えない人といる不安
胎内にドラマの幕の開く鼓動

豊中市　山門タミ

リュックからお守りゆれた紫香さん（亡き紫香さんを偲んで）
画材にと枝葉のついた柿もらう
召されたい言いつつうなぎ美味しいね
一人住み早寝早起き昼寝して
風邪引いた少しお利口なったかな

豊中市　安藤寿美子

猛進も猪突も出来ぬ年齢である
ウリ坊の頃は何でも可愛いらし
石にしてやるぞ魔法が使えたら
ケセラセラ酒の魔法はありがたし
本心がバレたら放り出されそう

豊中市　岸田知香子

血統犬家族いやした十五年
小商い惜しまれ閉める機会（とき）を待つ
閉店の決断八十路の小商い
三十年主婦店守った己ほめ
人生の潮時探す決断日

豊中市　藤井則彦

親も子も忘れて見入る競馬欄
早まった拍手に揺れるピアニスト
七三に分けた男の吐く駄洒落
悔しさが教育ママを駆り立てる
祝日を増やすときにはみな与党

豊中市　水野黒兎

旅に出てゴム風船のこころもち
寝るまでに百度合掌タイの旅
おやまあで電車一本やりすごす
七千歩あたりで暮れる万歩計
宴果てさてラーメン派カラオケ派

富田林市　藤田泰子

百均のハサミだけれどよく切れる
飲み放題下戸の私も二三杯
まだまだといつも暗示を掛けている
秋の空人目気にしたことがない
食べねばと思って食べる朝ごはん

富田林市　大橋鐘造

病院で貰った風邪をおすそ分け
汗一つかかぬ他人が口を出す
快復へ五臓六腑の機嫌とる
清濁を呑んで大河となる男
一言が味方の数を左右する

富田林市　片岡智恵子

別れ際ほんと親しくなるツアー
化粧して隠せる歳はすぎている
押されても線路に落ちぬとこで待ち
寒つばきに心遊ばせ散歩する
過去少し捨てながら行く老いの道

富田林市　中井アキ

清濁を呑んで漢(おとこ)になってゆく
ぴったりの影が時々謀叛する
素っぴんの君が一番美しい
如意棒が欲しい日もありひとり住み
シングルライフしなやかにしなやかに

富田林市　池森子

ワンチャンス逃がして振り出しに戻る
お金ならたっぷりあると言うておく
ピンチからチャンスへ紐を締め直す
本心をどこへ置こうか迷い箸
秋が来るたびに埃をたたいてる

寝屋川市　籠島恵子

わたくしの弱いところのカタカナ語
耳そうじしながら愚痴を聞いている
凪いでいる飛行機雲を追いながら
絵手紙の中ではらはら散るもみじ
七癖をみんな見せてるのがわたし

寝屋川市　冨山ルイ子

腰痛の手術こわがらずに俎上
まだ六十路友の孤独死悲しすぎ
限りある命大事に生きていく
同居中孤独死などは考えぬ
私へは二の次三の次にする

寝屋川市　坂上高栄

いつの間に過ぎた平成十八年
夢と過ぎ米寿を子等に祝われる
得手勝手四捨五入して生きてきた
性善説恥じらわぬよう経を読む
一杯の水のルーツに感謝する

寝屋川市　江口度

病室の患者だんだん減ってゆく
有難いことに耳も言葉も確かです
入院見舞何と悲しい別れだろ
煙草やめられたのがせめてもの効果
看護婦の気持を先に読みとろう

寝屋川市　平松かすみ

田舎なら離れ程度の仮住居
明日壊す感謝をこめて拭き掃除
洗濯機の上で炊飯しています
風呂敷がとても重宝しています
夢にまで捨てたミシンを悔いてます

寝屋川市　太田とし子

豊作をめでて案山子もニューモード
心とは裏腹ながらお目出度う
三ヶ日過ぎると歳が板につき
のんびりと蜜柑むく日が来たわいナ
横向くな後ろ向くなと猪が走る

本人が一番酔えぬ祝い酒
人生へ偶然があり二度三度
何もかも知っているので疎外され
数学の時間になると眠くなり
初恋の人にそっくり終電車

羽曳野市　酒井一壺

この眠り朝の来るのを信じてる
光源氏女を見るとすぐに惚れ
退屈を楽しむような年になり
笑顔だけはやはり万国共通語
死ぬほどのこともないので生きている

羽曳野市　三好専平

三界に家あり女の今昔
身辺整理急かす凩窓たたく
手も足も健やか神の贈り物
女だてらに合羽からげたこともある
飢える子のニュース見ながら食べ残し

羽曳野市　吉川寿美

波風を避けてピエロを演じきる
栄転の友を見送る寒い駅
期待した金の卵が孵化しない
責任のない手を上げる多数決
点滴にただ祈るしかない命

羽曳野市　安芸田泰子

太陽がくれた大きなさつま芋
容赦なく貧乏人を増やす国
思いのまま口にするなと温い友
気が弱くなったと思う夫の顔
遊びぐせついてしまった予定表

阪南市　森村美花

初春の空へ勇気が湧いてくる
どっぷりと家族に浸かる三箇日
父母と居た若いページがあったかい
文化には無縁の母の背が丸い
路地裏で羽根つきしてたお正月

東大阪市　北村賢子

二世帯の文化時時軋み出す
熱燗を一寸テストと病み上り
娘の産着孫が着ている七五三
快癒する友を尋ねる杖弾む
認知症母のドラマが歩き出す

東大阪市　笠井欣子

人生のツボ教えてくれた縄電車
ローン済み肩の荷やっと取れました
オーケストラの指揮に魂乗り移り
邪気払う整理整頓怠たらず
一週間の早いこと速いこと

東大阪市　安永春

東大阪市　佐々木　満作

価値観が違って二人遠ざかる
松茸の香りを嗅いできのこ買う
ばあちゃんの粋な着こなし板に付き
癌告知されても止めぬ酒タバコ
お月さん心配そうに見る地球

東大阪市　米田　水昇

金の波稲穂がゆれて平和です
誘われるときめきがまだ残ってる
よっぽどねおのろけばかり言うたはる
世渡りの奥の手早々見せられぬ
雷鳴に夢破られて身がまえる

東大阪市　谷口　義

弁当は各自持参と書いてある
昼ごはん食べてからでも遅くない
正確に覚えて正確に忘れ
凡人は凡人らしく酒を飲む
新しい月が出ているわけでない

枚方市　荘司　弘之

ごみ拾い袋にいっぱい恵比須顔
イヤホーンつけてジョギングリズミカル
早朝に夫婦で勤しむ畑仕事
ダイエット月も一緒に走ってる
黙黙とゆっくり散歩老夫婦

枚方市　寺川　弘一

スッピンで今日は介護のボランティア
式場を予約してから返事聞く
エレジーを上手に歌う幸せな人
三途の川を漂いました癌手術
昔の虹を忘れられないシャボン玉

枚方市　宮川　珠笑

棺桶で微笑むために生きている
つり待っていたら値上げをされていた
後家にまだなれず介抱強いられる
まだ笑い足らず死神追い返す
自信ない教師いじめに加勢する

枚方市　森本　節子

探しもの出ずにゴキブリ顔見せる
平日の清荒神かんこ鳥
あからさま口に出さぬが娘に感謝
秋の叙勲紅白のおまんをお相伴
お茶こぼす勘の鈍りも年のせい

枚方市　二宮　山久

お勤めも慣れて心も日本晴
孫の声しっかりしてきた電話口
コスモスがゆれてかろやかペアシューズ
すすきの穂ゆれて伊予路の夫婦旅
九十四歳母は達者な顔を見せ

枚方市　伊達郁夫

砂時計残りページを急がせる
断わりを妻に言うほど勇気ない
お地蔵の枯葉を払うランドセル
一滴のレモンが午後を和ませる
外人が笑うと仕方なく笑う

枚方市　海老池洋

ハードの僕にソフトの妻のいてくれる
脱皮してみてもやっぱり蛇は蛇
一番の突っ支い棒はやはり妻
人生の始終を包む紙おむつ
過熱気味びっくり水を注してやる

枚方市　丹後屋肇

アンパイアマスクが有無を言わせない
点滅のネオンが似合う地べた族
挑発にはじける堪忍袋の緒
ストレスの糸がほぐれる映画館
鉢ごとに一句を吊す坂の菊

枚方市　安達忠央

幸運をただひたすらに待っている
実力は運と努力のかけ合わせ
連休は我が家の庭師樋修理
惜しかったコンマ2秒のディープくん
調教師可愛がったり躾たり

藤井寺市　楠昭子

強がりの男の孤独月が知る
遊びとはいわず研修旅行という
減量の苦しみ知らぬ体重計
うぬぼれの強い夫婦で軋み出し
どっぷりとつかって疑問のない怖さ

藤井寺市　鴨谷瑠美子

聞く耳を持つとこころが丸くなる
寺にいる鳩に警戒心がない
身籠った気配ウエストしめてない
ロープウエイ紅葉の中へ溶けてゆく
女坂まだまだ足も鍛えねば

藤井寺市　鈴木いさお

貧乏も夫婦二人でなら平気
若者が集まる場所はおっかない
生きてさえいればその内いいことも
見た目ほど怖くはないようちの人
本名を呼び合ったこと無い夫婦

藤井寺市　高田美代子

珍しい人と出会った初詣で
三食を気ままに食べてボケはじめ
平服でおい出下さいとはあるが
つくづくと口約束の頼りなさ
引き潮に載っかるのにもタイミング

藤井寺市　中島志洋

初詣で神と仏を梯子する
青い鳥探し続けてもう卒寿
新年の誓い日記に書いただけ
盛装の妻を見直す初詣で
おしどりの夫婦で干支は戌と申

藤井寺市　若松雅枝

美しい朝日に光る蜘蛛の糸
隣から鈴成りの柿顔を出す
蝉殻を一つ残して冬の薔薇
手入れせぬ庭に野菊が咲き乱れ
へそ繰りも無用一人の侘び住居

藤井寺市　太田扶美代

恐竜の骨観てからの骨粗鬆
似合うよと言われた服が着られない
マンネリを抜け出せたのは妻の知恵
拗ねるのは止めた謝ることにした
赤ちゃんのヨダレ囲んでいる平和

箕面市　出口セツ子

息子より夫に自立して欲しい
書くことがない幸福もある日記
神様の愛で試練が続く道
ポケットに優しい嘘を溜めておく
元気出る魔法の言葉欲しい暮れ

守口市　井上桂作

人生は父に習ってまわり道
よくばらず至福な暮らしいつまでも
老いの道自我を忘れて生きらねば
弱音などはかぬ我が身に誇りもち
改憲論核実験で拍車かけ

八尾市　高杉千歩

いのち万歳初春の血圧平行線
七度目のお正月です仏さま
自動ドアガタガタ私軽すぎる
改札を出て間違いと知るネオン
ハーモニカ探す昔の宝箱

八尾市　長谷川春蘭

缶ビール冷やして聞いてほしいこと
贈り主わからぬままのバラ香る
ラブレター出して一面落つばき
兄妹の如く色なき風の中
枝豆が届いて里の兄達者

八尾市　山本宏至

間抜け面じんべい鮫に笑われる
抜かれても亀はすこしもあわてない
酒好きの悪名ばかり知れ渡る
花椿疑い持たず地に帰る
影だけが何も言わずについてくる

八尾市　生嶋　ますみ

シクラメン買ってストレス捨ててくる
雑談の中から見えるお人柄
水加減覚え男の台所
幼子の思わぬ問いにうろたえる
歴史また産めよ増やせよ繰り返す

八尾市　村上　ミツ子

ぶらぶらと桜紅葉に誘われて
うまい米買うぜいたくを許されよ
老いてからあぶない橋は渡らない
お互いに好きなことしている夜長
うれし涙と悔し涙のいい握手

八尾市　吉村　一風

年金に遊びごころを叩かれる
矢印ない人生だから面白い
赤トンボ二匹からんで青い空
墓の守り野菊ひっそり咲いてくれ
ありがとうさっと出てくるようになり

八尾市　宮﨑　シマ子

御近所さま世話になりますよろしくね
真剣にお墓の広告探してる
全てできなくていいんだよ妻よ
お天気が荒れずにほっとした案山子
半音を上げた線から祝い唄

大阪府　米澤　俶子

軽い罪視点かえれば許せそう
年金にとても大事な夫です
幸運の来そうな道はあけてある
諦めた数だけ老いが近くなり
慢心は時折洗い流さねば

大阪府　籾山　隆盛

めでたさはこぼれてもよし喜寿の酒
一年へどっこいしょのよいこらしょ
元朝の夢をつんざく救急車
はずまない毬へ吹き込むサプリメント
阪急建て替え昭和も遠くなりにけり

大阪府　澤田　和重

思いやる心でイジメなくしたい
底辺で笑うしかない暮らし向き
キッチンの中で男も脱皮する
当然のように前例くちに出す
ライバル視されているから頑張れる

大阪府　前田　ゆい

この年も無事に迎えた三世代
孫達の目もきらきらとお元日
ひそやかな平和燦然陽のまぶし
粛々と平和公園歩く人
軍拡へひたひた大和ミュージアム

大阪府　桑田　ゆきの

神鈴を振れば煩悩解けてゆく
蟷螂は枯れても鎌を振る構え
家計簿の狂う医療費頭が高い
冥途へは持って行けない裏の金
ぽちぽちと脳に差しいる潤滑油

神戸市　山口　光久

父と母教科書にない手本です
向き合えば自ずと解ける蟠り
かたくなを解くと世間広くなる
火傷ぐらいで改めません向う見ず
抜け道を覚えてからの怠け癖

神戸市　山田　婦美子

大声で笑って秋と握手する
割引券入れて膨れている財布
生きている証今夜も眠れない
過去たちを集め絵巻にする夜長
雲海の上ひょうひょうと春の夢

神戸市　池田　善守

大切に世界でたった一人だよ
人間の花はきれいな笑顔です
欠点長所ときと場所とで逆になり
元気印の仮面を捨てて一休み
景気回復貨物列車が長くなる

神戸市　田中　章子

また次の夢を信じてスクワット
岐路に立ち石を蹴るしかないわたし
ほほえみを返されうれし畦の道
家の奥見せて仲良くなった友
風紋の美やはり自然に勝てません

神戸市　山口　美穂

新米がおいしくダイエットは日延べ
ゆずられた席へ素直にありがとう
バーゲンで見つけた一品Lがない
老犬が散歩を嫌う今朝の冷え
澄んだ空気を届けてくれる旅便り

神戸市　伊勢田　毅

旧友が夫婦の火種おこしてる
孫三歳電話口から東京弁
談合という餌で票を釣りあげる
木枯し一番ぐっと師走が近くなる
黒を白へ政治家オセロ得意です

相生市　中塚　礎石

八十路には何でもうまいものばかり
人物を描けば私の目に似てる
通夜の席男が一人賑やかな
鉛筆の芯は手前に向けて置く
飽食へ粥に梅干しうまいこと

尼崎市　軸丸勝巳

懸崖の菊見事さに後ずさり
いじめにも耐えて盆栽見得を切る
辛いなあ蔦を切り取る甲子園
葉ボタンを一鉢植える年の暮
立冬の今日がほんまの衣替え

尼崎市　長浜美籠

一年先わからぬ神のあみだくじ
昨日とも今日とも違う明日を待つ
じゃあまたの声を背にして秋の街
昼さがりのんびりと古紙回収車
秋色に染まり洗濯取り入れる

尼崎市　田辺鹿太

化かし合う夫婦至って仲が良い
チャンバラの好きな父だが穏健派
ライバルがサラブレッドに見えてきた
境界を守る恋ならしています
雑草の根性を知るアスファルト

尼崎市　春城年代

紙魚走る父の日記の皮表紙
足をさすって腰を摩って立ち上る
駅から徒歩十分の距離縮まない
気取って散歩おもちゃみたいな犬連れて
駅で待つひまごが小さい手を振って

尼崎市　春城武庫坊

八十路半ばを二人で越せて幸せだ
いのししにあやかり余生前進だ
夢は夢それでも目指す生きる道
小商い人情が客を招いてる
健脚を誇った脚も黄昏れる

尼崎市　林昭三

一つだけ時効になった弱味持ち
赤飯を炊くほど目出度くないと言う
我が町の名工もまた変り者
どっぷりと独身貴族の夏休み
本人は充電中とぶらぶらと

伊丹市　山崎君子

世界は一つ尊い命守らねば
我が呆けに知らされました今日のこと
従姉は待ついも南瓜もいとこ会
いとこ会今年も逢えた五人の涙
チャングムの幸せを待つ土曜の夜

川西市　米原雪子

つまずいた段差を睨む老いの足
運動会ビデオカメラもいそいそと
プランターで実った茄子がいとおしい
目分量祖母のキャリアが物を言う
けつまずき大失敗の忍び足

川西市　西内朋月

押入れに封を切らない引出物
御機嫌で音痴が歌う仕舞風呂
スーパーのちらしでおかず考える
薄っぺらな松茸入れた茶碗蒸し
白菜と豚だけでよいキムチ鍋

三田市　堀　正和

朝風呂の疲れを癒す朝の酒
土産などいいのにと言い両手出す
喜びのあとについてる請求書
スランプを赤いシャツ着て切り抜ける
うっかりと聞いていました誉め殺し

三田市　久保田千代

意思疎通はかる心のドアは開け
居心地が悪くやっぱり席動く
生き方を雲に問う癖ついてくる
振り返り何をそんなに走ったか
原点にもどる素直さ持ち合わせ

三田市　石原歳子

田園の文化ホールが人目ひく
ご無沙汰を詫びて電話に頭下げ
へそルック立冬来ても流行ってる
家事合間軽い体操リフレッシュ
友のソロ緞帳おりてまだ拍手

三田市　北野哲男

浄土より慣れた浮世の方が良い
三回も全身麻酔喜寿を越す
駐車場落語の落ちを聞いて降り
五百円幅をきかせる小銭入れ
父の忌の仏飯にする栗ごはん

西宮市　坪井孝一

ライバルが昔の手紙持っている
一行でライバルになる一筆箋
白いエプロン母の威厳を見せつける
合コンでしゃべりの男女の目
グラスの底近頃夜叉が出て困る

西宮市　門谷たず子

声帯がすこし戻って秋さやか
神さまの手の内見てるCTスキャン
すこし狂ったシナリオ闇が深くなる
ときめきはとうに忘れて菜を刻む
ひとり歩きの迷路に月が肥えてゆく

西宮市　井上松煙

こうのとりに切ない運をかけている
ちょっとの油断が一生つきまとい
親友は喋らなくても通じ合い
遺り残し多くて忙しい余生
ITの時流に乗れず庭いじり

西宮市　緒方美津子

ぎっくり腰行末思うテレビ漬け
青空の下にだけ咲け秋桜
休肝日娘蟹味噌さげてきた
銀婚に甘さ残っていたやろか
フルムーン相槌うまい旦那さん

西宮市　亀岡哲子

一人旅するならやはり日本です
薬局でお喋り元気貰うてくる
高速の道路の下の過疎の駅
赤を着て負けず嫌いに変身す
転んだら難儀ですよと諭される

西宮市　片山忠

目を見ない夫にお茶をはいどうぞ
定年後包容力を計られる
男運悪いらしいぞ僕の妻
残る歯を較べ合ったりして夫婦
貴男にはやはり私が合うみたい

西宮市　菊池トミヱ

あかね色つるべ落しに夕暮れる
沈む日を昨日もここで空眺め
秋晴の山小屋今はレストラン
ナナカマド今年もきれいに赤となる
草もみじ夜来の雨に色増せり

西宮市　秋元てる

米寿なお叱ってくれる友が居る
残り僅か心行くまで甘えさす
薬飲むために生きてるような日々
余裕綽々のつもりらしいが絵にならぬ
雑草のようねと褒めているつもり

西宮市　西口いわゑ

在りし日の母の笑顔に似た月よ
シャボン玉色とりどりは恋の彩
母がいた甘い空気へ子等がいた
いつまでもばらを咲かせていたい胸
これからも夢を追いかけ生きていく

西宮市　山本義子

元旦も同じ顔してみかん剥く
世間並のご加護いただき三ヶ日
年頭はすこうし法螺を吹いてみる
もう少しお洒落なさいと冬の言
不安定な身の回りでも三度食べ

西宮市　牧渕富喜子

親指の爪の変形親不孝
鍋焦がす身辺整理ふと思う
自由とは気まま深夜の水の音
神さまのお試し期間ハイチーズ
乱れ咲くほったらかしの菊香る

姫路市　古川奮水

カサコソと落葉が歌う散歩道
輪になったローソク点す誕生日
励まして労り合うて五十年
酌み交わす男の酒に冷やは無い
瑞雲へ軸取替えて屠蘇を酌む

兵庫県　大谷幸次郎

ちゃぶ台で飲んだ昔の酒の味
老残に咎めるように税の鞭
核実験して居丈高北の国
昭和初期若い者には大昔
百薬の長と雖もほどほどに

奈良市　天正千梢

木漏れ日をわけて八十路の夢さがし
あの頃は日本にあった力瘤
好奇心ふるい立たせて眼鏡ふく
いつからか突っ支い棒をたよりにし
親ばなれとっくにはなす浮き袋

奈良市　米田恭昌

孫にもう本気出さねば勝てぬ歳
鳶が輪をかいて昔を探してる
夫婦喧嘩チャイムの音に救われる
正倉院展如意は孫の手かも知れぬ
十重二十重人人人の正倉院

生駒市　飛永ふりこ

亥の生れ矢面避けず突っ走る
大吉の神籤出るまで年女
胃の中がやっさもっさの三箇日
見るたびにモネの睡蓮深い無が
大根に虫が葉の中かくれんぼ

橿原市　安土理恵

ペアグラスもう存在の意味がない
外は雨大泣きしてもいいんだよ
痛いなあ弱いところを衝いてくる
テスト期間だから入籍していない
下ごころ見抜いてからが面白い

橿原市　居谷真理子

新築の祝いに褒める木の匂い
5センチの視野が広がる中ヒール
乾いたらスリルとけます赤い糸
うれしさは二人にちょうど傘一つ
お隣のダンナはジャムも炊くという

香芝市　大内朝子

今年こそお寄り下さい福の神
迷路抜け春風に会う深呼吸
大好きなひとも一緒に老いてゆく
長生きへメタボリックを寄せつけぬ
錆びついた脳のエラーにぞっとする

大和郡山市　坊農柳弘

歳月をゆるりと解く除夜の鐘
めでたさや氏神さんのお賽銭
鈴を振る巫女のすり足初神楽
山茶花の赤ほろほろと冬日和
年玉の値踏みしている孫五人

奈良県　渡辺富子

まっさらな気持でふたり屠蘇を酌む
常識をはみ出す君にある魅力
君の彩にすっかり染まり黄昏れる
妻の愚痴ほどほどに聞き鍋つつく
縺れ飛ぶ蝶の明日にある別れ

和歌山市　福本英子

渡り鳥来る頃赤くなる千両
一夜明け庭から赤い実が消える
へそくりはしない一人になってから
書き置きをしても誰あれも見てくれぬ
ヘルパーを頼り出席〇印

和歌山市　木本朱夏

途中下車キンモクセイが誘うから
車窓から海見えやっと旅気分
指輪はずし私の秋を模様替え
文化人の端くれにいてよく喋る
手の皺が増えて下層を抜け出せず

和歌山市　古久保和子

イルミネーション椋鳥は眠れない
深爪の缶コーヒーが開けられぬ
虫付きの野菜で品質保証する
北風へ首も尻尾も引っ込める
この坂は父の荷車押した坂

和歌山市　堀畑靖子

線香がたえない寺にある祈り
内部告発の勇気は買いたいな
環境の変化無視したプロジェクト
折れそうな時に支えてくれた君
共和党敗けるアメリカ変わるかな

和歌山市　武本碧

未知数の明日を信じて種を蒔く
下草は下草なりの生きる知恵
真実を見たくて曇りガラス拭く
鏡相手に自問自答をくり返す
ハードルを一か八かで跳ぶ蛙

和歌山市　田中みね

人それぞれ貯金へ命燃やすのも
事後承諾雑魚の叫びが聞こえるか
気がつけばおっと貴方は偉い人
うっぷんの種が弾けている寝言
チャンス到来悲願の椅子を手に入れる

病院もいかがわしいと疑われ
刑務官欲に目暗みて首をつる
不明朗で背任容疑次つぎに
酒気帯び運転するの跡たたぬ
痴漢した相手生憎女警さん

和歌山市　宮本三喜夫

今ここで下手に動くと割を食う
正月の記事は明るいニュースから
二つ三つ持って気にせぬ矛盾点
葛藤の日日甦える古日記
出来のいい子はふる里を捨てて行き

和歌山市　喜田准一

パソコンがフル回転で書く年賀
なりゆきで法螺を吹きたい時もある
気前よくはずればかりをくれる神
走らねば消えるわたしの虹の橋
泣きに来て月にいただくいい答

和歌山市　上地登美代

ファックスで息子に活を入れている
全自動うっかり止めて御破算に
許す気になって踏み絵をふんでいる
音を上げる心と戦しています
終着へ押されてるよな日の早さ

和歌山市　山口三千子

しなの路の旅は紅葉の真っ盛り
受賞する日に相応しい紅葉晴れ
新そばよおいでおいでと呼ぶ暖簾
持っていける訳でもないが貯めてはる
水面下の様子知りたいあめんぼう

和歌山市　玉置当代

旅日記いつも笑顔の亡夫がいる
風が押す霊感信じ生きている
豆台風去って鏡に向く私
リセットの人生癒す始発駅
旅心満足させる現在地

和歌山市　松尾和香

種明かしされてお腹が空いてきた
残りもの食べて上がった血糖値
紅葉の始まり山がふくれだす
夕焼けへとけこむバスに揺れながら
水ゴクンゴクン明日が動きだす

和歌山市　楠見章子

風の吹くままに流れて孫嵐
神からの授りものが元気すぎ
なぜなぜの嵐が思考かき回す
飛びとびの話も聞き分ける年季
よく遊びよく食べ寝相またすごい

和歌山市　榎原公子

毎日に母を案じる子の電話
真っ先に紅葉知らすナナカマド
温めて温めて寝る霜月よ
パソコンにはまってからの不眠症
小春日や蝶数匹に見舞われる

海南市　堂上泰女

もらう嬉しさを思って書く賀状
富士山を世界遺産にできぬ恥
かくれんぼだろうかみんな消えてゆく
ＭＲＩはさながら宇宙船
無印の男に油断してしまう

海南市　三宅保州

必修へペンダコ痛む受験の子
紅葉狩り異常気象で待ちぼうけ
乱入は許さぬ猫のテリトリー
乱となる花を男は見抜けない
僕の渋ドライアイスで抜けたなら

松江市　松本知恵子

優しそうな人だ道連れにして貰う
雨の日は雲の下から陽を拝む
箸二本あれば唄える安来節
花のスカーフ巻いて心を暖める
拝まれてしまった病気の母さんに

松江市　松本文子

少子化策小さいいのち大切に
念入りな助走ばかりで飛び立たぬ
もう少し見ていたかった夢が覚め
平成の合併日本模様変え
陽があたるバストが揺れる若さかな

松江市　小川注湖

友の訃にぽっかり空いた胸の中
ビロードのような花びらいとおしむ
うっかりが重なりバッグ置き忘れ
ウインドに映る吾が影立ち止まる
何げなく言われた一言胃にささる

松江市　佐野木みえ

子の夢に父の知らない地図が出来
雑念は捨てて明日へ灯を点す
温もりが欲しくて明日へ貼る切手
高台の木陰で天と地と語る
秋風が音符かなでて枯葉鳴る

松江市　津川紫晃

好い日です思い合うのが一致した
お立ち酒てて親だけが台無しだ
盲愛が高値の品を買ってやる
ユーモアで救われますよわだかまり
もみじ葉の流れる末路までも絵だ

松江市　安食友子

松江市　川本　畔

完璧になりたいピーマンのおなか
白菜は丸ごと捨てるズシンとす
皮むきをする人参のエリート臭
牛蒡一本ガサゴソと隠れ出す
肉だんご鍋はいやだと転げ出し

松江市　三島　淞丘

それぞれのリズムで恙無いふたり
残り火を燃やすに月日早過ぎる
道化師の影がわたしを離れない
妻の留守ちょっと寄ろうか縄のれん
一瞬のためらい七十路まで悔いる

出雲市　岸　桂子

春が来て胸のボタンを掛け忘れ
むなしさは消えたマッチの軸のよう
少子化に父の太鼓が鳴りひそむ
神の国やたら事件が多すぎる
凍てついた朝を溶かしたいい話

出雲市　多久和　敬子

孫の声聞いて二人の風和む
散歩道私と孫の影法師
いざという時は父さん出番です
時々は夫婦喧嘩もして夫婦
出雲弁孫もすっかりうまくなり

出雲市　小白金　房子

遷宮に会える目出度い幟旗
舞いおえた大蛇と交す祭り酒
いち病を流すどくだみ煎じてる
来るような予感杵餅丸くもむ
根性で牛舎築いた夫婦舟（息子夫婦四十二年）

出雲市　小豆澤　歌子

スカーフを巻いて言いたいことを言う
煮え過ぎた言葉が底についている
胸の刃を捨てて身軽になっている
やわらかい風に零れる胸のバラ
きらめいた星に自分史巻き戻す

出雲市　持田　多輝子

太陽は悲喜交々をみて沈む
世界中つなぐケーブル情報網
一寸した誤解が生んだ火の粉浴び
他人でも無二の親友座が和む
満月に心の窓も丸くあけ

出雲市　園山　多賀子

人間の海で溺れてばかりいる
ちぐはぐな婦唱夫随は怪我のもと
雲多彩少女は詩人志す
掛け違い釦に会話弾まない
素晴しい父だ背中を拝まれる

出雲市　森　茂美

ふるさとに昔の秋を探る旅
日本も小さくはない此処は陸奥
去年まで抱かれた孫がもう来ない
核持った国が持つなと脅してる
渓流に紅葉せかす音を聞く

出雲市　佐藤治代

錆色に郵便受けもわたくしも
入口も出口も同じうさぎ小屋
付け焼き刃私の人生そんなもの
尻餅をついて畑がわやになる
言い過ぎた背なへ刺さってくる刃

出雲市　富田蘭水

余命まだ残る幸せこの腕で
あの別れ今も思いの髪型が
菊かおる中に私のポーズあり
好天に心の翼みたしてる
豊年の祭り縁談つれて来る

出雲市　石倉芙佐子

山奥の奥には大蛇住むという
ある時は胸のおろちが荒れ狂う
それからの人生むらさき色に変る
雷神風神　神在月は忙しい
吹雪く夜はおとぎ話がまだつづく

出雲市　小玉満江

太刀魚を一匹貰い持てあます
ハーモニカ買ったが眠ったままでいる
間違いをにっこり笑顔でまぎらかす
保険屋に長々話聞かされる
もうちょいで私の家もゴミ屋敷

出雲市　伊藤玲子

あどけない顔で核心ついてくる
危なそう二つ並んでいるコップ
夢売りを枕の中に誘い込む
朝の陽に障子で遊ぶ小鳥たち
うっかりに付きまとわれて忙しい

出雲市　吉岡きみえ

まだら呆け今日はとってもいい天気
おめでたい正月愚痴は引っ込める
手の内で不安ころがしくすりのむ
亡夫さんのぬくもり残る椅子にかけ
過ぎたこと言わぬ引退花のみち

雲南市　毛利幸

年金で孫の笑顔を買っている
自動車の怒涛の波が人を食う
ばらばらに別れた友の同窓会
人生の道がでこぼこ暴れ出す
天国も地獄も酒が左右する

弟がくれたリッチなカシオペア
カシオペア下りれば町は雪だった
行列して旨いラーメン食べた旅
楽しかった旅を戻ればまた独り
立ち話ヤカンの笛が呼んでいる

島根県　伊藤寿美

核家族妻と子供で父母は抜け
温かいスープに浮かぶ母の顔
手鏡にそろそろ焦り映り出す
落ち込めば焦りはよそう母の声
背が寒い会いたさ急ぐ黄昏よ

鳥取市　冨山檳榔樹

ゆで卵むいてあげたい気にさせる
過疎に住み風と泳いでいるかけら
寄り添うて非常袋を確かめる
大輪の菊に玄関明け渡す
花びらを猪口に菊酒を酌みかわす

鳥取市　山宮愛恵

地団駄を踏んだポストに寒い風
切り株の我慢半ぱじゃすまぬわけ
天と地の隔り埋める深い海
わだかまり解けて見えだす青い空
大海に羽撃け明日の十七歳

鳥取市　平尾菜美

寄る年につい頻尿という悩み
ざこ寝して知る倖せの子沢山
貧乏も笑いがあった走馬燈
やわらいだ痛みに遺書の筆にぶり
ナンバーにプレミアがつく平和ボケ

鳥取市　加藤茶人

世相風唖み合う声生きにくい
人生の勝負運には夢がある
虫の音に心癒やされ秋夜長
新米のおにぎり食べりゃ恋し里
生き延びて満期保険の銭にキス

鳥取市　山本益子

人の顔にも濃いと薄いがあるらしい
終焉の時を知らないから生きる
配役で犯人ばれるサスペンス
人間も卵で産めば子沢山
お守りも効いた時だけ感謝する

鳥取市　田中憧子

ウインクに反応きっと物になる
反応を見てゆっくりと矢を番え
お供えを目あて墓参のさるきつね
靖国へ総理国論きしむ音
格差社会へ政治ぎしぎし音がする

鳥取市　杉本孝男

鳥取市　西村黙光

取り締まり強化で侘し縄ノレン
心の垢洗いに通う縄ノレン
腰痛も仕方がないよ米寿坂
腰痛を酔いが上手に柔らげる
おでん屋で竜宮城へ旅をする

鳥取市　吉田弘子

招かざる客が田畑をくい荒らす
現役を序列で泳ぐ相撲界
弁護団加害者過保護すぎないか
夜明け前音合せする小鳥たち
餅肌も歳には勝てぬシワとシミ

鳥取市　近藤佳子

神さまに届ける手紙浄書中
風の日は風と遊べる葱坊主
餡パンにたっぷりあんこ詰まってる
魘されて叫んだ声で夢が醒め
写経する墨のかおりに母在す

鳥取市　福田登美

身の丈の知恵で余生を温める
若夫婦の会話に口をはさまない
思いやり胸に仕舞った言葉数
京都展誘いにのって無駄遣い
除夜の鐘一つに罪を流したい

鳥取市　永原昌鼓

まずいとは言えず器を褒めておく
どっこいしょ座るとすぐに眠くなる
輪になって手をつないだらみな仲間
6Bはわたしの苦心知っている
満期まで生きると損をする保険

鳥取市　武田帆雀

鈴付ける役も出世の第一歩
シンボルの髭武者名刺代わりです
三番叟踏んで禊は済みました
元美人元リーダーと長ばなし
金箔酒飲んで胃袋おどろかす

鳥取市　福西茶子

福の神我が家と縁がないらしい
引継書書いてかあるい風になる
日の丸を揚げる君が代も歌う
過去のこと責めても前へ進めない
日本海笛吹き太鼓たたき冬

鳥取市　夏目一粋

ほどほどはたぶん死ぬまでわかるまい
ごめんなさい先に言われて負けとなる
神仏に二股かけて叶えれず
さしあげるものはわたしのこころだけ
赤トンボあれほど飛んでぶつからず

鳥取市　有沢せつ子

猪突止め二歩前進を的にする
母さんの知恵でサンタが来てくれる
物足りる中でおへその見える服
十三回忌母の長所を皆で言う
子が五人元気で法事賑やかす

鳥取市　録沢風花

収穫の音が弾んだ過疎の秋
路線バスひとり占めして二百円
美しい国に似合わぬごみ袋
らっきょうの花が砂丘の秋告げる
核実験の音に怯える千羽鶴

鳥取市　中村金祥

核つくる法律案の種をまく
パニックに慣れ過ぎたのが恐ろしい
塀の外満期になって桜咲く
ミサイルが来たかと思う竜巻だ
授業料未履修分を返してよ

鳥取市　植田一京

一行詩燃える心を詠んでおく
シングルもいいさ気楽な旅に出る
夢なんか抱いても無駄と言うなかれ
まだ燃えるものあり古希の坂登る
戴いた命大事に生きてゆく

鳥取市　土橋睦子

城山も池も真白過疎たのし
豊かさに慣れて空想ばかりする
初春に跳ね出している亥の子餅
柚子風呂で私が満ちる冬の窓
山茶花の清潔感がとても好き

鳥取市　土橋はるお

いのししが夜通し踊っていた畑
ご期待に背き大酒飲んでいる
意地張って大丈夫かえお父さん
賞罰は無しで現役終りたい
気配りは現役なりにせにゃならぬ

鳥取市　奥谷彩子

あわい恋砂文字秋の波に消し
五線紙にタップ踏んでるシャボン玉
生き上手壺に醗酵させる夢
子育てに父は楔を打ちつづけ
うずを巻く世間くぐって来た肋

鳥取市　西川和子

おめでとう歳も薬もまた増える
冷凍にして賞味期限を書き換える
戴いた情けの重み噛み締める
あの日から女は芝居上手くなり
お出掛けのバッグ薬と飴玉と

鳥取市　田村邦昭

犬かきが自慢今日まで生きて来た
飽食を詰めるばかりのゴミ袋
老いてなお町を支える知恵袋
恩という字がだんだんと薄くなり
人情がうすれ老いにも核家族

鳥取市　宮脇道子

煩悩がビールの泡を飛ばしてる
頬杖で山の色付き眺める身
秋風は淋しさ抱いてやってくる
世間様に感謝の気持草を抜く
我が体リフォームしたい衣替え

鳥取市　春木圭一郎

いのししに田畑荒らしの罪はない
猪と共存できる策探る
子を思う心いのししから学ぶ
牡丹鍋囲み友との輪が和む
亥の年にあやかり多産祈りたい

鳥取市　徳田ひろこ

四捨五入とても便利な耳ですね
よく笑う家族に悪さ遠ざかる
手品師の袋のようにわたくしも
たくさんの人の情けにぶら下がる
行方まで知らない舟に乗っている

鳥取市　福島庸二

蟠り深呼吸して吹き飛ばす
結果知り悔しいけれど再トライ
気遣いのつもりがうまく伝わらず
ささやかな親切心に灯を点す
姿見の自分に何故か硬くなる

倉吉市　牧野芳光

虚空から天使の羽根のような雪
ひとつずつ見映えを捨てて老いてゆく
雪山の雪は優しいふりをする
どん底に居れば空しか見えてこぬ
積雪の下魂が埋もれている

倉吉市　猪川由美子

世が騒ぎしぶしぶ事実喋り出す
政策なしタナボタ議員見てられぬ
忙しい時ほど読書したくなる
子は欲しい結婚はせぬ輩増え
デブが売りタレント痩せちゃ面白ない

倉吉市　松本よしえ

仏さまほかほかですと栗おこわ
赤とんぼ連れて帰った茜雲
こうの鳥羽搏き宮に親王旗
蜘蛛の巣に三日も餌がかからない
病む人にカルテが読めぬのも情け

倉吉市　米田幸子

居酒屋の宣伝らしいチンドン屋
夢を盛る母の器は無限大
人を指す指がざわざわ騒がしい
平坦な道ではないが夢がある
ローン未だ残した軒が傾いた

倉吉市　山中康子

力んでも孫には勝てぬ若づくり
狂言をポンと叩いた母の勘
水入らず水をさしてた若かった
関門を通過図太くなってきた
竜巻に成すすべもなくああ無惨

倉吉市　山本玲子

終い風呂半身浴のできる量
度忘れで脳のストレス解消する
スカートで痩せた太ったとの悩み
他人の空似夢中で後を追っていた
真っ青な天を突き刺す松の芯

倉吉市　最上和枝

まん丸い漬物石に母が住む
真っ白の紙に一点嘘がある
曇天も何とかなると豆を干す
前頭葉叩き直せる策を練る
胃の内を見つめています内視鏡

米子市　光井玲子

連れ添うて六十年の波を越え
ひらめきもなくなりほんに老いてきた
広い視野あなたにいつも脱帽だ
娘のピアノ部屋の飾りでさみしそう
年取るにつれて頭がまわらない

米子市　白根ふみ

菊花展きくの魂ほどけだす
目も口も耳も達者でよく忘れ
雑踏に入り立ち泳ぎで抜ける
秋の耳落葉の形して聞こえ
男の手庇ってくれたからおとこ

米子市　中井ゆき

風紋よあしたの顔はどんな顔
ねころんで唯青空とコスモスと
なにもかもふるい落した木は凜と
猫がいる路地が大好き花もある
今現在幸せですに丸をする

米子市　木村春枝

つややかに娘は旬を翔んでいる
年男家にうるさいのが一人
一人居が金魚と同居した便り
古時計長短の針仲が良い
新しい暦に亥年の願をかけ

米子市　政岡日枝子

はなやかな友は健康美にあふれ
三月三日可愛い客が寄ってくる
手招きのように聞こえる寺の鐘
つわぶきの黄を散らして月欠ける
鎮守の森はそこはかとなく神の息

米子市　青戸田鶴

この坂を登るなさけにひかされて
鍋囲む小さな灯り消すまいと
情報の波に流されないように
過ぎ去ればみな美しい景色なり
海外へ立つ昂ぶりに湧く空港

米子市　門脇晶子

ノートから自分の顔をさがし出す
傷口の深さで覚悟出来てくる
痛みから逃れる足がもつれ出す
我病みて人の心をふところに
追いつ追われつ人の世のペダル漕ぐ

鳥取県　佐伯やえ

み仏とデイト千夜の月といる
亡父の愛地図にきれいな道がある
美しく生きたしなさけ惜しまない
見えぬ目におくる寒アヤメの香り
つまずいた石さわやかに越えて新春(はる)

鳥取県　石谷美恵子

人間という動物の化け比べ
憎い猪食って溜飲さげている
ステップもいそいそ酒の席が待つ
白い歯と涙が光るインタビュー
頼もしい気合いが耳に心地よい

鳥取県　山下節子

万華鏡私の夢と同じ色
この暑さ気合いよりまずビールのむ
よい知恵が浮かんでこないパニックだ
ストレスの反応だろうよく食べる
時化空を仰いで漁夫は綱を締め

鳥取県　下田茂登子

もう一度振ってみたいやない袖も
好好爺消えて鬼爺増えてきた
嬉しいことだんだん減って老いの道
逝ったとも思えぬ兄の筆の跡
長生きの秘訣だなんて情けない

鳥取県　山本正光

独裁者核をつくって馬耳になる
家一歩はなれば二百三高地
表札の太い字の名が芯柱
日本一大きな鬼と寝起きする
真面目だけでは政治家になれないね

鳥取県　蔵本悦子

法律を無視したせいか太り気味
北朝へなおもアンテナ高くする
少年が分からぬままに脱皮する
生き方が分からず風に舞っている
携帯電話案山子もきっと持っている

鳥取県　谷口次男

宝くじ買って私もボランティア
あの雲は子規の顔だね糸瓜形
休めない監視カメラはグロッキー
松坂も去って球界氷河期に
ザワザワと竹藪鳴って何か去る

鳥取県　竹信照彦

九条の衣の下に何を着る
平和主義唱えて秋の畑打つ
玉葱の苗を植えよう霜が降る
労働権だんだんやせて細くなる
陰陽を暦も問わぬ師走来る

鳥取県　盛田夢路

妻の取る舵がわたしを振り回す
几帳面な夫に感謝の五十年
年の瀬の袋小路にいた詐欺師
朝三粒元気の素を飲んで出る
わたくしの元気印は母譲り

鳥取県　深田倶久

ネクタイに欠伸をさせたクールビズ
税金がぼっかけて来た今朝の夢
思い出し笑いで進む冬仕度
年金の誕生祝いも減額よ
神います国にわざわざ神無月

岡山市　井上柳五郎

度忘れの探しものすることが増え
さあ来たな卒寿ゆったりするときめ
お金よりコネの利く世で住みにくい
健診の結果不安を妻と共
病む身をばいたわりながら年明けへ

倉敷市　撰喜子

とっくりを逆さに振って飯にする
幸せの中にいるのに孤独感
咲き匂うとはこんなことはたちの娘
失恋を逆なでされる恋敵
夫婦喧嘩割って入ってくれるタマ

真庭市　国米きくゑ

月あかり胸の奥まで覗き込む
賞味期限きれた女の冷えた席
大あばれする竜巻きに会う悲劇
満天の星満月と何語る
栗大福まずお毒味は仏様

凧糸の切れた少年虹を追う
躾糸切った少女の舞い扇
秋日和テポドン忘れ芋煮会
ドラフトの何億の金目が眩む
欠勤で金貰うのは役所だけ

真庭市　福嶋智恵子

気のりせぬ誘いに乗ってねむられず
人生は七曲りやら九十九折
ビルの谷間で仰げば月も淋しそう
カーナビより妻先走りで迷わせる
主役にはなれずじまいのモーニング

美作市　山本玉恵

年ごとに変化重ねてばかりいる
川底の石は昔を語りつぐ
全快で一度は捨てた欲が出る
門限を今日も破った縄のれん
因習を破ってからの不整脈

美作市　福島悦子

松茸は匂いを嗅いだだけでいい
鬼笑うもう来年の米作り
暖かい秋まくなぎが攻めたてる
母さんは泣くから駅に来てくれぬ
呑んだら乗るなそんな台詞が捕まった

美作市　小林妻子

今人を食って来たので歯を磨く
癌告知経過観察茜雲
誕生日何はともあれ大吟醸
来年の金婚旅行二三案
貰い物ばかりで旨い晩御飯

東広島市　福島万年

久しぶりの雨は冬さえ連れてくる
娘に送る古里便にある温み
元気元気歩け歩け二人きりなんよ
予定表いっぱい私主婦ですが
一匹と一人の昼にテレビ付け

竹原市　岩本笑子

若い頃迷うて泣いた事がある
建前と本音が合わぬ人間味
前向きに生き問題につきあたる
梯子踏みはずして思う老いた足
シャッターを下ろすと僕の部屋になる

竹原市　森井菁居

八キロの減量ちょっぴり軽い足
風まかせいいなあ白い雲一つ
五十年前の手相が今の僕
望まない歳と薬に増えられる
影一つだけが私の召使

竹原市　時広一路

竹原市　石原淑子

初日の出弾む力を溜めている
温い風一期一会をつみあげる
花を愛で心の隙間埋めてます
佳い顔になりはじめたな二児のパパ
お喋りと笑顔の好きなだんご鼻

宇部市　平田実男

赤ちゃんの匂いはシャネル5に勝る
プライドを捨てたら消えた胃の痛み
苦があっても楽にしてくれない政治
火遊びが若さの秘訣かも知れぬ
同じ酒なのに相手で違う味

美祢市　安平次弘道

故郷へ帰る錦がまだ織れず
人ひとり許せば噂消えていた
親戚との距離がだんだん遠くなり
忘却の果ては悲しみだけ残り
修正をするから増える罪の数

東かがわ市　神保坊太郎

名月が転がりそうな風が吹き
野辺におき眺めてほしい鬼あざみ
来ぬ人にクルクル焦れている日傘
披露宴を盛り上げている二枚舌
追伸に書いてあるのが本音です

東かがわ市　清川玲子

干し柿も盛って女のティータイム
美辞麗句に包まれ眩しウェデング
一人旅少しロマシにひたろうか
旅先でつい出てしまう主婦の顔
参加したツアーで無二の友が出来

東かがわ市　伊勢八重子

異状無し検診不安を吹き飛ばし
いも畑今日は青空幼稚園
大安も吉日もなし主婦の朝
里いも煮想えば母にたどりつく
親の愚痴涼しい顔で聞いている

東かがわ市　原賢

もったいないは筋金入りの戦中派
八年目貰うた蘭の孫が咲く
耐え抜いた今は眉間の皺も消え
出直しは針の筵が敷いてある
見栄捨てて急に長生きしたくなる

東かがわ市　池内かおり

姉妹のはざまで揺れる老母介護
欲ばった皿が恥ずかしバイキング
子だくさん長男以外手が早い
お隣に天狗が住んで疲れます
お隣の紅葉マークも遊び好き

東かがわ市　成重放任

押し売りに客を教える世話女房
生き字引き顔には出さぬ利巧者
雨だれの音もさみしいお留守番
ボーッと見るメダカの方が元気かも
晩酌が今日の疲れをもってゆき

東かがわ市　川崎ひかり

良心を金の魔力にのっとられ
迷うたび人間らしくなってくる
肩のゴミ払って夫婦しています
亭主関白やがて辞書から消えてゆく
百均の皿が被害の乱気流

高知市　小川てるみ

コンピューター1と0との物語
幸せはどこを切っても円になる
ドライアイ異常乾燥注意報
ライバルが自信の程をちらつかす
去る者は追わずコスモス揺れるだけ

高知県　小澤幸泉

曲がり角ああ人生を降り始め
ポケットの手帳知ってる浮気の日
フィクションも混じる告白記事が売れ
意地張ればへんなところへ跳ね返り
足音で妻が知ってる酒の量

高知県　赤川菊野

曲り角ここで別れてそれっきり
脱皮した皮に涙のあとがある
涅槃像あなたのそばで眠りたい
忘れられそうで毒舌吐いてます
飲み込みも早いが忘れるのも早い

松山市　髙橋宏臣

百本のバラが見上げる木守柿
言い足りぬ言葉を吐いて繭になる
延々と影曳いてゆく伴走者
地平線立っているのは神の子か
風船がしぼむ演歌は北を向く

松山市　古手川光

テロリストへ届け日本の除夜の鐘
平和こそ宝祝える三ヶ日
坊ちゃんの力も借りる街おこし
マネキンは春真っ盛り寒の入り
太く短くなどと心にないことを

松山市　宮尾みのり

本性が出てしまいそうバイキング
着実に体は歳を重ねてる
手を合わすこと祈ること生きること
いじめ連鎖人智の沙汰を越えている
跡取りへ先祖の義理が追ってくる

西予市　黒田茂代

風の織りなす彩へ落葉の舞扇
パワーアップ飛翔への風待っている
野に山に溢れる秋を食べ尽くす
わたくしの想いを託す落し文
嫌われているなあと猫近付かぬ

大洲市　中居善信

金婚へのこのこついて来た妻で
口下手をひとり味方につけている
言葉尻つつくあなたも淋しいか
おんな狂って唇を赤く塗る
寺の鐘ゆたかに聞いて年暮れる

唐津市　井上勝視

人口減ともにモラルも消えてゆく
お蔭様としみじみ言える歳になる
プライバシー自分の都合だけ喋る
物の名が出ぬがアハハで暮らしてる
まあいいかここまで来たら神まかせ

唐津市　宗水笑

塩害に耐える農夫の土根性
鶴の美が一際映える細い脚
トラックに行方予感の牛が揺れ
ピーポーにカラスが連れて鳴く不安
馬の首撫でるに丁度良い長さ

唐津市　市丸晴翠

引受けた役が私の首を絞め
多忙です本の栞が進めない
貧しさを絆で越えた昭和っ子
塩害の穂にコンバインすすり泣く
山里の墓地へ導く曼珠沙華

唐津市　久保正剣

美しい仮説に誘う新総理
色褪せた絆が固いダイヤ婚
老いし身にしみじみ妻のありがたし
隠し子もインターネットも知らず老い
駆け落ちの約束もある除夜の鐘

唐津市　坂本蜂朗

出来悪い子が背負ってる老いた母
子も孫も元気卒寿の老母の笑み
盆栽の松百年の自尊心
祭り笛もう眠れない午前四時
湯豆腐と酒の二合もあればよい

唐津市　山口高明

夕焼けの砂丘に独り膝を抱き
初心など忘れ賄賂も受けてます
どの足も縛れず走る百足さん
悪戯な指がわたしを眠らせず
離着音夜も眠れぬ基地の島

一声の清濁鶴と人間と
見えぬが花電話で誘う美顔術
クラス会ダイヤにすべて語らせる
ロボットが人間臭くなってきた
辞書を引く認知予防の処方箋

熊本市　永田俊子

あちこちで爆竹揚がる碧い空
グランドゴルフ成績順じゃない褒美
お誘いの優しい声に胸が鳴る
不節制喉のむずむず黄信号
賽銭上げ銀杏貰う庭箒

熊本県　岩切康子

暖かい部屋はテレビが姦しい
補聴器を外し街宣切りぬける
病窓に行楽日和よくつづく
的を射た忠言だから腹が立ち
ふるさとに母在りみんな揃う屠蘇

熊本県　高野宵草

◇各地川柳会代表者会◇

2月17日(土)　13～16時　於・アウィーナ・3F「二上」

案　件＝①川柳の仲間づくり
②プロジェクトチームの再確認
③その他・意見交換

全日本川柳誌上大会のご案内（柳多留第12集）

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」（平成柳多留第12集）を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ㈳全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と共選者（各題2句・連記）

「国　　境」　石井　有人　―　国吉司図子　共選
「癌（がん）」　高瀬　輝男　―　浦　　眞　共選
「　花　　」　西　恵美子　―　仲俣　新一　共選
「移　　る」　野村　秋花　―　池　森子　共選
「アメリカ」　渡辺　貞勇　―　小林　映汎　共選

第二次選者　竹本瓢太郎　大野　風柳　大木　俊秀
河内　天笑　木野由紀子

参加費　2000円（投句料・『平成柳多留』第12集代金含む）

賞　平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・㈳日本青少年育成協会会長賞・㈳全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞・秀作賞（予定）

締　切　**平成19年1月31日（水）（当日消印有効）**

発表・表彰　第31回全日本川柳栃木大会（平成19年6月）

参加方法　参加用紙（雑詠1句）と出句用紙（2通1組）に記入し、参加費2000円（振替又は小為替）とともに左記へご送付ください。

〒530-0041
大阪市北区天神橋二丁目北1―11―905
社団法人　**全日本川柳協会**
電　話　(06)6352―2210
FAX　(06)6352―2433

川柳塔の川柳讃歌㉕

木津川　計

ご近所とくもりガラスのおつき合い

北野　哲男

人生幸朗さんが「さざんかの宿」をボヤいていた。「くもりガラスを手で拭いて、あなた明日が見えますか」て「そんなもん見えるかいッ!、見えたら大川栄策君、明日の競馬わしはボロ勝ちやないかいッ!」

何もかも隠さずの裸の付き合いはどんなものか。九鬼周造は『「いき」の構造』で、丸裸より「薄物を身にまとう」、それを粋ととらえた。ドバリズムよりチラリズムの美学である。近所付き合いも丸見えでない方がよい。

傘ひらく場所さえあれば生きられる

高島　啓子

先の林家正蔵師匠のお宅へお邪魔して感心した。座った師匠は手の届く範囲に必需品の大方を納めていた。葉書に切手、封筒から文具一切、茶道具に切抜き、アルバム、新聞に予定表……。畳一枚が生活の場であった。

つつましかった正蔵さんに似て啓子さんも控え目で、生活空間は傘の広さで十分という清貧のおひとである。ひっそりと舞う上方舞も半畳の広さで名人は、たとえば名花山村若佐紀さんは、舞う。啓子さんも生活の名人だ。

ハネムーンと同じ駅からフルムーン

大川　桃花

Dカップを揺すりながらの娘さんを見ると、ミラーマン植草センセイの気持が分かる。「さりながら痴漢の心すこし持ち」とつくろわなかった西尾栞先生に、僕はほっとする。

少年老い易く学成り難しは少女だって同様である。ハネムーンのDカップも「りんごなぜ落ちる乳房はなぜ垂れる」(瀬川幸子)と歎くフルムーンまでたちまちだ。生涯は所詮邯鄲の夢、帝位五十年の栄華も枕頭片時の夢に過ぎない。次の句もその短さを詠む。

八十年など束の間の大宇宙

近藤　佳子

「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり」、炎に包まれる本能寺で信長はこの幸若舞を舞い、四十八年の生涯を終えたと伝えられる。下層の天に住む四天王の一昼夜は人間界の五十年に当たるという。これに比ぶれば、人生五十年は、いや八十年といえども束の間である。

何をして下さったのかサービス料

太田　扶美代

世界遺産になったからその地域は観光客で大賑わい。が、旅館の評判はガタ落ち。どこも従業員の手が足りなく、料理は冷たく、布団は湿り、女中の応対はもの言いも知らず…。それでもサービス料込みに納得がいかない。

好評の「功名が辻」、山内一豊は十一月十九日、土佐入りをようやく果した。この秋の観光ブームを当てこんでいた地元の業界はがっかり。あせらず来春の賑わいに備えるべし。料理も設備もさりながら、心のもてなしを。

生まれてからずっと斜面に立っている

城　多喜

転落は転がり落ちるのであって陥没ではない。多喜さんは(と句と人生を重ねる)気の毒に、すべり落ち、転落しそうな斜面を這い上ろうともせず、生まれてからずっとッ立っているのである。風にあおられ、雨に打たれても多喜さんが立ち続けるのはなぜか。危うい足場で風雨に耐える悲壮な人物を自任しておいでだから、はタメにする解釈で、実は今日まで逆境の人生だったのである。

多喜さん、どうか転落なさいませんよう。

★今年も続けさせていただきます。よろしく。

(『上方芸能』誌代表)

自選集

森下愛論

地下街の立飲み政治不信論
遠慮なくでかいヒップを寄せるバス
誘惑に勝った理性が落ち着かせ
秋深く紅葉が酒を手伝わせ
碧空に夢あり若さがまだ残り

八十田洞庵

いつまでも生きよ頑固のままでよい
さりげないあせりに積木くずれてる
昨日の顔はしまっておこう今日は今日
長生きは孤独の責苦飯を炊く
やがて咲く蕾小さな息づかい

両川洋々

地図のない旅かも老母が黄泉へ発つ
この僕の仕置き人なら妻だろう
人目忍んで妻のスペアと腕を組み
癌告知これが別離の序曲かな
雪おんな笑うと北は豪雪だ

阿萬萬的

雑学を鼻に変人とも言われ
背伸びしたつけが回って来た不覚
いい加減けりつけたらと妻の愚痴
平凡な暮しに時々隙間風
卒寿とか余生を埋めてくれる趣味

石川侃流洞

老いてなお親父狂わぬ五分前
胸襟を開いて屋台の酒を酌む
ケータイブーム井戸端会議消えかかり
子と論争親父の威厳役立たず
花火果て二人手を組む星明り

板尾岳人

恋をして真赤に炎えている紅葉（高野山）
舞う雪や玉三郎へ落涙す（山鹿金九座）
大谷川華厳の水を呼び寄せる（華厳の滝）
戦争はもうないんだよ眠り猫（東照宮）
大らかな心豊かな深さかな（中禅寺湖）

奥田みつ子

年あらたやはり『師弟』を開きおり
ずらり十人の見舞に声の出ぬベッド
やさしさに弱い涙をもてあます
体の痛み知ることもまた大事
パパパパと事ある度に言う呪文

温い手に背中押されて出るやる気
控え目な様子に秘めている自信
愚痴聞いてくれる親友訃が届く
どちらとも取れる言葉で紛らわす
自分には負けずリハビリ熱こめる

河井庸佑

蛇口から朝の息吹が溢れ出る
生きろ生きろと爪が伸びてくる
霜柱踏んでいそいそ初詣で
神苑に流れも清き五十鈴川
仁王さんの顔もホコロブお元日

木村あきら

午前二時絶好調の眼となりぬ
観覧車男がひとり乗っていた
行列に並んで夢を見ているか
てっぺんの椅子ふるさとがよく見える
コーヒーにホッとするのはまだ早い

小島蘭幸

元旦に古里は雪明日も雪
歩が金になりたい心もつ大人
うっちゃりを食らう時計と待ちぼうけ
櫛の歯も戦友もぼろぼろ欠けていく
よい運を修正液も期待する

小西雄々

川柳が生き甲斐指を折りながら
ほどほどに飲めばお酒も薬なり
宿題の英語どうにもしてやれぬ
年金をけずり小さな旅を組む
恵まれて返しきれない恩に生き

小林由多香

いたわってあげよう野菊散るのです
流されて木の葉は祈り深くなる
たっぷりと遊んだ子等のいい寝顔
コスモスの鼓動伝えて来るメール
絶妙なお別れでした花しずく

斉藤姦

松原で姪沖縄で甥が当選す
鶴彬だんだん人気出て来たよ
陵南に足湯が出来た秋の日よ
台風が列島狙い吹いてます
牛肉に牛乳おおきに牛さんよ

塩満敏

乾杯の瞬間を待つ良き時間
乾杯と言ったからには飲み干そう
胃袋に何もないとき酒うまし
オードブル先ず枝豆に手を伸ばす
宴会の途中帰ったことはない

新家完司

がんばらぬ諦めないで生きて行く
毎日を大事に生きるこれからは
米寿まで生きるつもりで吸う酸素
長いときみじかい時もある時間
やることはやった白寿のひとり旅

田中正坊

日本沈没ありそうだから怖い
引き算に慣れて歩幅が狭くなる
譲るものみんな譲ったパスポート
語り部の余命切ない夕茜
階段の手すりに頼る自己嫌悪

（紫香先生を偲ぶ）

玉置重人

また巡る亥歳八十路の土ふまず
今更のはずがやっぱり買い替える
人並に出来ると欲が目を覚ます
寄せ書の思い出遠くなってゆく
しみじみと幸せ思う箸の音

恒松町紅

ジャンケンで丸く納まる面白さ
世話役へ酔えない酒を酌いでくれ
肩書用の眼鏡時計があるらしい
五十年妻はやっぱり妻で居る
喜怒哀楽大人に脱皮する涙

遠山可住

二千七年　喜寿の峠を越してゆく
生かされて生きる男の黒い影
東雲に合掌をして深呼吸
未来から来いというから行ってみる
露の世にどっぷり有頂天になる

土橋螢

本当でないから嘘だとは言えぬ
ソプラノとテナーでもめている夫婦
返事せぬことを返事としておこう
悠仁さまにいいお嫁さんあるように
日々多忙今が華だと思わねば

西出楓楽

玉砕とスポーツ新聞勇ましい
法律はふえるが命軽いまま
それにしても生まれた血すじ運不運
僭越に延命装置に疑義を述べ
平均余命伸びて私をそそのかす

仁部四郎

反省の一字一字が般若経
続編に熱い思いが堰を切る
口舌が時代錯誤をして困る
野晒しや風が走った跡ばかり
雪ふかき屋根も住所も生家なり

波多野五楽庵

怪我人に心配顔の旅はじめ　芳地狸村

人形と間違いました儀仗兵
衛兵の儀式に心満ちてくる
象形の文字になじんだ甲骨文
王羲之の筆に酔ってる旅の客　宮口笛生

蟹食いの旅誘われて行くと決め
熱燗を甲羅にうまい酒をのみ
男とは下手な食べ方してる蟹
蟹のゲップ吐いて満足してる旅
耳遠くなっていい事悪いこと　宮西弥生

髪一本抜けて秋風背を叩く
真っ直ぐに流れ答えのないいのち
写経して罪のシワ寄せ伸ばしてる
マンネリを出て長生きがほしくなる
天の気と地の気がほしい深呼吸

第21回　愛吟コンテスト誌上大会

テーマ「子・児」選者＝藤井北灯・上村　脩
2次選者＝三宅保州　他2名
投句料　一口一、〇〇〇円＝10句・10句プラス毎五〇〇円増、賞あり、既発表句可　**締切り**　1月30日
応募先　愛吟会　〒692-0404 安来市広瀬町広瀬639

万葉抄

（つづき）

唐津市　岩崎　實

おそく起き自分を責める自分です
筆をとる時代おくれを感じつつ
胸を張りどんと腰据えさあお出で
まだ若いいわれましたよ七十八

佐賀市　清水園實

将棋さし庭でけんかの夏はるか
とろろ汁家族で食べた里の味
盆踊り父が奏でしヴァイオリン
古稀過ぎてチャンづけで呼ぶ友の声

第98回 大阪川柳の会

日時　2月5日（月）17時開場　18時締切
会場　北区梅田　駅前第2ビル5F　総合生涯学習センター第一研修室
宿題と選者　△舞う・矢沢和女△手帳・久保田半蔵門　△いじめ・大内朝子△百・礒野いさむ
会費　千円　**欠席投句**　2月3日まで（会員のみ）本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

23回あかつき川柳会句会は、会場が北区民センターに変更されています。間違いのないようにお越し下さい。
JR環状線「天満駅」又は地下鉄「扇町駅」3分

奥田みつ子選

元旦の朝も老々自我を折る
投薬で生きて初冬の水汲みに
断つ絆からまる絆火を起こす
枯葉逝く仏の庭に身を捨てて
かく生きて死後の世界はひとつの灯
紅椿尻餅ついて安楽死

田辺市　大峠可動

せっかちで後から読む秋夜長
耳鳴りが潮騒になり満ちて来る
大欠伸頭の中の骨休め
歳重ね和む言葉を溜めている
根性だけピンと真っ直ぐ張っている
幸せかい自問自答で膝を抱く

八尾市　脇俊子

第二幕下りてねぎらう妻やさし
必要な人といわれることうれし
淡々と生きるも死ぬも難しい

京都市　清水英旺

金平糖の小さなツノのような欲
焼き芋の売り声寒い闇に消え
夜来の雷雨きのうの憂さを押し流す

和歌山県　村中悦男

人生は悲喜こもごもの散歩道
気まぐれの散歩を叱る万歩計
絵手紙を更に仕上げる一行詩
今生きる過去のすべてを礎に
言いわけをしない男の意地を持つ
病して老いて夫婦と思う日々

札幌市　三浦強一

ペット用ブランド店のある平和
期待したどんでん返しなく老いる
補聴器を外すと亡母の声がする
幸せはペアのチケットまだ買える
ありがとう言って言われて生きている

燦燦と冬のひかりを身にまとう
古稀過ぎるなり加速する砂時計
余生という未知の次元へはばたこう
世の移り風の子今はゲームの子
後ろには夢がないからふりむかぬ

堺市　大久保　伸子

ライバルと本音で語る定年日
腕組みをすると男の顔になる
正論を吐いて静かに爪を切る
内緒話毒は薄めて聞いておく
プライドを胸に畳んで今日も無事

宝塚市　河津　寅次郎

分け隔てなく育てても出来不出来
分け合って残さず食べる老いふたり
言い勝ってこころの底に冷え残る
万病に日本銀行券が効く
個性まで殺してしまうマニュアル化

大阪市　伏見　雅明

添寝した孫の婚礼日本晴
とって置きの顔でのぞんだ披露宴
披露宴孫からもらうバラの花
子や孫の愛へ生かされ悔いはない
憧れの人と結ばれ夢叶う

鳥取県　橋谷　静江

楽しみも動から静へ昨日今日
漂白剤かけたいようなこの世相
道しるべ消えて自分をとりもどす
やっかいな矛盾男と女の目
亥の年もスローライフをモットーに

大阪府　神野　千恵子

晩学の蟻で離さぬ辞書を繰る
鉛筆の芯尖らせる意地がある
プライドを捨てれば風は柔らかい
人間が好き泣きも笑いも出来るから
四季の彩わたしのこころかりたてる

今治市　塩路　よしみ

ふるさとの山はむかしのまま眠る
晩鐘は子を呼ぶ母の声になり
再会ののれん地酒に迎えられ
ルーズだが夫婦の独楽は良く回り
この海の初日に夢をかけるもの

日立市　加藤　権悟

ふにゃふにゃにビシッと打った句読点
発車オーライ一人になった縄電車
神からのレンタルだろうこの命
無為徒食私の影も消えている
振り向いてほしくて髪を赤くする

紀の川市　宇野　幹子

大阪市　岩崎玲子

恋文の下書き芯がまるくなり
鉛筆と紙と合作小半日
鉛筆が尖って書けぬ僕の負け
ほどほどの濃さで人生書いている
鉛筆で書いた日記が亡母を呼ぶ

奈良市　乾春雄

バイキング他人の皿が気にかかり
うぬぼれの紙風船がふくらまぬ
荷車に夕焼け乗せて野良帰り
輪の中を笑いで包むうまい洒落
座ブトンの情けが温い駅ベンチ

大阪市　尾崎黄紅

靖国の兵の意見も聞きたいな
亡父の書に引いた朱線に訓えられ
歳隠す歳になったと歳が言う
電気ガス水道亡母の仕末ぐせ
どこも新米古米らはどこいった

和歌山県　森下よりこ

押し通すつもりはないが意地少し
一雨毎の秋がストップしています
素寒貧だが遊び心のあるくらし
広告だけ読んで済ませる週刊誌
縁側で猫を相手に赤ちゃん語

岐阜市　平野あずま

逢えそうな予感ネクタイ派手に替え
死ぬまでは本気で生きる余命表
決心がつかず時計は空回り
説明書読むと迷路に導かれ
家中をマナーモードに子の受験

浜松市　杉浦恵夢

懐かしいにおい納戸のかくれんぼ
長い影ジャングルジムに陽が沈む
いびきかく疲れた顔に礼をいう
うたたねのこたつで父がふと笑う
黒白をつけぬわたしの色がある

泉佐野市　稲葉洋

感傷に浸ってみるか秋の老い
女房は軽くこなした家事が苦に
嘆き節作詞している亡妻忌
よく喧嘩したが仏になりゃ恋し
生きて在り確かめあっている賀状

和歌山市　たむらあきこ

生きている限りわたしを光らせる
百八ツ聴く少しずつ水が澄む
にんげん砂漠今夜は月が良いらしい
あみだ籤一本たせば変わる道
彩りも少し貰った母の道

メルボルン　藤原　ポン吉

メール打ち子供の背中見て習い
譲れない未来が僕の宝物
雨音は天の恵みの拍手かな
下手なほど子供の歌は癒される
面接で前に出る親引く子供

シドニー　坂上　のり子

ふくよかな女神志功の刃の冴え
けんか相手をマイブラザーと指差す子
あめ口にパソコン操作する七ツ
やんちゃっ子の肩後ろから抱きしめる
虐待児の痛み知ってた隣組

シドニー　三谷　たん吉

温暖化無視され地球牙をとぐ
新聞もテレビも見ずで秋日和
校長と知事と市長と生ごみと
サッカーが負けて野球が生きかえる
寅さんの暮しと私ほぼ同じ

シドニー　森本クックバラ

静寂を裂くや一笛能初め
狂言師跳躍一瞬宙に留む
橋掛かり消えいく能に拍手無し
白足袋に袴紋付男の美
失せていく語彙を集めた辞書欲しい

シドニー　内山　佳代子

ストロベリーいちごのほうがおいしそう
手作りのカバー古本うれしそう
異国の地お蕎麦をすする至福時
シンプルに考えればというけれど
手入れしたネイルとピアノにらめっこ

札幌市　小沢　淳

有望と言われてからの辛い日々
転移するいじめに命軽すぎる
酣の秋だ胃袋バテている
病人を友に持つ身の有難さ
大関が吹き溜ってる大相撲

取手市　葛西　清

仁王様ヘソくすぐれば笑うかも
お供えの酒に酔ってるお月様
病床に写真が伏せてある娘
母好み菊で飾った三回忌
減反の口惜しさくべる籾殻に

草加市　飯土井　健夫

五十年妻の笑顔に助けられ
大正の破帽希望と夢があり
メモを取りそれが膨らむ知恵袋
信念を通す明治にある頑固
汗をかくそれが宝という老後

横浜市　中尾哲代

一人っ子愛も時間も有り余る
本日が賞味期限と食べすぎる
幸せは湯気のむこうに妻の顔
愚痴悩み友に話して軽くなる
それでも男　マニキュアとイヤリング

横浜市　金森徳三

つくづくと生きる重みを知る五体
今年また悩みも連れて年を超す
難聴じゃないよ声だけ聞こえてる
関白の今日の予定は風呂掃除
肩書きがついて無念の都落ち

横浜市　川島良子

格安のツアー体力との勝負
ガン告知命を絶つか酒絶つか
生きるとは愛とは白き旅遍路
医者好きできっと長生きするだろう
バランスが大事こころも生き方も

横浜市　長島亜希子

紅葉のはずが深緑愛でる旅
見舞客の方がお大事にと言われ
十倍になっても利息おやつ代
英文科出たんだよねと子に言われ
電話では不安ファックス送っとく

横浜市　巌田かず枝

入院の前にケーキや手巻きずし
パソコンがへそを曲げるとお手上げだ
赤字バス廃止だなんて言わないで
食卓の下で愛犬待機する
暇らしい読書の数を自慢する

佐渡市　髙野不二

夏やせを期待していたダイエット
年金のない月おとなしく暮す
昔言うた産めよ増やせとまたはやす
俺に似て家の時計もおくれ気味
年賀出す相手だんだんへって来る

静岡県　中田尚

同じ陽を見ても新年背筋のび
本当の春はイジメが消えてから
二〇〇七地球も街もおだやかに
子金もち大人びんぼう三ヶ日
ふくわらい首相の顔が泣いている

静岡市　中西雅

風邪ひきに飲む薬より卵酒
鏡には未だ頑張れる顔がある
ひもじさの中にも夢を見た昔
台風がそれてうれしい子のみこし
アルバムを開けると童話飛んで出る

老人は邪魔だとばかりこの重税
昔はね近所の大人も叱ったよ
耳鳴りと難聴次ぎはお断り
来し方を秋の夜長に思いみる
紆余曲折よくもここまで生きて来た

愛知県　三浦きぬ

こんなにも深かったのか涙壺
恋と書きサヨナラと書く試し書き
うたた寝にふわりと母の着せるもの
どっぷりと甘えてやろう母八十路
丹精な心着せられ菊人形

京都市　中野六助

嫌な癖までそっくりな姉いもと
アハハハと兄弟寄れば遠慮なし
友が来てガラス震わす笑い声
しゃべり過ぎた自分が嫌になる深夜
孫が来る明日に備えて早寝する

京都市　西村益子

庇われて庇われ過ぎた子の不幸
一日の心を裁く夕日落つ
季の変り今日着る服をまだ迷う
謎めいた月が私をそそのかす
一年の早さを嘆く月初め

京都市　桝本宏子

詐取隠蔽黒い字ばかり覚えます
新米が採れたと古米贈られる
百均の財布でヴィトン買ってやり
ライトアップ書き入れ時の今日の寺
子沢山無償の愛で育つ子ら

京都市　三宅満子

森の中ついた嘘まで緑色
鍋かこみ一時休戦秋の陣
星月夜話の桁は無限大
太陽と月ほど違って夫婦です
ハワイ好き帰るわが家はもっと好き

大阪市　原田すみ子

水溜り選って空中散歩する
一枝のもみじが今日の卓の贅
矢印を見ると反抗したくなる
宛先は空白のまま書く手紙
どの道を採ってもゴールたどり着く

大阪市　森田明子

夢やぶれかえって肩が軽くなる
ぬるま湯の三食付きを抜けられぬ
ひとつだけたまに良い事あれば良い
通学路今朝もおんなじ子が遅刻
うるさくて恐いけど好きお母ちゃん

大阪市　中井崩

取り立て屋国の借金まかせます
ピンク色私の恋に後押しを
昼の月何か話が有るらしい
嫌な人少なくなって加齢知る
あの人もこの人も泣く憎い膝

池田市　多田契子

菊を愛で煙草ポイ捨てする文化
妻の愚痴あまりに夜が長過ぎる
温かい母の手ぼくを忘れても
まだ遊び足りぬ残り火持て余す
一日を歌い流した仕舞い風呂

池田市　上嶋幸雀

美しい国ほど遠いニュース見る
とうさんもいる今夜のカレー美味しいね
子の背丈伸びて嬉しい衣更え
水族館顔寄せ子らの目が光る
お前って呼ばれていまや金婚に

泉大津市　助川和美

青春の友と歩いた月明かり
父母のいました頃の里が好き
川の字に寝た旅娘うれしげに
鉄造る八幡が俺の古里だ
心病む妻は小犬に願いかけ

河内長野市　木太久正一

人生を遠回りして知恵拾う
秋がすきさんまがすきで酒もすき
叱られて目じりに涙子の寝顔
ゴミ払うふりしてそっと妻の肩
急いでも人生長くなりません

河内長野市　宮守正博

売れ筋をゆっくりと追う老いふたり
まだ途中余計な口は出さぬこと
呼び止めても待ってくれない時と金
アルバムを閉じて思い出温める
若者の姿見えない立ち飲み屋

堺市　羽田野洋介

それなりに光っていたい古希の坂
思い出のところどころに穴がある
慌てると出て来て困る国なまり
親の恩返しきれないまま別れ
長生きしょうきっといい事ありそうな

吹田市　二宮栄子

鏡見て練習しているいい笑顔
どの岩も仏の顔に見える滝
那智の滝世界遺産の文字嬉し
噛む力増やして脳の活性化
医療までなんでもありになる怖さ

高槻市　安田忠子

豊中市　荒巻　夢

路地裏に箔打つ音の響く街
結婚と愛はセットと信じてた
母に出す文はいつしか片便り
耳掃除母の太腿温かった
光りものつけてよいしょと立ち上がる

富田林市　古田千華

新しい命誕生負は忘れ
万年青の実母がいとし子抱くように
生姜湯の熱さに亡母を思い出す
牡丹鍋止そうよ君の年だもの
気負いすぎ素肌に微熱続いてる

寝屋川市　北田ただよし

新年も水と空気に護られて
国境は眼に入らない渡り鳥
不作年木守りの数増やしとく
エッシャーの絵に騙される歳になり
肩すかす技うらやまし一本気

羽曳野市　福田悦子

捨てられぬ勿体ないの中で寝る
おめでとうのメールに愛が薄れ出す
耳栓の奥に残した亡母の声
一期一会今年もたんとあるだろう
癌十年やっと卒業出来ました

羽曳野市　永田章司

履修漏れ先生走る師走前
懐炉では懐の冷え温もらず
歯に衣を上手にきせて歳をとり
人の見栄犬に着せます散歩道
常識がネット社会で空回り

羽曳野市　森下一知

ライバルが白い歯を見せ寄ってくる
臥す妻にそっとたずねる水加減
褒められる悔しい負けの紙一重
しあわせを掴みそこねた空財布
無記名にすると賛否が入れ変わる

羽曳野市　吉村久仁雄

明日の虹追いかけ今日の罠に落ち
欝の字のようで寂しい冬木立
美しい国は本音を語らせず
日向ぼこのたびに近づく好々爺
なるようになって清しい共白髪

枚方市　小林わこ

心の扉番号通りには開かぬ
ルールブックに載らぬ育児のアラモード
人も車も何はともあれ車間距離
生きて行く一本道は四苦八苦
カラオケマイク揺れて楽しいバスツァー

藤井寺市　伊藤アヤ子

歯車も丸く噛み合い五十年
錆止めに夫婦喧嘩もたまにする
これからもまだ咲くだろう種を蒔く
手のひらの皺の数だけあるドラマ
生命の価値がだんだん薄れてる

藤井寺市　西村栄一

まだ今は笑ってすます物忘れ
妻の手前やる気だけでも見せておく
病院へ行くのにスキのないおしゃれ
長電話天ぷら鍋がさわぎだす
フルムーン妻の元気が恐くなる

八尾市　田邊浩三

コマーシャルの間に作る卵焼き
今ごろの若い者はと娘がぼやく
ケイタイが使いこなせず古希迎え
絶叫が未だとどかない温暖化
優しい目勝たずに勝ったハルウララ

八尾市　松葉君江

環境にうるさい父の缶拾い
幼児に躾の種を植えつける
悲しみの涙乾かぬ拉致家族
うるさいが母の小言は身のこやし
思いこみ自分で自分だめにする

八尾市　前田紀雄

万歩計身体の脂肪燃えに燃え
はっきりと競育しない教育を
柿たわわ頂きました絵の中へ
ヘッドホンへ車内の視線突き刺さる
口下手で言い返せないもどかしさ

八尾市　赤木妙子

わたくしの根気を計る棒グラフ
疑心暗鬼がだんだん薄れゆく良夜
皺がまた増えたと正直な鏡
光も影も抱える母という港
労わられすぎれば脆くなる根気

大阪府　畑中節子

走り過ぎ曲がりきれない人生路
初採りの白菜漬けて食すすむ
華やげる刻を求めて旅の宿
遍路友逝きて淋しき一人旅
ウォーキングやさしき風を道連れに

神戸市　両川無限

裏側は知られたくないゴミ袋
裏方の汗に感謝のハイタッチ
泣きながら女ドラマの先を読む
カーナビはなくても父の地図がある
いらんこと言うから幕が降ろせない

ベルリンに永住の娘に会いに行く
娘に会えば連れ帰りたく連れ帰る
長男と長女左右に食進む
孫裕司高校生は頼母しい
ベルリンの絵葉書前に孫想う

神戸市　船津とみ子

エゴの手に頼られている神の鈴
一年の計が十指に余る欲
初釜の膝かしこまる孫和服
減反に案山子は主義を超えて立ち
神様へ弱いわたしを晒けだす

相生市　村木信子

食通の母は料理に手厳しい
言葉選る医師の瞳は空を切る
わずかずつ善意を寄せて響き合う
届かない思慕に揺れてる鬼薊
お隣のバラが残り火かき立てる

尼崎市　河津正治

婚五年もたせやりたい母子手帳
週末の孫の足音聞く軽さ
ただいまの声の軽さで今日わかる
食の秋ダイエットまた後まわし
ジャンケンを覚えた孫はチョキが好き

三田市　辻開子

星空にテルテル坊主嬉しそう
お袋の味はやっぱり日本一
問題が終れば次が待っている
年金でムード買うほど余裕なし
娘より息子の嫁のみやげ買う

篠山市　石塚精一

眼力のある訴えに実を見る
一休みまた一休み散歩道
極楽の入口みたい茜空
反抗を重ね大人に脱皮する
恋多き人は不幸かも知れぬ

西宮市　藤本直

菊かおる園遊会のそこかしこ
カタカナ語紙面にあふれ文化とや
分校もあった田舎のあたたか味
オリジナル試着オーケー旅に出る
コンビニで手抜きしてます食文化

西脇市　七反田順子

菊日和途中下車してウォーキング
世話好きが逝きクラス会行き詰る
友の分飲んだことまた飲んだこと
みなと小樽ムード歌謡の似合う街
我が馳走めざし沢庵御御御付

奈良市　矢野良一

恋ごころキラリと咲いてまだ女
漂白をされて個性も消えてゆく
本当に愛してました以下余白
遮断機の決断力は女だろ
本当も嘘も昨日へ置いてきた

和歌山市　柏原夕胡

連休も老母と二人でテレビ見る
もめ事に妻の霊感よく当たる
ちょっとだけ背伸びし生きるわたし流
スマートになったと言われ慌ててる
写真展友の笑顔が眩しすぎ

和歌山市　根田よしこ

ドアチャイム聖書一冊説きにくる
転んだ跡をときどき思い出す苦笑
お喋りが健康法とおんな達
一日一善いのち大事にしています
退屈へ浅蜊の口が一つ開く

和歌山市　田中すず

よく笑う女で転び癖がある
なにもないことが嬉しい夕茜
母の愛苦しみ掘って深くなる
どの色に咲くか球根春を待つ
大型店潰れ息つぐ小商い

和歌山市　土屋起世子

宝物に飛鳥美人の汗の色
私の怒りを煮込む鍋祭り
いくつかの理不尽を越え花が咲く
採れそうだと思った途端枝折れる
大仏の風がささやく大丈夫

海南市　小谷小雪

落ち込むと花と会話のできるぼく
秋の花静かな風の通り道
内面の映る鏡を手に入れる
スタンドを消し今日のこと明日のこと
腹筋の壁に努力と書いてある

紀の川市　辻内次根

山また山信濃五号で詩談義
命の灯諏訪湖に映す前夜祭
小渕沢くんだりに来て受賞式
テレパシーここに座れる予感した
ちっぽけな私をみてる天高し

紀の川市　木村徑子

目ざましのセットうっかりOFFのまま
早々とチラシが誘う冬支度
コスモスと一緒に遊ぶ小半日
晴れた日はハミングしてる洗濯機
秋風を腹いっぱいにツーリング

鳥取市　山岡紀子

泣いている児に声かけを躊躇する
金婚日夫は変らぬ仏頂面
金婚日きのうと同じ有難さ
年輪は苦労話も楽しそう
虫メガネ人の心を覗くまい

鳥取市　横田春名

毎日が休みのんびり生きてゆく
夫連れて京寺巡り貸タクシー
このところ妻の手料理腕上がる
検査する度に小さな病ふえ
階段を妻軽い音布団乾し

米子市　小塩智加恵

諦めぬ心が動くかたつむり
愚痴る事なくそよそよと枯れ芒
訪ね来た人かと思う風の音
勝ち組だ敗け組だなど決められぬ
山やまが錦をまとい待っている

松江市　山根邦代

雲つかむような話もいつか消え
難問に頬杖ついて時は過ぎ
徒然の旅の会話に気もほぐれ
水槽を回る金魚の一人言
友逝って孤独になったちぎれ雲

出雲市　川島和歌子

年頭の誓い今年はマイペース
周り皆輝いている初日の出
どんぐりで当たり障りのない話
眠れぬ夜聞いて下さいお月様
またしてもバベルの塔で終りかけ

雲南市　武島ちよえ

節目から水の流れが早くなり
今にして思えば亡母に苦労かけ
ごめんなさいただ一言へ許す気に
こんなとき呆けたふりして平和です
じいちゃんの耳は内緒がよく聞こえ

雲南市　菅田かつ子

我が新居これでも一戸お庭つき
動くなら百を生きたい両手足
六十年夫婦に満期ないものか
さわやかな朝のニュースが生臭い
ワンちゃんも今や家族の一員に

倉吉市　前田喜美子

早春の野辺は詩情に満ちあふれ
大山はわが故郷のオアシスだ
泳ぎ切る力を持って今日も行く
情熱が氷溶かした青春譜
ヘルシーな七草粥で胃を休め

鳥取県　小飼和代

束縛も愛の表現だと許し
年金の情け容赦もない値下げ
小半刻泳ぐ魚を見て飽きず
地獄耳だんだん遠くなり平和
好きなこと熱く燃えます百までも

鳥取県　大森孝恵

つなぐにはすこうし無理な接続詞
言い訳をする日の紅は控え目に
そのうちと軽い言葉で待たされる
欲一ツ捨てれば余生軽くなり
逆風に強い女の空涙

宇部市　高山清子

トランペット雨戸も壁も通り抜け
願叶い弾む拍手鈴の音
助手席のカーナビどうも寝たらしい
後悔はしてはいないと愚痴を言う
エプロンを掛けたらママに返ります

東かがわ市　赤澤貞月

八十路坂再点検の杖わらじ
呆けはまだ癌情報は頻りなり
治ったら飲むぞと友の電話口
氷壁のヒロインならぬ妻と居る
上信越もみじも酒もご満悦

香南市　桑名孝雄

思い切り笑ったあとの眼が冴える
願うより暇は作れと言う傘寿
身勝手と自由間違えてる若さ
百千の思いを込めた千羽鶴
透明感あふれる声が心彫る

今治市　渡邊伊津志

深呼吸言葉優しくしてくれる
ストレスへ少し元気の出る歌を
琴線に触れる言葉をありがとう
一人旅別れの曲を聞きながら
わらしべを拾ってからは運が向き

大洲市　花岡順子

同居人あなたにとって私何
犬の耳馬の耳かと思う日々
物言えぬ犬と目と目で探り合い
手に取るはあなたの好きな青ばかり
母の味声聞きたさにレシピ問う

熊本県　米加田恭代

初めての句会に参加とまどいて
肥後の味心こめてぞ喜びの
芝居小屋町賑わいて笑顔来る
一合の酒でフラフラ月明り
書き綴り日記がわりの五七五

山鹿市　阿部ミツ子

新春へ未来をつなぐ種を選る
女坂いくつ越えたか十三夜
鈍感なわたしも燃やす母の辞書
あり余る豊かさに怖さが太る

府中市　馬場利子

百態の雲とロマンを語り合う
母に書く便りひらがな多くする
黄昏のページを捲る秋の風
一筋に生きた親父の背に学ぶ

北九州市　岡田幸生

いつの間に手綱を妻が握ってる
拘りを捨てきれぬまま年を越し
仲直りして初春の陽は温い
スランプが断りもなく居候

昭島市　野口忠

母の背を流す幸せ露天風呂
湯けむりの中に米寿の母の顔
ふるさとの海が流したわだかまり
写メールの孫はおすまし七五三

枚方市　二宮紫鳳

裏山の紅葉と競う残り柿
柿を剥く親子で長さ競いあう
身にあった暮しを続け今日も無事
バーゲンの群れにやっぱり引き込まれ

鳥取市　岡田信恵

同居して得た幸せに角があり
ライバルと同じ意見だ風なごむ
こだわりを見せて私を位置付ける
子を守る母が本気で吠えている

大阪市　三浦千津子

ハンカチ王子迎え球場人の渦
あわや追突どっと吹き出す玉の汗
あのうそのうスピーチ終る披露宴
横丁に路地に子供の居ない町

箕面市　寺井柳童

朝青龍ひとり横綱意地の顔
モナリザも弥勒も微笑癒し顔
端正な顔でも裏に鬼が住む
悪友も肥やしになって今がある

枚方市　小川良吉

伝統展を見歩いて秋膨らます
もみじにも雅がのぞく京の寺
十秒で心洗ってくれる星
丸かじりする柿に水音陽の温み

立川市　柏野遊花

大空襲半身不随都市機能
逃げ惑う市民に焼夷弾の雨
疎開児の夢食べ物の事ばかり
弁当の無い子盗む子ひもじい子

池田市　北出北朗

みずみずしい葉の大根に惚れて買い　三田市　阪本藤朗
コンビニも老夫婦家の御用達
ＳＬの汽笛が呼んだ父母の顔
おだやかなこの一日に感謝する　和歌山市　坂部かずみ

柿食えば昔話がしたくなる
秋風に紅筆までが歪みだす
餅搗きもお祭りだった大晦日
重箱に平和な日本詰込んで　寝屋川市　森田麗

口癖は当たるまで待てジャンボくじ
千鳥足妻のアンテナキャッチする
蟠りとけてメールが走り出す
ほどほどに来て安らぎをくれる孫　八尾市　中島春江

湯豆腐に徳利がそっとよりそうた
曾孫の手どんな夢をばつかむやら
十代がお化粧をするもったいない
美人だねお顔上げればあら男　奈良市　尾畑なを江

人の世や台本無しで個が光る
心地良い話にちょっと身構える
里帰り墓石はじいーと待っている
ボーナスという語も過去となり給う

銀杏舞うひらりひらりと一人旅　境港市　遠藤那珂子
私の時間ほしくて家事急ぐ
海の色海の声聞き舟を出す
海峡の風はいつでも舞っている　神戸市　木村忠義

今日もまた今日を大事にして生きる
女性への手紙ひらがな文字が増え
欠点を個性と見れば気にならぬ
笑ってるときの女性はみな美人　八尾市　西川義明

一円五円溜まった瓶を飢餓の子へ
年金が細るばかりの税負担
憧れの吉永小百合眩しすぎ
神様に貰った笑顔絶やさない　出雲市　荒木英子

一人居に寄り添う術のない私
娘と二人慰め合って秋の宵
テレビから料理のヒント教えられ
変化ない余生楽しむ炬燵かな　吹田市　早泉早人

雑草も生きる辛さは知っている
寿命などあてには出来ぬ平均値
父さんは勝ち組学を履修洩れ
四十年妻の仕掛けた罠の中

一日の重さを悟る余命表
内視鏡で政治の裏を覗きたい
丸い背な妻の視線でどやされる
笑点が良いリハビリの認知症

東京都　井上つよし

背のびした暮しも今は丸い日々
快方にペンが励ましくれました
魚偏自分試しに買う湯のみ
元気が自慢まさかマサカの車椅子

藤沢市　加藤スズコ

学科まで入試に合わす予備校化
季節感忘れぬために月見会
子供より親が連なる祭獅子
百均は散歩途中の学習所

北名古屋市　片岡文男

青空と洗濯物は良く似合う
口に出せぬ過去をそうっと抱いている
欠点だらけの人が好かれている不思議
父母よまめな体をありがとう

大阪市　平嶋美智子

大根も早く食べてとセリ伸びる
人生もゆとりを持てと医者通い
一人者神の計らい暇くれる
秋も見ず初春を待ってる実南天

大阪市　吉内福世

談合を子供ニュースで教わりぬ
パズル解く電子辞書から知恵借りる
世間体はずせば重荷かるくなる
プライドが寄る虫さけてまだ独り

大阪市　澤田定子

年上の高齢者には席譲る
同窓会病気自慢のように言い
頭からいけるシシャモで骨作り
タクシーを待たして忙し墓参り

大阪市　平井露芳

掛け馴れた椅子のくぼみに年暮れる
母天にいますぶらんこ高くこぐ
妹の絵手紙元気連れてくる
宝くじ一枚買って初詣で

大阪市　吉田富美

分け隔てなく育てたが咲かぬ花
余裕でき穏やかになるお人柄
旅の宿一病持った友集い
菊日和寡黙な夫とお茶すする

大阪市　寺井弘子

書初めの墨黒々に癒される
健やかに今年も運呼ぶ祝鯛
屠蘇を酌み妻と舞い初め春の海
年玉に両手合わせる可愛い孫

大阪市　吉川弘泰

嬰児の掌のにぎり返してくる絆　泉佐野市　備後三代子

ステンレスぴかぴかにして娘は帰り

選外に好みの鉢の菊花展

生け垣に吊り下げられた落し物　門真市　矢阪英雄

無人校花が咲いても何語る

黒板の落書枯れた粉と散る

深浅の頭の位置で善をきめ

陳謝する頭の角度何度まで　河内長野市　内海綾乃

土日晴れ稲刈り急ぐ老夫婦

車椅子コスモス畑見えないよ

行きたいなみちのく歩く秋の旅

頭下げ批判過ぎるの待つ教師　河内長野市　黒岩靖博

百八の煩悩乗せて除夜の鐘

雨上がり深紅の梅花湯女のよう

赤い糸別離の女に望みかけ

母の声内緒話も尻上り　岸和田市　坂口英雄

昨年も来年こそと言ったはず

ほとぼりを冷ます間がないいじめ記事

核持てば平和の楯になりますか

北の核分解すれば日本製

教会で心を洗う裏表　岸和田市　中岡香代

裏切りを攻めれば夫がプチ家出

ケータイは見えない糸で監視され

喜びは表に出さず内にひめ　堺市　荻野像山

少子化の公園に猫また増える

自殺の子増えてようやく重い腰

蟹しゃぶる女はしゃべる口もある

絵手紙へ贅をつくした蟹料理　高槻市　笠原乃りこ

おはようとまずは鏡に笑いかけ

サブリミナル駅のポスターかにばかり

ダイエット胸からやつれコンチクショー

混浴にめがね磨いて入る夫　高槻市　峯村勲弘

きっちりと割り勘にして長続き

濡れ落ち葉乾いてからのマイライフ

紅葉を添えて都会の子へ便り

核装備近くの国を遠くする　豊中市　源田啓生

下流域わんどの魚の住み心地

俺よりは先に死ぬなが口癖に

転がって丸くなる人尖る人

ゆっくりと老いて孫追う足でなく

裏切りは決してしない花づくり
立前と本音と嘘の三色ペン
楽だから列の中ほど歩いてる
母想う放り上げたる月丸し

豊中市　谷川勇治

嘘ばかりついて看取った甥の癌
猫だけが残った家に餌やりに
片付ける手は進まずに三七日目
生かされて今日も明日もまた明日も

豊中市　神野宇乃子

川柳に卒業はない勉強だ
なにもかも信じられないことばかり
栗御飯なつかしい味母想う
古里の山水墨の絵のようだ

羽曳野市　松本静子

悲しさと口惜しさ胸にバギー押す
関白で甘え上手な夫でした
叱られる娘が居ります良い余生
幸せよ人が教えてくれてます

東大阪市　大塚サキ子

お正月笑い袋を開けておく
いのししも御神酒飲みたい里に来る
胸張って女一人を生きている
町入りの挨拶まずは花をほめ

藤井寺市　増井ヨシ枝

老妻の散歩すこおし紅をさし
教材の稲もバケツで頭たれ
ウリボウの突進出来て初日の出
猿熊よ君も被害者なんだよね

藤井寺市　津田シルク

太りぎみは妻のせいだと言いたそう
虫さまがご賞味の菜をありがたく
お帰りと言うて言われていつまでも
嫁なりに工夫してます家事手抜き

藤井寺市　俣野登志子

十二月母さんに書く感謝状
平凡も電話一本から崩れ
石なのに柔らかそうな羅漢像
人の事気になり過ぎて不整脈

藤井寺市　吉田喜代子

人の世話するのが好きで隣まで
この水で生かされてます淀の川
逃げぬようちゃんと携帯持たせられ
のんびりと歩くと決めた誕生日

寝屋川市　岡本勲

柳友逝きて過ぎ来し日々をありがとう
朗らかで明るい笑顔黄泉のひと
想い出のメロディーあの日甦える
命断つ胸の深層誰か知る

寝屋川市　小嶋みさと

肩書が取れて階段面白い
傷だらけ痛み叫んでいる地球
血も涙もほんとにあるの北のボス
勝算をぐっと堪えて出方待つ

八尾市　寺川　はじむ

大鍋におでん煮込んで旅に出る
ためらいの自由を奪う自動ドア
ふんぎりの悪い頭の冬帽子
聞き上手忘れ上手で長生きし

八尾市　田中　トシエ

人生の歩みが判る顔の皺
脳萎縮標準並と医者は言う
ストレスもカバンに詰めて児らの列
気取っても背筋に老いが顔を出す

八尾市　笹倉　ひろし

病んで知る病まねば知らぬこの苦痛
受験生神か仏か実力か
迷いみちどこにでもある人生も
争いの火種を作る親も居る

大阪府　西川　冷子

井の蛙世のスピードに誤作動し
しばらくは菊の香に酔う路地の道
シナリオの通りに行かぬ途中下車
傘寿母障子の影も猫背なり

大阪府　高木　道子

胸襟を開いて話せ首脳たち
急坂に途中の一服青い空
ケアハウス子等と見学身につまり
老いを背にホームを巡り茜雲

大阪府　若月　祐作

今日という時を大事に暮らしてる
お目当に釣られ用事が早くすみ
一通りだけでは行かぬ生きる道
お金では買えないものが今欲しい

大阪府　小栢　こずえ

腹が立つアルバムみればおさまった
風邪熱も元旦だけはえんりょする
名画より孫の写真で隙間なし
助手席でブレーキかけてつかれだす

神戸市　武田　恵美子

泣き笑い一人芝居も馴れてくる
寝台車東北の旅なつかしい
テレビつけ本を読んでる秋夜長
孫達に運よき出会いあるように

尼崎市　古川　正子

窓際へ送って空気入れ換える
草笛のリードに弾む愛唱歌
胸に秘す想いに駆られ走る筆
水中花散りたい気持泳えてる

尼崎市　桑原　東園

手作りの賀状一言添えておく
変化無い日々が幸せなのだろう
子の自立遠く離れて祈る母
うちの犬隠し時計で時告げる

尼崎市　小池幸子

小品にも重み加わる岩絵の具
十年忌自問自答の供え酒
転勤の孫から受けた初電話
春そなえ色紙に納むひのとの亥

加東市　岩本美緒子

熊が出る外に出るなと山の宿
バスツアー気付いてみれば最高齢
健康欄だけはじっくり読む傘寿
もう少し呼びに来ないで閻魔さま

加東市　安達厚

観劇へ旗先頭に弾んでる
空港の展望台へ別世界
現実にもどる賑やかみやげ店
いづこへの飛び立ちなのか覇気あふれ

加東市　黒崎美紗子

とり込んだ銭の成る木と長い冬
湯豆腐に鍋が二つの大家族
澄んだ目のままでサンマはあみの上
亡夫の背向うに消えて曼珠沙華

篠山市　谷田多美子

留袖が送るジーパンハネムーン
玄関の男の下駄がものを言う
夏は冬冬には夏が好きになる
もしもしの次は相手で変る声

三田市　上垣キヨミ

つれあいの体の不調伝播する
談合がバレる初めはチクリだろ
困らない人に当った宝くじ
大人しい人ほどプロレス好きでんな

三田市　臼井二英

冬近しこよみだんだんやせてくる
家中にしいたけ匂う年の暮れ
すれちがう焚き火のにおいつけた人
パソコンで頭もキーも打ってます

西宮市　石野照代

寿司お餅作れば祭り気分が出
松茸が今年も駄目となげく友
この雨で野菜私もほころびる
いいちこも一晩コップただの水

兵庫県　永井かほる

秋深く山並み燃えて肌冷える
冷える夜は晩酌進み笑み戻る
ギャンブルで稼いだ金は風で飛ぶ
文明の世界離れて文化見る

生駒市　小西稔

失敗もあって旅路のおもしろく
同じ旅したと思えぬ土産量
いっ時のブームに巧く踊らされ
弱者をもいじめて手にす優越感

橿原市　藤永実千代

一年の計へ雑煮が熱すぎる
携帯の子分にされて逃げられぬ
禁煙をしますこいつを吸ってから
散歩道僕の臭いを付けてくる

和歌山市　山田侃太

旅仕度入れては出してまた入れる
いい思い出を小出しに老いをなぐさめる
親友も越してはならぬ線を引く
握手する口で言うより温かい

鳥取市　山口千代子

逝く秋へ今宵名残りの栗御飯
冬将軍早く来るには及ばない
自殺まで追い込むいじめ悲しい世
憲法改正すれば平和と限らない

鳥取市　近藤秋星

万老万死薬は心丸くのむ
兄弟が集まれば父生きてくる
水鏡愚痴とおかめを映してる
戦争に負けて平和をとりもどす

鳥取市　谷岡清子

手間暇をかけて我が家の味にする
注連縄の手作り飾り無事祈る
家内安全祈りの鬼門に札かける
ゆらぐ灯に祖先を偲ぶ和ローソク

倉吉市　福光京子

豆腐にも絹と木綿の舌ざわり
欲を張りすぎ分け前が目減りする
金婚式やっと根が張りどっかりと
待ちぼうけデートの場所を違えたか

倉吉市　酒井芙美子

人並が上にあるから見上げてる
新米の総理の品種ナナヒカリ
大笑い後で目じりの涙ふく
休刊日あれどないのが休肝日

境港市　中井虎尾

レンタルのきもの喜ぶ七五三
応援団テントゆるがすリレー戦
ロボットの故障にんげん出番です
グランドゴルフ体育の日を謳歌する

鳥取県　岡村孝明

ひとつづつ夢が叶えば二重丸
平和ボケ知覧の旅に涙する
旅すがら長崎の鐘とこしへに
ともすれば片方ばかり見がちです

鳥取県　大田勝誉

鳥取県　岩崎和子

生きて行くプラス思考でバラ色に
根くらべ夫婦泣いたり笑ったり
収拾のつかぬ戦が恐ろしい
重ね着で寒さ宥めて読書する

松江市　松浦登志子

詰め甘く二女と三女に負け戦
風吹いて空気を知った蝸牛
ラジオから救いの言葉流れくる
わたしって甘ちゃんなんだ五十八

松江市　柏井日出子

高貴本送れば高貴ふみが着く
冬の燈のわびしき部屋に落ちついて
呪文まだ解けずはる待つ枯れのつる
どの位置で観ても一流森光子

松江市　相見柳歩

親切の芽を大切にまた人へ
私の一歩と雨の移動距離
また寄せて寄せてはかえす愛の波
顔の汗青いハンカチ青い空

雲南市　福間博利

天国の道だきれいな虹のみち
やることのあって生きてる今日を知る
シベリヤの春の想い出八十五
老妻が大事にしてネと免許証

米子市　猪森スミエ

脳の錆拭く雑巾を造りたい
離着陸時計代わりで野良仕事
武者人形菊の衣装で時の顔
楚楚と咲く野菊は誰を待っている

府中市　藤岡ヒデコ

雪になる迄には仕舞う畑仕事
急いたとて漕ぐだけ進む舟である
足腰の弱さを庇う口の先
ソワソワも無くて正月迎える気

府中市　岩本雅代

陽が落ちるサンマの香り鼻につく
自慢する種も無ければ貝ノ口
女坂峠越えればドッコイショ
なり振りもかまわぬ主婦で介護する

東かがわ市　中塚寿々女

暖かいもてなし受けた旅の宿
ユラユラとキャンドル揺れて温かい
手造りのマフラー一本縁結ぶ
石灯籠綿雪かぶり嫁御寮

香南市　百田幸

コスモスが今年も笑顔みせてくれ
いつまでも猫背の母が目に残る
うつむいて働くだけの母だった
なごやかに老後を生きる道を撰る

（岩崎　實・清水園實両氏の句は56頁に掲載）

高野山合祀法要

於・高野山大霊園

十一月十一日、夜来の季節はずれの雷雨もおさまり、ご遺族様を併せ二十名で第十八回の川柳塔合祀祭が行われました。ケーブルを降りると山の霊気が身に染み、バスの中からの美しく色づいた木々に、晴天でなかったのがかえすがえすも惜しまれました。読経の始まる頃から、また雨脚が強くなりましたが、合祀者のお名前が読みあげられ、次々に焼香もすすみ、歴代の主幹と多くの同人の御霊に合掌、無事終了致しました。

今回合祀された皆様方は、先に行かれた方々と天国の句座で談笑しておられることと想像し、心が安らぎます。

レストラン楊柳で食事のあと解散、一部の方は小雨の中奥の院へ参詣、一部は時間をくり上げて帰阪と、川柳塔社の大きな行事である一日を終えました。（米澤俶子記）

新合祀者　敬称略

岡本吉太郎・亀井皎月・本吉宗光
中後清史・久保まさお・野村太茂津
北岡波留吉・藤井明朗・本間満津子
田口虹汀・岩屋美明

御供養拝受（敬称略）

久保美栄・田口光子・藤井洋治

原稿募集

― 私の宝もの ―

四月号掲載の特集原稿を募ります。自分の大切な宝と思うもの（人物、言葉、思い出、品物等）何でも結構です。同人のご応募をお待ちしています。

四百字詰め原稿用紙一枚半～二枚（六百字～八百字）

タイトルは別につけてください。

締切り　二月十五日　本社事務所宛

但し原稿の採否、添削は編集部に一任してください。

編集部

第99回　中部地区誌上川柳大会

宿題と選者　（各２句）（読み込み可）

「温」（宮村　典子選／安永　理石選）
「故」（青葉テイ子選／佐藤　岳俊選）
「知」（八木　千代選／桑原　伸吉選）
「新」（中川　一選／木原　広志選）

参加料　千円（発表誌４月号呈）（切手不可）

賞　合点30位まで呈賞他

締め切り　**1月31日**必着

投句箋　各題別用紙1枚2句連記、横4cm、縦19cm位、上2cm空けること（計4枚）裏面に記名（但し清記選）

投句先　〒510-801 四日市市茂福町32-1
石田寿子方　中日川柳会事務所
TEL 059-365-8787

主　催　中日川柳会

同人特集

私の一句

（順不同）

虫食いの野菜は神の食べ残し　堺市　河内天笑
満腹のときは反対などしない　大阪市　西出楓楽
早過ぎる羽化へ芝居が追いつけぬ　美祢市　安平次弘道
日本晴れああ生かされて生きている　羽曳野市　酒井一壺
浮草の漂う如く半世紀　東大阪市　佐々木満作
約束を忘れあの世へいったきり　八尾市　村上ミツ子
不揃いに育ってみんな味がよい　東京都　清原悦子
渋いお茶話の種も入れ替える　松江市　津川紫晃
路地裏はほんのりレトロな匂いする　東かがわ市　伊勢八重子
ふる里でゆっくり鎧ぬいでいる　奈良市　天正千梢
未練など後に残さぬ潔さ　静岡県　薗田獏杳
生きている限りは活火山である　海南市　三宅保州
ずかずかと我が物顔に寄せる老い　堺市　村上玄也
笛吹けど届かぬ距離にいる絆　高知市　小川てるみ
生きていく坂は越えてもまた一つ　東かがわ市　清川玲子

世の乱れ元はわたしの不心得
晩学に溺れてならぬ水中花
面白い話に耳が動き出す
人のためにしてこそ自分にも還る
点滴が外され眩し三分粥
ご出産男児万歳日本晴れ
人間はみな雑草という輪廻
免許証三年間はこの顔よ
おしゃれ眼鏡わたしは春の狩人に
団塊の世代野山に溢れ出す
てのひらに乗せるあなたの四コマ目
姑看取るわが身もいつか辿る道
振り向けば背中丸める影法師
満点のあなたにいちずさが欠ける
どか雪の捨て場に億の金を捨て
ブナ林も雑木林も温かい
カード社会人を四角にしてしまう
それ言えばもう昨日には戻れない
スローライフ鐘の余韻に合う歩幅

交野市　田岡九好
出雲市　園山多賀子
雲南市　毛利幸
河内長野市　植村喜代
高槻市　瀧本きよし
鳥取県　山本正光
大阪市　岩崎公誠
和歌山市　宮本三喜夫
米子市　林瑞枝
佐倉市　岡井やすお
鳥取市　倉益一瑶
鳥取市　有沢せつ子
東大阪市　森下愛論
京都府　稲葉冬葉
弘前市　櫻庭順風
米子市　青戸田鶴
枚方市　海老池洋
大阪市　小泉ひさ乃
松山市　宮尾みのり

逢うてただ手をとるだけの年となり
子に見せる背中だしっかりと磨く
まだ意志があるから開けぬ玉手箱
極楽はこの世にあると信じたい
寒月が凛としていて逢わせない
女房を拝んだ昨日もう忘れ
思いやり貰い命がひかり出す
何度でも待ちます春という季節
野仏とお話が好き山が好き
春よ来い誰かが歌う冬日和
たがやせば母の大地はよく笑う
バイキングねじ巻き過ぎた腹時計
老いて尚生きる火種をかき集め
富士山に恥をかかしている日本
年賀状三百枚が春を呼ぶ
年金が余るだなんて法螺こくな
川床で舞妓交じえてなごむ夜
携帯とデジカメ持ってホイサッサ
限りある生命笑って過ごさねば

尼崎市　山田　耕治
鳥取市　奥谷　彩子
大阪市　川久保　睦子
羽曳野市　徳山　みつこ
松江市　安食　友子
吹田市　野下　之男
河内長野市　水谷　正子
吹田市　須磨　活恵
藤井寺市　若松　雅枝
伊丹市　山崎　君子
倉吉市　山中　康子
唐津市　樋口　輝夫
東かがわ市　原　賢
鳥取市　土橋　睦子
鳥取市　土橋　螢
鳥取市　土橋　はるお
大阪市　津守　なぎさ
大阪市　津守　柳伸
大阪市　澤田　和重

漬けものの味をご近所競い合い　唐津市　宗　水笑

国民はおそらく国を愛してる　唐津市　仁部四郎

深読みの選者作者のしたり顔　唐津市　坂本蜂朗

外面の良さに内助が耐えている　唐津市　井上勝視

失って知る相棒のありがたさ　唐津市　久保正剣

天災に人災地球焦げ臭い　弘前市　今　愁女

プロセスを楽しみながら作句する　岸和田市　雪本珠子

秋まじか妻はねんいり化粧する　枚方市　二宮山久

花野まで行く人間の夢無限　八尾市　宮西弥生

よそいきの希望取り出すお元日　橿原市　居谷真理子

赫々の落暉へ明日を予約する　弘前市　高橋岳水

砂浜で小さな悔いを押し流す　平川市　小寺花峯

意地張って引く潮時を見失う　大阪府　米澤俶子

まだ死ぬという大仕事残ってる　岡山市　井上柳五郎

共白髪お色直しをする遍路　横浜市　小野句多留

おへその位置ずれて冗句に会う電話　和歌山市　田中みね

僕の影他人さまには見えている　鳥取市　岸本宏章

クラス会幸せ芝居して帰る　鳥取市　岸本孝子

幸せはほどほどがよい丸い背な　大阪市　津村志華子

オムツからオムツとの差が人生だ　大阪市　川原　章久
ひつこい男でもったいない美点　鳥取市　武田　帆雀
水仙を笑顔で活ける花鋏　姫路市　古川　奮水
カレンダー○がついてる僕の留守　三田市　堀　正和
武蔵大和魚礁となって幕が降り　東かがわ市　木村　あきら
名刹と味覚楽しむ古都の四季　大阪市　河井　庸佑
平安の百人に逢うかるたとり　交野市　山川　日出子
お茶席のマナー日本美しい　大阪府　籾山　隆盛
紙かぶとかぶせ男子の顔になる　大阪市　松尾　柳右子
他人の子を叱った昔なつかしむ　神戸市　池田　善守
花茫茫此の世の未練断ち難く　弘前市　波多野　五楽庵
木漏れ日を両手で掬い詩を詠む　鳥取県　小西　雄々
あれこれのドラマに満ちた再生紙　唐津市　市丸　晴翠
穏やかに満ちる私の湖がある　鳥取県　石谷　美恵子
詰め過ぎか袋に今が入らない　鳥取市　西川　和子
悲喜こもごもあって人生フルコース　富田林市　片岡　智恵子
誰もかも願う平和のむずかしさ　西宮市　亀岡　哲子
夕立が晴れたら挑む山がある　和歌山市　武本　碧
ご近所に後押しされてミニハウス　寝屋川市　平松　かすみ

読むほどにやはり九条好きになる
雪国のハンディみんな分かろうよ
変わる世をしのぐにしまつしか知らず
台風のさいごっ屁だったこの暑さ
うれしい日何があっても許される
つまずいてひょいと覗いた別世界
お袋の味に計量器はいらぬ
美味いもの食べると笑いこみあげる
雑魚という立場気楽に生きている
そのままにしてよ落葉を踏みたいの
金がないだけの苦労は楽なもの
ゴミほどのダイヤで妻にありがとう
握手した手から戴く温か味
諦めることから次の幸が来る
涙そうそうまだ唄えない三回忌
鈍行に乗る人生のロスタイム
本流を描くブルーを絞り切る
行き詰まり別のものさし当ててみる
経上げるしばしあの世と糸電話

岸和田市　岩佐ダン吉
鳥取県　谷口次男
吹田市　早川棲世
大阪市　渡部さと美
大阪市　榎本舞夢
吹田市　大谷篤子
宇部市　平田実男
東かがわ市　川崎ひかり
豊中市　安藤寿美子
吹田市　瀬戸まさよ
堺市　齋藤さくら
吹田市　穴吹尚士
和歌山市　福本英子
大阪市　神夏磯典子
和歌山市　玉置当代
河内長野市　井上喜酔
八王子市　播本充子
大阪市　井丸昌紀
豊中市　山門タミ

ごちそうは罠でも食べることにした　高槻市　指宿　千枝子
明日への一歩踏み出す爪を切る　長岡京市　山田　葉子
まだ米寿も少し娑婆で粘ろうか　藤井寺市　鈴木　いさお
挨拶は下手だが情のあるお人　岸和田市　原　さよ子
雲ふわりいいなお前は風まかせ　河内長野市　村上　直樹
きっかけは七転び目に肩を借り　堺市　西村　りつえ
古希過ぎてまだ売り言葉買っている　神戸市　伊勢田　毅
辿りつく先を描いて観る希望　亀岡市　井上　森生
ふる里の山に抱かれて眠りたい　愛知県　早川　盛夫
今朝も顔洗っています生きてます　大阪市　大川　桃花
ごく稀にたすけてくれる神仏　鳥取県　新家　完司
きなくさい風九条も年金も　篠山市　遠山　可住
結論の見えぬ介護の手の温み　真庭市　国米　きくゑ
美しく生きたい私の持ち時間　米子市　木村　春枝
自分史にいつも邪魔する迷いごと　西宮市　坪井　孝一
炎の匂い消えた男の紙おむつ　奈良市　米田　恭昌
やさしさに触れると生きていたくなる　西宮市　門谷　たず子
正確に回る地球が速すぎる　熊本県　髙野　宵草
八十路ふみやっと自分の顔となる　八尾市　吉村　一風

しぶしぶで乗った誘いにのめり込む　羽曳野市　安芸田　泰子

身を愛す家族を愛す国愛す　寝屋川市　坂上　高栄

徴兵を病で逃れ卒寿なり　堺市　奥　時雄

懸命に走り襷をつないでいる　出雲市　伊藤　玲子

足の裏ほっと安らぐ夜があり　大阪市　榎本　日の出

光るものなんにもないが健康だ　米子市　光井　玲子

マンションに住んで薄れる四季の感　高槻市　傍島　克治

振り払う老いのウロコが離れない　倉吉市　最上　和枝

百歳の笑顔に恐れ入りました　東大阪市　谷口　義

フィクションの世界で生きている自由　高石市　浅野　房子

渋柿が渋を抜かれたイエスマン　熊本市　永田　俊子

八十路坂今更姿勢言われても　松江市　恒松　町紅

法名を受けても我執しゃしゃり出る　弘前市　岡本　花匠

初対面こんな私でいいですか　東京都　岸野　あやめ

良く笑う娘といて痛さ忘れいる　大阪府　桑田　ゆきの

ちゃんちゃんこ赤を着るまで生きぬこう　出雲市　吉岡　きみえ

朱に染まるお色直しにある余白　大和郡山市　坊農　柳弘

走れるか非常袋に問われてる　西宮市　緒方　美津子

火の章の途中で筆が止ってる　堺市　山本　半銭

過去形になると痛みも懐かしい　尼崎市　長浜美籠
年齢の壁がだんだん厚くなり　吹田市　山本希久子
秋彼岸わたしの曼陀羅いわし雲　京都市　都倉求芽
順風満帆運動靴履きかえる　大阪市　川端一歩
セピア色した青春を抱いている　泉佐野市　山本蛙城
忘れ物コンビニで揃う街豊か　熊本県　岩切康子
人間のルールも知らず子が育つ　豊中市　吉田あずき
笑い声する家が好き福の神　富山市　島ひかる
寂しさが漏れる挙式の控室　豊中市　藤井則彦
ポタージュの愛もとろりと一途なり　鳥取市　徳田ひろこ
成り行きを心得て打つ句読点　出雲市　岸桂子
鍵穴の視野で中流意識持つ　横浜市　菊地政勝
燈火会へ鹿も夜ふかししています　堺市　近藤豊子
ゆっくりと呑めばゆっくり酔うお酒　寝屋川市　太田とし子
肝臓を年中無休にしてる酒　奈良市　宮口笛生
神仏の化身に頼り人は生く　大阪市　中村れんげ
思い切り走ってみたい春の靴　芦屋市　黒田能子
躓いた数だけ角が取れてくる　松原市　玉置重人
ネクタイの渋さは愛人からのもの　京都市　高島啓子

四捨五入せずにのんびり生きてやる　黒石市　相馬一花

自画像に明るい彩を足してみる　和歌山市　山口三千子

化石になる途中でございます 私　西宮市　山本義子

春風に私の五感揺り起す　大阪市　西川更紗

その汗はきっと喜び生むだろう　松江市　小川注湖

年金の軽さ重さよ蝉時雨　河内長野市　山岡冨美子

秤にも納得できる体調だ　鳥取市　中原汲香

どの花も涼しくおもい秋を着る　鳥取市　中原みさ子

右ひだり脳いっぱいに在る秤　鳥取市　中原諷人

手秤の中にちちはは納まった　鳥取市　森山盛桜

針金をくねくね人というオブジェ　鳥取市　上田宣子

白い飯さらにブランド選っている　米子市　野坂なみ

昼の月ゆらり水母とひびきあう　和歌山市　木本朱夏

灰を掃くためだけにある灰均し　弘前市　福士慕情

もうすこし生きよう月が美しい　豊中市　田中正坊

妻がいて長閑な海にしてくれる　神戸市　山口光久

力任せゴキブリ叩き姿なし　大阪市　池上清治

人間が好きでやっぱり群に居る　岸和田市　堤楢代

深い山河持った男についてゆく　奈良県　渡辺富子

三年先の米寿目指して二人生き　尼崎市　春城武庫坊

酒蔵の町で育って酒恋し　尼崎市　春城年代

どうせやることなら喜々とやることだ　鳥取市　春木圭一郎

渾身の力で真水掬いたい　生駒市　飛永ふりこ

慟哭の海よ父母老いていく　出雲市　石倉芙佐子

鉢植えもメダカも積んで里帰り　堺市　矢倉五月

腹巻に旅券私は日本人　河内長野市　坂上淳司

十指みな合わせて祈る弥陀の愛　和歌山市　松尾和香

逆らえば雨はわたしに強く降る　藤井寺市　鴨谷瑠美子

漠然と夢の続きを追う余生　尼崎市　田辺鹿太

悠々と自論曲げずに生きている　岸和田市　森元ふみよ

石割って自己主張する白大根　大阪市　板東倫子

凡人の目にもさくらは桜かな　藤井寺市　高田美代子

花散りぬやがて私も吹きだまり　四條畷市　吉岡修

褒められてとまどうている赤い爪　相生市　中塚礎石

残り火を燃やせと煽る向い風　松江市　三島淞丘

輝かせてあげたい老母の髪を梳く　美作市　山本玉恵

一言が音符のように心地いい　西宮市　西口いわゑ

人生の日没に来て知る悟り　大阪市　鶴田遠野

六十五億乗せ宇宙船地球号　鳥取県　深田俱久

饒舌に秋を語ろう柿すだれ　和歌山市　榎原公子

懸命に生きどうどうと胸を張る　寝屋川市　冨山ルイ子

進学はこれで最後と弾むのし　東大阪市　笠井欣子

七割の平常心を心がけ　さいたま市　星野育子

カニツアー旅人らしき人はない　堺市　志田千代

正義感変らぬはずだけど黙る　豊中市　江見見清

どこへやったお前しらんかといつも　大阪市　古今堂蕉子

絵馬に見るはみ出しそうな願いごと　岸和田市　土橋房枝

苦い恋してやわらかくなりはった　堺市　河内月子

草に寝て宇宙の中にとけてゆく　大阪市　前たもつ

押して駄目引くことも知る歳の功　東大阪市　安永春

明石の鯛実は生まれは印度洋　守口市　石森利昭

大好きなひとが棲んでる熱い胸　香芝市　大内朝子

枯れたふり土に眠って春を待つ　大阪府　八十田洞庵

念願の皇居の空に鯉幟　高知県　赤川菊野

感動に出逢う限りは生きられる　岸和田市　井伊東吉

ひとりの椅子高からずまた低からず　西宮市　奥田みつ子

愛染帖

新家　完司　選

二本目の缶ビールには許可が要る

（評）ゼニカネの問題ではなく、身体を気遣ってくれているのは良く分かる。が、許可が要るのは、せめて三本目からにならないか。

西宮市　片山　忠

八尾市　高杉　千歩

仏壇の扉を閉めたことがない

（評）外出のときも寝るときも閉めない。閉めてしまうと、話し相手の大切な人が、扉の向こうの遥か彼方へ行ってしまいそう。

松江市　川本　畔

下半身芋の形で老いている

（評）歳月は容赦なく容貌を変え、体形を変える。「洋梨の形」と言えば上品に聞こえるのであるが、「芋の形」とは、大変なご謙遜。

藤井寺市　鈴木いさお

遠足に遅れた夢を今も見る

（評）「大変だ！　待ってくれー」走ろうとしても足が動かない。汗びっしょりで飛び起きたら夢。試験問題が解けずに焦る夢も見る。

米子市　小塩智加恵

考えるポーズが上手い議員席

（評）申し合わせたように、腕を組んで眉間に皺を寄せて、いかにも難問に取り組んでいるポーズ。よく見ると、コックリやっている。

宇部市　平田　実男

美しい国を汚している政治

（評）安倍政権が旗印に揚げた「美しい国へ」。耳に優しいスローガンだが、先ず、利益誘導型政治、党利党略の浄化から始まってほしい。

和歌山市　上地登美代

それにしてもすっきりしない受信料

（評）NHKも遅まきながら公平負担への取り組みを始めたが、真面目に払っている視聴者から見ると、現状は腹立たしい限り。

和泉市　横山　捷也

満月に見とれてペダル踏みはずす

枚方市　海老池　洋

働いている人もいる遊園地

和歌山市　楠見　章子

風邪をひく昨日は元気だったのに

東かがわ市　木村あきら

割箸がタクトになっている宴

寝屋川市　籠島　恵子

イケズにはイケズ炬燵はまだ出さぬ

鳥取市　岸本　宏章

日の丸の白には深い意味がある

単線の取り柄遮断機すぐ上がる

大阪市　前　たもつ

いい医者だ待たせましたと言ってくれ

信号無視子供にきつく睨まれる

三田市　石原　歳子

転た寝の夫確かめテレビ消す

修理して使い込んでる辞書を引く

三田市　堀　正和

高いもの買ったらしいな僕にシャツ

古希の坂越えた褒美に湯治宿

西脇市　七反田順子

顔に似ず大きな声だ鹿の恋

無理言う猫言わぬ犬とも住んでいる

シドニー　森本クックバラ

今暫し猫に添い寝の冷える朝

見回せば老老男女バスの中

尼崎市　山田　耕治

冬の海見てはやばやと宿へ逃げ

パソコンを叱られながら子に習う

藤井寺市　鴨谷瑠美子

あたたかい手紙復唱しています

丁重なお知らせ値上げするという

高槻市　乙倉　武史

くたびれたお札自販機突き返す

適当に配置してある運不運

和歌山市　榎原　公子

本日の予定へパンが香ばしい

鳥取市　有沢せつ子

呼びに行った子もテレビ見て笑ってる

横浜市　金森　徳三
血液がサラサラらしい翔んでいる

鳥取市　徳田ひろこ
年ごとにこたつ出す日が早くなり

堺　市　村上　玄也
爺さまは家族メールの外にいる

和歌山市　木本　朱夏
また友の訃を拾ってる冬の耳

大阪市　小谷　集一
定年後自前の手帳カレンダー

唐津市　宗　水笑
深層に消えぬ劣等感がある

大阪市　森田　明子
あとをひく男だ落花生ほどの

西宮市　緒方美津子
学校が聖域だったのは昔

橿原市　安土　理恵
許さねば私が生れ変われない

和歌山市　古久保和子
究極の愛はルールを否定する

大阪市　森田　明子
血の絆想い起こせと彼岸花

西宮市　緒方美津子
トラックに行方を知らぬ豚が揺れ

橿原市　安土　理恵
読めるんです書けないのです漢字

和歌山県　三宅　保州
椎の実を炒ってちびちび秋の酒

高槻市　傍島　克治
綿棒にまとわりついてくる噂

米子市　青戸　田鶴
喜寿でまだ老いのリズムがつかめない

和歌山市　喜田　准一
人ごみの中で聞こえる米子弁

京都市　高島　啓子
褒められて気持がよくて高くつき

東大阪市　北村　賢子
十分に愛された子はせぬいじめ

日立市　加藤　権悟
いじめっこバケツ持たされてたむかし

箕面市　出口セツ子
ドレスアップ妻が生き生きして困る

吹田市　太田　昭
ドラマ見る時は気の合う嫁姑

神戸市　田中　章子
喪中はがき戌年の暮れ告げて来る

弘前市　福士　慕情
先人の知恵湯たんぽがトレンディー

倉吉市　米田　幸子
新年へ特別祈ることもなし

札幌市　三浦　強一
大山を洗うが如く雨が降る

八尾市　村上ミツ子
餌くれる人には猫も鼻濁音

大阪府　澤田　和重
貧乏は親ゆずりです慣れてます

鳥取市　岸本　孝子
あこがれた花にも老いが忍び寄る

大阪市　井丸　昌紀
孫叱る気力あるうち遺書を書く

米子市　政岡日枝子
転居先不明つれなく捺してある

四條畷市　吉岡　修
至福なり小春日和の日向ぼこ

東京都　清原　悦子
うちの子もよその子もみな宝もの

大阪市　柴本ばっは
水筒に命の水を入れておく

姫路市　古川　奮水
いらちでも豆さんだけは急がない

大阪市　岩崎　玲子
めずらしい人来て酒にスルメ焼く

高槻市　瀧本きよし
ひとり泣くことを知ってるお月さま

茨木市　藤井　正雄
下駄箱の奥で拗ねてる禿びた靴

倉吉市　松本よしえ
義理で行く重い靴履く雨しとど

唐津市　久保　正剣
救急車一度も乗ったことが無い

大阪府　籾山　隆盛
超高齢参加賞です文化祭

秋の寺祈りが深く長くなる

奈良市　矢野　良一
秋深しやけに寂しい昼下がり

大阪市　古今堂蕉子
下がり眉愛嬌あると言われても

尼崎市　春城武庫坊
八十路半ばの頬で笑顔はよく出来る

京都市　都倉　求芽
角ばった顎で言い分崩さない

大阪府　高木　道子
木漏れ日が地蔵の頬をそっと撫で

堺　市　西村りつえ
息抜きに買ったドレスがど派手すぎ

三田市　上垣キヨミ
ヒーローは涙の昔語らない

枚方市　丹後屋　肇
自分の寝言できょとんと起きている

河内長野市　針生　和代
二病との付き合い方も上手くなり

鳥取市　土橋　螢
友引がわかる暦を買っておく

和歌山市　武本　碧
無印が一番似合う父の肌

豊中市　水野　黒兎
人間のエゴでいい雨わるい雨

藤井寺市　太田扶美代
感動をしたのでお土産を買った

大和郡山市　坊農　柳弘
玉露より焙じ茶似合う暮らし向き

堺　市　志田　千代
吉本も浪速文化の仲間入り

八尾市　吉村　一風
介護の手要らぬ八十路へ先ず乾杯

羽曳野市　吉川　寿美
火の章も雪崩の章もあって今

西宮市　門谷たず子
今日一日を生きたお礼の経を読む

堺　市　奥　時雄
ハンサムに今では嫉妬しなくなり

吹田市　早泉　早人
二番手でじっくり余力溜めておく

鳥取県　竹信　照彦
エアコンが無くて肌身に季節感

大阪府　小栢こずえ
エネルギー燃やし燃費を浮かせてる

西宮市　坪井　孝一
歳に負けずバイトで遺跡掘っている

東かがわ市　川崎ひかり
孫を抱く嫁に貫禄ついてきた

河内長野市　村上　直樹
おーいお茶返事のあろうはずもなく

和歌山市　たむらあきこ
今日生きる光あつめる投句欄

鳥取市　土橋はるお
年金の池にメダカを飼っている

和歌山市　福本　英子
フルネームでかかる電話に身構える

吹田市　穴吹　尚士
気がつけば妻の天下になっていた

大洲市　花岡　順子
置き薬飲めばけろりとする微熱

大阪市　神夏磯典子
松葉蟹王者のように値札付け

松江市　三島　淞丘
しみじみと飲めばしみじみ八代亜紀

尼崎市　春城　年代
充電を怠る頭老いきざす

豊中市　谷川　勇治
木になると鳥と話ができるかな

羽曳野市　徳山みつこ
アンチエイジへ諦めと憧れと

大阪市　津守　柳伸
メンバーが減ってもやはりルミナリエ

弘前市　宮崎ヒサ子
背伸びした分だけ背骨痛くなる

八王子市　川名　洋子
義理も欠きスリムスリムで老夫婦

京都市　中野　六助
うたせ湯に男の度量試される

八尾市　生嶋ますみ
忙しいと言うてテレビに座り込む

大阪市　榎本　舞夢
テレビから今日の生き方考える

河内長野市　水谷　正子
テレビから貰った知恵はすぐ落とす

西宮市　牧渕富喜子
情報があり過ぎるのも姦しい

和歌山県　森下よりこ
私が食べる分だけつるし柿

富田林市　大橋　鐘造
有難い法話が眠りつれてくる

弘前市　今　愁女
擦れ違う犬同士にも好き嫌い

鳥取市　夏目　一粋
ハードルを下げつつ生きる侘しさよ

藤井寺市　若松　雅枝
百均で家族の食器匙皆揃う

和泉市　西岡　洛酔
万歩計今日は狂うた驟雨降る

松江市　松浦登志子
神社から帰る途中に起きた事故

武蔵野市　亀井　円女
幸せ過ぎるこれひょっとして神のミス

三田市　北野　哲男
時計とは話の腰を折る道具

香芝市　大内　朝子
生きてさえいれば会えるよ青い鳥

唐津市　仁部　四郎
旧村の地域通貨で秋祭り

尼崎市　長浜　美籠
レシピから拾うあなたの好きな味

堺市　加島　由一
凶器にもなった身体が錆びてゆく

シドニー　坂上のり子
瑞々しい葉っぱに惚れて買う大根

鳥取市　福西　茶子
兵眠る北緯六十度の無念

柏市　河野　桃葉
DNAのいたずら姉は超美人

大阪市　岩崎　公誠
凭れ合い生きて三度のめしを食べ

鳥取市　倉益　一瑶
正面に夕日を置いて母無口

藤井寺市　髙田美代子
好きだから多目にとった車間距離

河内長野市　坂上　淳司
鼻の差の外れ馬券が風に舞う

東かがわ市　池内かおり
今すぐにやる課はうちのお母ちゃん

美祢市　安平次弘道
蟻一匹命は重いものと知り

寝屋川市　森　茜
友だちでないから言葉選っている

倉吉市　福光　京子
音楽祭招待受けた老人席

黒石市　相馬　一花
金持に見られて困る肥満体

鳥取市　録沢　風花
抱いた子の温もりはまだ忘れない

神戸市　山田婦美子
試飲してまた断れず買うワイン

倉吉市　山中　康子
朗報を口外すればうとまれる

和歌山市　田中　すず
子供らの笑顔は春の形して

羽曳野市　永田　章司
ギャンブルのお金財布に居付かない

大阪市　寺井　弘子
美術展納得いかぬ絵にも会い

鳥取県　谷口　次男
うれしくて豚の如くに鼻鳴らす

和歌山市　柏原　夕胡
溜飲が下がってからの高鼾

三田市　阪本　藤朗
北風が核を含んでなお寒い

大阪市　津村志華子
一年の過ぎゆく早さ白い髪

和歌山県　村中　悦男
秋しぐれすこしセンチに老い二人

唐津市　市丸　晴翠
同期会瞬時に戻る華の時

和歌山市　坂部かずみ
ひえあわ麦飽食だからする粗食

今治市　渡邊伊津志
新しい明日のために生きて行く

松江市　相見　柳歩
人生の祭りは君に逢ってから

岸和田市　土橋　房枝
愛されて勇気とやる気湧いてくる

誹風柳多留一一篇研究 17

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清　博美

107 **出ッ立のころからの儀とていしゆいひ**

伊吹　亭主の旅の留守中に、浮気をした女房。夫の居ない淋しさからつい魔が差したのでなく、出発の時から既にその素振りがあったというのだから、亭主とすれば許し難い。

日に焼た顔へ女房か泥をぬり　六五16

山田　賛。とんでもねぇアマも居たもんだ。このバチ当リメ。

ゆる〳〵と立ッた晩からづるくする　末三18

山口　大家にでも訴えているのであろう。

清　賛。

108 **御めんなんしと来て何かそつといひ**

伊吹　他の座敷にいる遊女を途中で呼び取る、貰い引きの句。お気に入りの遊女とこれから至福のひと時を過そうと思っているのに、遊里の使用人である若い者か禿が「ご免なんし」と座敷へ入ってきて、遊女にそっと小声で何か言っている。そのあと、遊女は余所の座敷へ連れて行かれ、長く待たされるのは必定である。

けちな晩ゝ御免なんしかだらに来ル　二八17

ひそ〳〵と廊下に白がとゞこほり　拾八9

山田　賛。貰われたからといって揚代はそのまま、名代の新造には手が出せないのだから、まさに踏んだり蹴ったり。

山口　必ずしも貰い引きでなくてもいいと思うが。客には解らず。

小栗　賛。類句からみるに、もらい引のようである。

清　賛。もらい引の句と決めるべきだと思う。これも約束の句。

なお、この貰引きの制度も吉原の勝手なルール、客は通ぶって痩せ我慢をせざるを得なかったのであろう。

109 **とう明の有ルせつちんへ度〳〵かくれ**

伊吹　雪隠の灯明いつち尻にあげ　一〇一46

とあるように、大晦日の晩には雪隠に終夜灯りをともすのが、習慣であった。しかし古川柳のみで、その記述のある文献を探し得なかった。大晦日に掛取りが来ると、灯明のある便所にたびたび隠れる、ということになる。

かけ取りかかへるとしりをふいて出る　安八天2

山田　賛。

かうか神助けたまへと大三十日　梅一三30

山口　賛。掛取りの撃退法は落語にもいろいろと出て来ます。病気、留守、中には死んだ真似もあります。

小栗　賛。厠神の灯明については花咲氏の『江戸厠百姿』に若干解説があります。

清　賛。

110 **かたい後家男をたてゝやらぬ也**

伊吹 亡くなった夫に操を立てる貞操堅固な後家。言い寄る男には見向きもしないので、男たちの面目は丸潰れである。

かたい後家なぞをとくのハ不調法　一三10

山口 賛。顔もあちらも立てぬ。

小栗 賛。私は山口補説がヤマの句と思っている。

清 賛。山口説のように解さないと、この句の面目も立たぬ。

111 きのしやの杢に始皇のやうなつら

伊吹 喜の字屋は、吉原の料理仕出屋である台の物屋の通称。創業者の名の喜右衛門による。喜の字が方より取り寄せて、から通称となった。そこの仕出料理の台の物は松などで飾られていた。その取り寄せた台の物の松にうってつけの、始皇帝のような傲岸無比のお大尽の顔がそばにある。例句は、台の物の松。

きの字やの台にはひこる始皇帝　拾八5

山田 賛。なれど、この句、始皇帝の故事として知られる「松を五太夫に封ず」をバックにしないと「始皇帝」が生きない。

清 同右。

112 智を持ッて生酔に成ル大三十日

伊吹 大晦日に押寄せる多くの掛取りは、向うも生活が掛かっているので、そう簡単に追払うことができない。だから智恵を働かせて、本当に酒を飲んで酔っぱらうか、もしくは酔っぱらったふりをして、厳しい掛取りの追及をはぐらかす。

そら生酔てなんだ大三十日だと　一六33

増田 賛。文句取でしょうか。

小栗 賛。「智を以って国を治むるは国の賊、智を持って国を治めざるは国の福」（『老子』第65章）。

清 賛。

113 **狼に衣てかけの御院こう**

伊吹 狼に衣は、極悪無慈悲な人間がうわべだけは優しく善人らしく装おうこと。ふつう院号といえば亡くなった時に付ける戒名であるが、この句の場合は、仕えていた殿様が亡くなり○○院様と呼ばれるようになったお妾の称号であろう。そのいかにもしおらしい院号が、邪悪なお妾に相応しくなく、まさに狼に衣といったところである。

御下屋敷にいんがうの美しさ　三二38

清 賛。「狼に衣」は俚諺になっている。

114 **十三日おれをもつけとねたられる**

伊吹 十二月十三日の煤払いのあとの胴上げ。若い女性は悪戯をされるので嫌がるが、物好きな男がおれも胴上げしろとねだっている。

ねだられて張合もなく胴につき　三四8

山田 賛。相手が嫌がるようでなくては面白くないのだ。

清 賛。

115 **木戸ぎわにはぢき仕廻ふを四ッ手待**

伊吹 お店者の遊里通い。番頭や手代などが、算盤の玉を弾き終えて遊里へ出かけるのを木戸の近くで四つ手の駕籠舁が待っている。

伴頭ハ四ッ手へしいと言って乗り　篭三14

二はいめの四ツ手しのひのものをのせ　一四26

清 賛。番頭になっても結婚を許されない、という大店の封建的しきたり。

主人相知らす四ツからすへの事　一一32

共選欄

檸檬抄

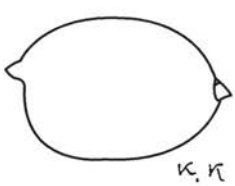
（薫風書、カットとも）

「家　族」　川上大輪選

バラバの家族まとめるチャンコ鍋　西宮市　藤本　直
家族全員集合をした年賀状　藤井寺市　髙田美代子
家族写真僕がだんだん真ん中に　堺　市　加島　由一
御家族はなどと巧みに探りいれ　鳥取県　深田　倶久
座席指定亡父の姿がまだ残る　羽曳野市　福田　悦子
よく笑う嫁が家族の真ん中に　大阪市　川久保睦子
内緒ごと内緒にさせぬ児と夕餉　三田市　北野　哲男
事故現場嘘だ嘘だと来る家族　茨木市　藤井　正雄
罪人はスピード違反だけの家　三田市　臼井　二英
雨の日に父に抱かれて来た仔犬　尼崎市　山田　耕治
母の居る茶の間へ皆が寄ってくる　羽曳野市　吉川　寿美
別姓になった家族の荷が重い　鳥取市　土橋　睦子
お仏壇家族の好きな物ばかり　寝屋川市　平松かすみ
家族にも個性ラーメンそばうどん　札幌市　三浦　強一
仏様の方が多い老い二人　美作市　山本　玉恵
好きな絵を描かせてくれる家族愛　今治市　渡邊伊津志

「家　族」　松本文子選

人間が人間らしくなる家族　芦屋市　黒田　能子
家族です猫も保険に入れてある　シドニー　森本クックバラ
家族にも個性ラーメンそばうどん　札幌市　三浦　強一
卓袱台にたしかにあった家族愛　豊中市　谷川　勇治
問診が思い出させる家族歴　三田市　臼井　二英
家族的といわれてくぐる縄のれん　高槻市　佐甲　昭二
日によって夫婦の句読点がずれ　京都市　都倉　求芽
母さんが病んで帰って来た息子　和歌山市　森下よりこ
非常袋の中味で揉めている家族　海南市　三宅　保州
三世代いいあんばいにくらしてる　鳥取市　土橋はるお
過去帳に私の祖母がふたり居る　寝屋川市　平松かすみ
本当の家族になった大地震　三田市　久保田千代
家族愛けものに負けていませんか　鳥取市　倉益　一瑶
いざという時は家族が居てくれる　和歌山市　喜田　准一
同じもの食べて家族は同じ色　八尾市　宮崎シマ子
子育てが終り夫を飼育する　黒石市　相馬　一花



ご家族は何人ですか一人です　交野市　田岡　九好
餌出すと家族ぐるみで来る狸　尼崎市　春城武庫坊
家中で並ぶお一人様一個　横浜市　中尾　哲代
すぐ元の家族にもどるちぎれ雲　藤井寺市　太田扶美代
今食べた蟹にも家族あったはず　池田市　栗田　久子
親殺し子殺し冬は駆け足で　八王子市　播本　充子
卓袱台に家族の染みが二つ三つ　取手市　葛西　清
家族ごっこのとても上手なプチトマト　和歌山市　古久保和子
ロボットも家族に入れとこう老後　羽曳野市　徳山みつこ
青い目の家族も入れて墓参り　枚方市　丹後屋　肇
家族を守る水を毎日汲みかえる　米子市　政岡日枝子
家族にも内緒で買ったジャンボ籤　藤井寺市　鈴木いさお
日によって夫婦の句読点がずれ　京都市　都倉　求芽
家族割話はすぐにまとまった　豊中市　江見　見清
家族には見せたことない隠し芸　藤井寺市　中島　志洋
子育てが終わり夫を飼育する　黒石市　相馬　一花
桃の疵家族が一人病んでいる　西宮市　門谷たず子
天寿全うやっぱり泣いている家族　弘前市　髙瀬　霜石
順々に家族が風邪をひいている　紀の川市　辻内　次根

秀　句

家族風呂覗いていたのは雪ダルマ　四條畷市　吉岡　修
真魚板に乗せる家族のエネルギー　米子市　林　瑞枝
青テント子供の写真貼ってある　羽曳野市　永田　章司

軸　吟

家族会議の最後はいつもジャンケンで

きれいごと言うては居れぬ大家族　大阪市　板東　倫子
一人より淋し無口で二人住む　さいたま市　星野　育子
臥す妻に粥吹きこぼし睨まれる　三田市　北野　哲男
幸せで一人になったことがない　大阪市　前　たもつ
次々と巣立ちをさせて遠い空　吹田市　穴吹　尚士
母病めば家族の予定みな狂う　東かがわ市　川崎ひかり
家族五人の暮した跡の駐車場　尼崎市　春城　年代
不都合なときは他人の顔をする　八尾市　髙杉　千歩
死ぬの生きるの言うて家族は捨てられず　東大阪市　北村　賢子
家族を守る水を毎日汲みかえる　米子市　政岡日枝子
かるがもの行列を追う独り者　八尾市　田邊　浩三
犬の名も家族に入れてある賀状　三田市　上垣キヨミ
留守電にしてどこに居る核家族　鳥取市　武田　帆雀
夕食を揃って食べたことがない　松江市　小川　注湖
家族六人選挙も頼み甲斐がある　美作市　小林　妻子
仕合せなお人家族に看取られた　堺　市　柿花　和夫
遺産分け知らぬ家族が顔を出す　富田林市　大橋　鐘造
家族って楽器それぞれ持つパート　和歌山市　牛尾　緑良
仏様の方が多い老い二人　美作市　山本　玉恵

秀　句

一家団欒あれはまぼろしだったのか　弘前市　髙瀬　霜石
爺さんがひとりぼっちで住んでいる　川西市　西内　朋月
家族葬さあゆっくりと飲んでくれ　河内長野市　村上　直樹

軸　吟

白い家族にピンクが混じるそれもいい

初

米澤　俶子選

新春を告げる初鳴き東天紅　きよし
初夢は天地人位をひとりじめ　昌鼓
初売りに飛んで出て行くお年玉　まみ子
拍手に日本が明ける初詣で　可住
初競りの威勢が景気盛り上げる　政勝
初鏡少し明るい紅を引く　活恵
紅葉縫う人工雪の初滑り　方子
初仕事もう畑にいるお父さん　善信
始発駅胸を焦がした跡がある　和枝
お祭で見初められた娘二児の母　欣子
跳び箱が初めて跳べた日の自信　のり子
初産へ不安も混じる岩田帯　賢子
酒蔵の神も新酒をお待ちかね　あやめ
ラムネビン振れば初恋よみがえる　千里
初々しい大和撫子見あたらぬ　一粋
少年の口笛澄んで初デート　富子
この歳で初めてなんてよう言えず　(志)千代
呱呱の声初めてあげる自己主張　俊子
初めてにしてはやるなと煽てられ　かおり
初めから気付かぬ振りをして通す　ヒサ子
初日から手に汗にぎる大相撲　ルイ子
初めからでっかい丸は描けません　典子
初孫のピンクの足が宙を蹴る　哲男
初刷りの悲しいニュースないように　(森)明子
お互いに響くものあり初対面　(吉)寿美
長生きが恐い初物食べません　(矢)五月
負け将棋初手から指して反省す　圭一郎
初心忘れず転んでもころんでも　ミツ子
本物の初物ですと路地育ち　四郎
初霜へ気合を入れる寒椿　正和
初めての振袖捲る献血車　正剣
名優も馬の足から初舞台　一知
初日の出新しい風予感する　充子
初耳と乗り出してくる聞き上手　志洋
初雪を踏んで戦士は朝を出る　霜石

佳

看板は初代の苦労知っている　康子
天国も地獄も照らす初明り　螢
初春へ向かう心の掃除する　登美代
私を再生したい初日記　みつこ
いつからかうちの一番風呂は妻　茂代

人

物騒な核の初荷が来ぬように　孝雄

地

ワンメーター丁度ここらが降りるとこ　修

天

定年で第二幕目へまた初演　稲葉洋

軸

放水が虹に変った出初式

寒　波

菊地　政勝選

寒波来いわたしを試す的にする　茶子
美しい国に寒波の吹き溜り　公誠
切り干しがからから乾く寒波来る　善信
干柿の甘さを寒波から貰う　(安)泰子
体脂肪燃やして寒波やり過ごす　康子
遠慮なくぼくの財布に寒波来る　ミツ子
家計簿に一足早く寒波来る　(森)明子
改革の寒波が徐々に身にしみる　照彦
雪霏々と修行の僧に積もる雪　輝夫
年金の財布へ容赦ない寒波　みつこ
社会面寒波のような記事ばかり　遠野
寒波きて夫婦の仲が温くなる　六助
寒波にも弱み見せない寒椿　一壺
リハビリへハードル高くする寒波　弥生
寒波来る出番待ってたちゃんちゃんこ　房枝
増税も寒波も老いの身にこたえ　淞丘
寒波にも慣らそう老いを払いのけ　冷子
老いぼれの骨身に寒波加減せず　洋
老体を鞭打つように来る寒波　玄也
紅葉にかれた木々に寒波来る　タミ
風花が舞って寒波が忍び寄る　賢子
天気図が自信ありげに言う寒波　忠

窓際のイスが軋んでいる寒波　北朗
駅伝の襷寒波を切って行く　一知
シベリアの帰らぬ父か寒波来る　勇治
悪魔の舌が列島舐めてゆく寒波　愁女
寒波くる北で住む娘の身を案じ　たず子
波の花咲かせて吠える冬の海　富子
正月が寒波来ないと来ぬ津軽　順風
津軽です冬です寒波受けてたつ　ヒサ子
手袋のままで拝んできた寒波　像山
蓑虫になって寒波をやり過ごす　孝雄
負け組を囲む寒波が動かない　あずま
寒風へ情け地蔵の赤頭巾　鐘造
クリオネを連れて来そうな大寒波　正和
雪像に気合を入れる大寒波　充子
寒波への恐怖石油の採れぬ国　四郎

佳

鎌に似た寒月毅然肌を刺す　千華
軒先の氷雪を止めたまま　慕情
首筋の寒さは寒波だけじゃない　徳三
虎落笛夜の寒波へ吼え返す　幹子
夢捨てた時から寒波身に沁みる　一粋

人

寒波襲来家族の絆太くなる　霜石

地

大寒波滝を無口にしてしまう　茂代

天

年金の街で寒波に居座られ　富田美義

軸

噴水の鶴がつらつらを飾り立て

松

土橋　螢選

松の内損な気がする誕生日　哲代
人間の生き様だろう松の枝　慕情
不老長寿言葉通りの松元気　孝一
一里松根上り松もあった跡　照彦
饅頭に名前貸してる松の露　輝夫
振り返るチャンスも見せる松葉杖　日の出
若松が正装をして畏まる　徑子
松だって息抜きしたいときもある　ミツ子
手間かけてまた盆栽の松が枯れ　かおり
松植えてのび放題にしてしまい　不二
なにごとも無かったような五葉松　一粋
侍のあなたと歩く松並木　みつこ
匂わない松茸どこの産だろう　のり子
一里二里目印となる松がある　智加恵
初雪と松籟を聴く天守閣　順風
松ぼっくり拾ってくれる人に落ち　久仁雄

劦

松原の隅が私の現住所　一知
松の木がにらむ屋敷の門構え　和枝
北風に松ぼっくりの運動会　四郎
門松は取り止めにした環境派　ひかり
それなりの形になった夫婦松　高明
お手植えの松が枯れたと大騒ぎ

快復へのぞみをかける松葉杖　朝子
木枯しに今日も眠れぬ築地松　淞丘
松過ぎて下方修正する決意　黒兎
生き方にまでも松竹梅がある　扶美代
松枯れの山が紅葉の貌をする　茶子
三代の家運隆々　松の青　可住
古里の松はわたしと同い年　雅枝
松手入れして満月をでんと乗せ　はるお
立ち枯れもある青春の松林　理恵
もう松に従いません福寿草　英子
松の葉の新芽見つめて春が来た　愛論
去年より小さくなった松飾り　倫子
すっきりと枯葉を落とす五葉松　宣子
初春に松の緑を舞う扇　賢子
盆栽の松の後ろの銀河系　次根

佳

松の幹かなり苦労をしたんだね　小雪
老松が無血一揆を語り出す　蜂朗
ひねくれた松ほど人に褒められる　水笑
庭の松今年も笑う日を信じ　雄々
上向きの景気を願う松飾り　充子

人

落城を知ってる松の力瘤　俊子

地

脇役の松が桜を持ち上げる　霜石

天

天地人健やかなれと生ける松　木下敏子

軸

無量寿の松のみどりを摘んでやる

初歩教室

題 ― 詣る

三宅保州

本年も「楽しみは頭ひねって五七五　保州」をモットーに、川柳を楽しく学びましょう。

平成十五年一月号の当欄で「保州の作句の心得十か条」を登載させていただきましたが、その改訂版をお年玉代わりに登載しますので、参考になれば幸甚です。

保州の作句の心得十か条（改訂版）

一　定型を心掛ける
二　発想、表現、リズムの良さを心掛ける
三　多作、多捨、多読を心掛ける
四　誤字、脱字を防ぎ一字一語を大切にする
五　推こうを重ねる
六　独りよがりの句や技巧に走る句を慎む
七　作者の思いや訴えのある句を心掛ける
八　休まず作句しできるだけ句会に出席する
九　全没に腐らず入選に驕らず
十　作句の苦しみは産みの楽しみとする
番外　川柳を生き甲斐として楽しむ

【同想句】

同想句の代表的な発想は、少ない賽銭でたくさんの頼み事をするという句と、「今年こそ今年こそはと…」いう措辞の句でした。難しいことですが「当たり前でない句」を目指す努力を重ねましょう。

賽銭であれもこれもと神頼み　かずみ
今年こそ今年こそはと初詣　寿々女

【添削・批評句】

原 初詣さい銭弾んであれとこれ　みち代
中八、簡単に中七にできます。

添 初詣賽銭弾みあれこれと
原 神前で額で揉めてる初詣　賢治
「で」の重なりでぎくしゃくしています。

添 賽銭の額で揉めてる初詣で
原 お願いを二拍手にこめ初詣　智加恵
少しでも平凡さを避けましょう。

添 願掛けへもう二拍手の初詣で
原 年ごとに憶くうになる初詣　わこ
後ろ向きなイメージを改めてみましょう。

添 年ごとに祈り深まる初詣で
原 老母の背丸めて詣る娘の為に　那珂子
老母と娘を登場さすと作者の存在は？

添 杖ついてでも詣る娘のためならば
原 初詣で二礼二拍手一年分　道子
「一年分」を上に置くとリズムが出ます。

添 一年分まとめて祈る初詣で
原 下駄の音鳴らして行った初詣で　藤朗
場景描写で俳句調のきらい

添 履き慣れぬ下駄に噛まれて初詣で
原 玉砂利を踏んで氏神初詣　㈲信子
「玉砂利を踏んで」だけでは平凡すぎます。

添 何はさておいて氏神様詣で
原 初詣で心のページ始りに　映子
リズムがぎくしゃくしています。

添 新しいページ始まる初詣で
原 神社へ行く楽しみがオミクジだ　綾乃
リズムを整えましょう。

添 おみくじを引く楽しみの初詣で
原 見上げれば心洗わる那智の滝　アヤ子
「詣る」を表したい。

添 心洗われ思わず拝む那智の滝
原 初詣テレビに向い掌を合わす　洋子
言い訳も入れてみませんか

添 風邪を言い訳にテレビへ初詣で
原 初詣テレビ画面ですませ寝る　玲子

添 初詣でもテレビで済ます寝正月
原 平常心に戻る詣での鈴と鉦　幸

添 寺社詣での心やすらぐ鈴と鉦
原 砂利道で額の相場を思案する　乃りこ
玉砂利と賽銭で「詣る」を表したい。

添 玉砂利で賽銭の額思案する

原 元旦のお寺で飲んだ甘い酒　のり子
添 振る舞いの甘酒当てに初詣で
原 甘党はぜんざい目当て初詣で　益子
添 ゼンザイの店が目当ての初詣で
原 お目当は焼イカだった初詣　紀雄
添 お目当ては屋台が並ぶ初詣で
原 お目当てはお詣りよりも出店好きこずえ
添 門前の屋台目当ての初詣で
原 寺社詣り家内安全祈る旅　淳
添 寺社詣りだけは欠かさぬ旅衣
原 東空に柏手三つ祖父元気　貞月
添 曼殊と東の空に祈る祖父
原 サクラサクちょっと賽銭はずんどく　亜希子
添 サクラサクお礼参りははずみます
原 頼まれてお守り買って絵馬書いて　勝久
添 受験子のお守り買って絵馬も書く
原 七五三詣る神にいじめ無し　稔
添 いじめなど無かれと祈る七五三
原 七五三スポンサーにはおじいちゃん　勇治
添 おじいちゃんがスポンサーです七五三
原 両手に花の孫つれて初詣　利子
添 両の手の孫に連れられ初詣で
原 朱印帖いつも携え寺詣り　京子
添 朱印帖も新しくして初詣で
原 年始詣る特攻形見帽を手に　清
添 特攻の形見の帽子手に詣る
原 初詣でおせち門松無きシドニー　クックバラ
添 外つ国ではるかに祈る初詣で
原 初詣りお神酒はしごで運を呼び　弘泰
添 運を呼ぶ神酒はしごの初詣で

【少し工夫すると佳くなる句】

原 神頼みひんぱん過ぎて効き目なし　たん吉
添 ひんぱんに詣りすぎても効き目なし
原 鈴の音神様だけがうろたえる　徑子
「だけが」は不要と思う。
添 神様をびっくりさせる鈴の音
原 初詣で妻がキレイに見える朝　直
どうしてきれいに見えるのでしょう。
添 晴れ着姿の妻を見直す初詣で
原 寺詣り美男のほとけ笑っている　雅明
添 イケメンの仏を選び初詣で
原 初詣ですませいつもの凡夫婦　紀世子
「凡夫婦」より「夫婦箸」などで味わいを
原 幸せを二人で祈る五円玉　昇麗
原 初詣で今年も五円入れました
原 五円玉縁があるまで入れ続け　宣子
原 除夜の鐘聴きながら行く初詣　忠子
原 ハイポーズおどけて見せる千歳飴　美はる

【佳　句】

これだけの幸せでよい初詣で　幹子
正月のにぎわいの輪に老いふたり　孝子
大小の柏手ひびく四世代　イセ
新しい家族をつれて初詣で　宇乃子
大吉を引くまで詣る娘の願い　俊子
賽銭が逸れているのに願いごと　像山
万札を小銭に替えて初詣で　浩三
合格祈願今年は神社変えてみる　満子
三拍で神様の気を引いてみる　寅次郎
車から降りて野仏にも詣る　キヨミ
ありがたい神は遠くにいらっしゃる　千代子
駐車場ないから詣るのをやめる　柳歩
お詣りの便利な場所に墓地を買う　章司

【今月の推せん句】

行かないと落ち着かなくて初詣で　寺川はじむ
日本に元旦のあり初詣で　村木信子
二句に共通するのは、信心はともかく正月のしきたりとしての初詣でを巧みに詠まれています。
神様がまたお前かと言いなさる　中野六助
愛想尽かしされるか、お馴染みとして聞き入れてくれるか、何とも味わいのある句
昨日まで喧嘩していた初詣で　荒巻夢
仲直りした夫婦の初詣で、めでたしめでたし

【私の句】

それにしても祖母が張り切る宮参り
三が日外しあなたと初詣で

（登録洩れの方には役員が添削して返送します。）

秀句鑑賞

同人吟　桒原道夫

―12月号から

俳句が発句の独立したもので、川柳が前句付けの独立したものであることは、歴史の事実である。俳句が脇句の付くことを拒否したのに対し、川柳は前句に付くことを拒否した。とすれば、最もつまらない俳句は脇句が付く句であり、最もつまらない川柳は前句に凭れた句であると言える。前句（例えば、「にぎやかなこと〜〜」）という概念に凭れかかることなく、そのような概念に風穴を開けること、すなわち「穿ち」こそが川柳の本質だと考える。いわゆる川柳の三要素と言われている「穿ち」「おかしみ」「軽み」は並列されるべきものではなく、「おかしみ」や「軽み」は、「穿ち」の結果生まれてくる味わいなのである。そして、単なる理屈による「穿ち」ではなく、感性を伴った「穿ち」から生まれる叙情の感じられる句がよい川柳だと、私は判断する。ことばでは説明しきれず、「いいなあ」と感じられる句をよい川柳だと思うのである。散文で一〇〇パーセント説明できるのなら、そもそも句ではないのである。

駐輪場ここから仰ぐ月が好き

太田　扶美代

ベランダや窓から、あるいは道を歩きながら眺める月も美しいが、一番好きなのは駐輪場から仰ぐ月。今日も一日無事に済んだという安堵感と充実感と疲労感を感じながら仰ぐ月の何とやさしいことか。

爪を切るテネシーワルツ聞きながら

籠島　恵子

「テネシーワルツ」が発見。「アメイジンググレイス」だと、深爪しそうである。甘美な想いに浸りながら爪を切っている姿が思い浮かぶ。爪を切っている「私」もおそらく曲に合わせて鼻歌をうたっているに違いない。

押入れの掃除している文化の日

谷口　義

「押入れの掃除」と「文化の日」との取り合わせが絶妙。掃除して整理しているのは、古い手紙か、写真か、雑誌か、原稿か。いずれにしても、なかなか捨てられない思い出の品であり、十分に文化的な掃除だと言える。

ジョギングのコースに捨てる負のかけら

山宮　愛恵

「負のかけら」ということばが発見。読者が、「負のかけら」を悪心・悩み・弱みなどと想像することは自由だが、「負のかけら」としか言いようのないものである。

石ひとつ沈めて亀を飼っている

鴨谷　瑠美子

句に書かれていることは、ごくわずかな事実だけであるが、どのような思いで飼っているのか想像させる力がある。「石ひとつ沈めて」という措辞が決め手。

約束を果して飛んだ鬼やんま

小豆沢　歌子

下五を仮に「赤とんぼ」「揚羽蝶」「甲虫」などに置き換えてみると、この句の「鬼やんま」が動かないことが分かる。何との約束なのかは想像するしかないが、人間を超えた巨きなもののように感じられる。

振り向けば裸身の月がついて来る

太田　昭

ふと振り向くと、月がついて来ているのに気付いた。何の魂胆もない「裸身」のような月が。月が「裸身」のように感じられるのはもちろん、「私」の心が「裸身」であるからにほかならない。

たっぷりと銀杏の秋を嗅いだ靴

播　本　充　子

「秋の銀杏」ではなく、「銀杏の秋」であることが工夫の一点目。決して芳しい匂いではないが、秋そのものにおいを満喫した。それは、「嗅」という漢字を用いていることからも分かる。

ちちははを近くに思う昼の月

山　本　半　銭

満月だと、亡き父母をそのときだけ思い出している句になってしまう。見えるか見えないかのうすぼんやりとした「昼の月」だからこそ、今は亡き姿の見えない「ちちはは」が、我が身の近くに寄り添っていて、さりげなく見守ってくれているように感じられるのである。「ちちはは」という平仮名表記も、句の内容にふさわしい。

橘高薫風は晩年、自在な句境を目指し、大いに川柳と遊んだ。「不易流行」で言うならば、「不易」はもちろん大切だが、「流行」に目を向けないと「不易」もないと考えておられたように、私は理解している。

「川柳塔」（平成12年5月）の巻頭文に、「俳句現代」6月号（平成12年4月25日発行）に作品を発表することが記され、「第一には俳句と川柳をずばり一句に仕立てる。（略）第二は川柳にもいる頑迷な定型固執者に、リズムの融通無碍なるを訴える。外来語の増加の目立つ昨今、一句に外来語三つを使用してみる試行錯誤。」を作句目標として掲げている。

風見鶏の館タツノオトシゴの家
ローソンへグランドパパをゲットして

俳句と川柳をずばり一句に仕立てたのが、「風見鶏」の句。外来語三つを使用したのが、「ローソンへ」の句。「ローソンへ」の句は、『橘高薫風川柳句集』には、「ローソンへグランパパをゲットして」の形で収められた。

また、「川柳塔」平成13年2月・4月号には、「黄なコート」連作10句を発表された。

陽炎へチーズの如し黄なコート

そして、「川柳塔」平成14年9月号には、とんでもない句を発表された。私には、まったく訳の分からなかった句である。この年の10月の「川柳塔まつり」で話をさせて頂く機会を得たときに、「この句はすごい風刺ですよ。皆に言うといて」と氏に言われていたのだが、時間切れで当日くわしく触れることのできなかった句である。

嗚呼0900630444之墓

「嗚呼忠臣楠氏之墓」をもじった句。「0900630444」は、氏の住民基本台帳のコード番号。「忠臣楠氏之墓」には、天皇のために死んでいった多くの戦没者と自分自身が重ね合わせられている。それが味も素っ気もない数字に変わってしまったというのだ。住民票コードへの風刺であるとともに、「嗚呼忠臣楠氏之墓」を讃えていた時代への風刺でもある。

これら以外にも新境地を見出そうと挑戦された句が多々ある。すべての句が成功作とは言えないが、その精神の若さには頭が下がるばかりである。

同人吟を読んでチェックした句は、五十句以上あった。「穿ち」の効いた句がたくさんあったことを喜ばしく思うと同時に、もっと冒険をして「流行」に目を向けてもよいのではないかとも思った。最後に、私にとって新味の感じられた句を二句挙げておく。

絵本から飛び出してきたユリカモメ

伊　藤　寿　美

句の仕立ては新しくはないが、「ユリカモメ」であるところに新鮮さを感じた。ばたばたという羽音が聞こえてきそう。

笑顔弾けてる七色唐辛子

石　原　淑　子

「七色唐辛子」の句で、こんな無邪気な七色唐辛子には出会ったことがない。

—水煙抄

秀句鑑賞

—12月号から

高田博泉

呑み込んだ言葉へ欲しい消化剤

三浦　千津子

上手なお付き合いには、時として、一歩を引いて苦渋をなめる事もある。一応、何事もなく納まったようだが、日が経つにつれ、沸々とまた湧き出してくる。納めてくれるのは、神様ではない。ここに「消化剤」をもってきたところに、おもしろ味を感じる。

小話を拾うゆとりの散歩道

村中　悦男

責任を感じる事柄は何ひとつなく、仕事の心配もない。時間にも制約はない。年金生活に入ると「勿体ない」を心懸けていればやってゆける知恵がついてくるものである。ただ、漠然と歩いているだけでなく、目、耳のアンテナはピンと張っている。これは心のゆとりからくるものでしょう。

雑草は今日も強気で生きている

田中　トシエ

どんな環境にも適応し、生き抜いてゆく、雑草の強さ、根性は、人間社会でも共通して言える事ではないだろうか。強気でのぞんでいる人には生気がみなぎっている。さらりと詠んでいて作者の意は充分くみとれる。

叱っても言い分けしないポチといる

助川　和美

会社では上司に気を遣い、部下にまで気兼ねし叱る事など忘れている。昨今は、妻に小言をならべたら倍になって返ってくるご時世である。黙って聞いてくれるポチがそばに居るだけで私の癒しになっている。

やわらかい言葉で無理を押しつける

両川　無限

リーダーシップの極意はこんなところにあるのだろうか。やわらかな言葉の魔力いつの間にか手のひらで踊らされている。無理も無理ではなくなってきてしまう。押し売りなど無理と解釈していません。

白黒を付けず流れに逆らわず

巌田　かず枝

まったくの自然流と言うか、人生マイペースで上手に乗り切ってゆかれる人なのでしょう。

一ランク下げると見えてくる明日

羽田野　洋介

現状維持を望むのは、官僚だけではない。先ずは今を基点にして、物事を考えてしまう。「ひとランク下げる」と言う発想に至るまでずいぶんと時間を費した事でしょうが、ここからは、意外とスムーズに回答らしきものが湧き出てくるのです。

幸せの中で幸せ探してる

中井　萠

人間とはどこまで欲深いことなんでしょう。周囲から見れば、幸せこの上ないと映っているのに、まだ、満足感は得られないのかも知れません。

あと印象に残っている作品

ちぐはぐに身体のネジが緩み出す

寺川　はじむ

つかず離れずながい人生丸く生き

川島　良子

物差しが時々ずれてくる夫婦

田中　すず

ど忘れのアレで通じる妻といる

吉村　久仁雄

答えにはならぬがお茶を入れ替える

花岡　順子

■各地句会だより

城北川柳会

板東倫子

地下鉄谷町線「千林大宮駅」三番出口を上って左側すぐに「旭区老人福祉センター」があります。その三階で毎月第一土曜日の午後一時から句会を開催して居ります。また京阪電車の「千林駅」で下車していただけば大阪名物千林商店街でのショッピングを兼ねての「お楽しみコース句会」にもなっております。

「城北川柳会」は昭和三十六年に当時大阪交通局に勤務されていた北川春巣先生により、旭区中宮町の「老人憩の家」を例会場に地元の老人を対象にして結成されました。二代目は耳鼻科医の川口弘生先生が継承され地元会員の育成指導に当られました。御多忙な御職業の傍ら温厚なお人柄と川柳への情熱を感じる先生の句からいろいろ学ばせていただきました。三代目会長吐田公一先生をお迎えした頃から会員も増加し質的向上も図られて大きく発展が見られました。「城北句集」も七集を数え会員の珠玉の句が立派な冊子として残された事は感激の他ありません。加太休暇村、城崎湯楽その他一泊吟行も年中行事の楽しみで折にふれ思い出話の種になります。

十数年の長きにわたり御尽力賜わった吐田会長御勇退の節には我々会員が句報に投稿したエッセー集「いいたい砲台」を編集製本の上、記念品として頂戴いたしました。大きな大きな宝物として大切に保存して居ります。

大ジョッキ二杯人生観変る

初代会長　北川　春巣

耳鼻科医の春は鼻血の患者から

二代目会長　川口　弘生

軸足をしっかり二十一世紀

三代目会長　吐田　公一

現在は吉岡修会長のもと句会場も椅子席の現センターに変り、皆様から好評を得ております。川柳塔本社はじめ寝屋川句会他多方面から心からの御支援をいただき出席、投句も回を追って増えました事、厚く厚く御礼申し上げます。多士済々の方々との交流を楽しみに来て下さる皆様と、昨年六月三日に水の公園と呼ばれる城北公園であでやかな菖蒲園を賞で、千人塚で戦争犠牲者を悼み、わんどの風に吹かれながら淀川堤を三々五々散策し、赤川町の「日吉神社」へ参詣。それから静かなお部屋でお食事のあと楽しい句会を致しました。一寸だけお酒気分で名句迷句の続出に時の経つのも忘れる一日でした。

◎ここでビックニュース。

我が句会のプリマ森田明子さんが、先般の第十二回川柳塔まつりで「川柳塔賞」を受賞されました。御本人はもとより「城北川柳会」一同のよろこびです。この慶事をバネに頑張ります。一度当会へもお越し下さい。

（一月から小谷集一会長に交替しました）

本社十二月句会

十二月八日（金）午後一時
アウィーナ大阪

平成十八年度最後の句会は、昼間という事もあってか、とても暖かい。参加者は96名。お話は川柳塔理事長西出楓楽さん。

楓楽さんが川柳を始めた昭和54年から、57年頃までの川柳界四方山話であった。

昭和生まれの人が中心になって発足した川柳の会が、あちこちにあり、そこへ参加した時の川柳の先人達との出会いや、背景にあった事件、流行語等々。

まず総理大臣は鈴木善行、流行語は、心身症、風見鶏、ロリコン、事件としては日航機墜落が一番にあげられる。

川柳界では、中尾漢介、伊佐次無成、大路美幸、久保田寿界、住田英比古といった川柳界の重鎮が活躍をされている。最後は、当時の川柳の本「あぶその」（ラテン語で不協和音の意）についてである。

内容は「柳界散歩、投句者座談会、作家探訪」などで出来ており、誌を通して、文芸における川柳の位置、川柳界の老齢化等で、その当時から、もうその事が危惧されていたらしく、熱く意見を交わしあっている。結社の壁などもなく、経済成長の時代でもありとても活気があったと当時を振り返る。（扶美代記）

月間賞は堺市の柿花和夫氏に輝く。

（司会―玄也・美籠）（脇取り―月子・扶美代）（受付―ふりこ・見清）（清記―富美子）

席題「晴　着」　古今堂　蕉子選

反省の猿も正月には晴れ着　玄也
作業衣の汗で作った娘の晴着　重人
降りだした雨に泣いてる一張羅　朋月
白い歯がキラリ光っていた晴着　とし子
女の目互いに晴着値踏みする　叙子
真みどりの晴着を着たい地球です　朝子
晴れ着やめ楽しんできたパスポート　楓楽
お元日晴着があった枕もと　恭昌
たもとから古い半券出た晴着　棲世
夢いっぱい抱いた晴着が重くなる　富美子
チョコチョコと歩く晴着の長い足　潤子
成人式の晴着子供を二人連れ　楓楽
火花散らして晴着と晴着すれ違う　希久子
お見合い何度孫の晴着も板につき　一風
晴着着て写真を撮れば直ぐに脱ぐ　東吉
ジーパンの穴が晴着と言う若さ　郁夫
成人式裾が乱れていた晴着　萬的
娘の晴着パート超勤強いられる　正雄
主賓より立派な服で来たお客　朱夏
ペットまで晴着着せられ祝いごと　倫子
付き添いの妻の晴着が高くつく　千里
いつか行く園遊会の服がある　(志)千代
にわか雨アッシー君にのる晴着　耕治
あなた色に染めてホワイトウェディング　柳弘
貸衣裳名前書いてという子供　見清
お正月声にも晴着着せてやる　利昭
成人式翼を抱いている晴着　冨美子
苦労して作った晴着娘はそっぽ　東吉
晴着脱ぎ娘タバコの煙吐く　時雄
優しい言葉を晴着として纏う　森子
衣替え出来ぬ晴着の笑む遺影　幸雀
蟹みそが垂れて台なしの晴着　天笑

佳

入閣の胸が反ってる燕尾服　朋月
土俵入り男の晴着です裸　修
式場の前で晴着に泥がはね　則彦
娘より晴着ばっかり褒められる　修
マスゲームだけは晴着の飢餓の国　幸雀

人

菊は確かに晴着を飾る花である　元紀

地

宮参り赤子は何も知らぬまま　美花

天

優勝の晴着は汗の匂うシャツ　集一

軸

フリースに破れジーパン子の晴着

兼題「ちょっと」　吉岡　修選

ちょっとしたミスが段取り狂わせる　庸佑
好きだからちょっと触ってみたくなり　螢
ちょっと声かけられてもう半世紀　雅明
ちょっといこか自然に足が誘ってる　美花
ちょっと背を押されただけで堕ちた罠　理恵
ちょっとだけ優しくすれば花も咲く　千里
認知症予防に株をちょっと買う　楓楽
ちょっとでも僕の話を聞きなさい　ダン吉
ちょっとでも前への意思が道拓く　東吉
満腹のちょっと手前が調子いい　朝子
ちょっとでも一緒に居たい燃えている　棲世
入社時の微差退社まで部下のまま　正雄
ちょっとだけいい事をした茶が美味い　欣子
ちょっとだけのぞいて見たい黄泉の国　天笑
ちょっと知恵貸してとじいちゃんの出番　尚士
鼻の差を誰かが貰う万馬券　公誠
ちょっとだけ借りたサラ金から破滅　柳弘
貸し借りがちょっぴりあって縁続き　蕉子
もうちょっと右と背中を掻かされる　一歩
赤い灯をちょっとさわって火傷する　房子
ちょっとまだ気になる人が居るこの世　天笑
ちょっとここ揉んでと項白いこと　アキ
他人様の旦那がちょっと気にかかる　希久子
ちょっとずつ君に近づきたい歩巾　保州
一秒の違いメダルと予選落ち　能子
ちょっと顔出して仲間にされている　俶子
もうちょっと磨けば妻はまだ光る　富子
まっすぐに帰るにちょっと明るすぎ　瑠美子
人生の余白をちょっと飾る恋　義子
ちょっとだけ覗いて買った福袋　一風
第九聴きちょっと優雅に年を越す　保州
ちょっと待てまた陸海軍が出来そうだ　見清

佳

もうちょっとゆとりがほしいなあ柩　章子
あのーちょっと社会の窓が開いてます　光久
同心円少しはみだす勇気要る　扶美代
ちょっとした語尾がひとりで歩きだす
一張羅いつもとちょっと違う妻

人

ちょっとだけ燃えたふりして迷わせる　弥生

地

世の中をちょっと齧っただけである　義

天

ちょっとだけ呼んでみただけおかあさん　賢子

軸

鼻の油ちょっとつけときゃ叶うだろ

兼題「風呂」　高杉　千歩選

年金の首浮いている露天風呂　正坊
バスルームひめいもぐちも受け入れる　尚
幸せな今日を畳んで終い風呂　紀乃
露天風呂ちらちら雪が降ってくる　美花
母さんを抱えて浸かる露天風呂　則彦
ヘルパーと四つに組んだ風呂の中　耕治
目の前の富士をつかんだ露天風呂　重人
脱衣場に仮面忘れてきたらしい　朱夏
浴槽がだんだん深くなって来る　哲男
リフォームのいの一番は風呂でした　㊟千代
差ない今日一日が湯につかる　昭
本当の自分になっている湯舟　楓楽
湯加減はスイッチひとつがしてくれる　能子
いい湯だな孫とハモってつい長湯　修
今日も無事手足伸ばしている湯舟　太郎
ハイカーに気配り駅にある足湯　萬的
銭湯がまた消え昭和遠ざかる　恭昌
心配で妻がのぞきにくるお風呂　耕治
これほどの贅はなかろうレモン風呂　扶美代
銭湯が減り下町に情が消え　棲世
詩人だったころはお風呂が長かった　瑠美子
初孫に一番風呂を明け渡す　希久子
風呂上りのっしのっしと妻が来る　尚士
煙突を残し廃業した風呂屋　倫子
介護浴のたびに小さくなる母よ　楓楽
オリオン座見ながら帰る風呂あがり　章子
公園と銭湯で会う顔馴染み　玄也
足と足からめ足湯のラブゲーム　朱夏
石鹸の泡から親と子の会話　正雄
おーい石鹸亡夫が呼んだ風呂の中　森子
入り口にケータイ持ってきてお風呂　天笑
口下手な彼と有馬の湯にのぼせ　ばっは

佳

その昔偲んで歌う神田川　准一

長湯しても妻は覗きに来なくなり　昭
外国の風呂は入った気がしない　時雄
ハイテクの風呂で戸惑う老夫婦　律子
おばさまが団体で来た美人の湯　尚士

人

アイディアがひょっこり沸いてくる湯舟　扶美代

地

お風呂屋へたまに遊びに行ってます　月子

天

ばあちゃんがお風呂美人になっている　美代子

軸

満ち足りた疲れを抱いてしまい風呂

兼題「騒ぐ」　都倉　求芽選

覚悟した道でもやはり胸騒ぐ　美義
わたくしを取り巻く騒乱罪がある　螢
真珠湾六十五年前の今日　哲男
どの県もいま知事室が騒がしい　天笑
大内山の中も何やら騒がしい　倫子
責任のない男ほど騒がしい　尚士
胸騒ぎさせて遠くへ行った風　理恵
騒ぎ満載重い朝刊配られる　たもつ
大騒ぎさせてゴギブリどこ行った　千枝子
騒いだら負けやまけやと深呼吸　朝子
喧騒の疲れを癒すルミナリエ　柳弘
陳謝まで見せてマスコミ幕を引き　耕治
ざわめきを鎮めるように土俵掃く　好
騒がねば天に届かぬ民の声　冨美子
核テストすでに終わった国騒ぎ　ただよし
丁寧な挨拶すこし胸騒ぎ　篤子
騒いだらあなたの席はありません　森子

義

母方の血が騒ぐのは仕方なし　柳昌
騒がない私あの人信じてる　楓楽
騒がない人にいつでも負けている　アキ
騒がしい椅子に貴女は似合わない　ダン吉
波騒ぐ少し反省したくなる　弥生
いのち残照朱と舞う枯葉騒がない　欣子
クラス会会えば騒がし女偏　正雄
騒がしい世間に遠く畑を打つ　朋月

洋

寒椿ぽとりと落ちた胸騒ぎ　扶美代
白鳥が騒ぎ一直線に冬　千歩
騒ぎながら隠す本当の悲しみ　俶子
問いつめるペンを愛して血が騒ぐ　天笑
蜘蛛の孵化葉裏が妙に騒がしい　潤子
捨てられたキャベツが騒がしい現場　森子

佳

孫達が来ると夫は姿消す　ただよし
騒がねば風車は明日へ回らない　鐘造
喧騒にモーツアルトが透きとおり　美代子
騒がれた昔を知っている鏡　瑠美子
すこうしは騒いでみたいカスミ草　アキ

人

騒がねばこの針穴は通らない　公誠

地

妻の掌の中で騒ぐと負けになる

天

極楽へ大騒ぎして行くつもり

軸

騒々しい神の手落ちの星一つ

兼題「薔薇」　宮﨑　シマ子選

赤すぎる薔薇に心も疲れます　美義
君にだけ棘がなくなる薔薇の花　雅明
指先のとげ一本に泣く総身　春蘭
防護服着たまま紅いバラを抱く　遠野
刺が有るからいいのです赤い薔薇　潤子
冬の薔薇すこし緊張ときなさい　ダン吉
刺のない薔薇がじっくりする復讐　アキ
絵に描いたバラとしんみり話す恋　紀乃
お隣のバラが笑ってくれている　月子
薔薇百本よりもお金のほうが良い　集一
ご気分はいかがとピンクの薔薇の束　理恵

義

赤い薔薇秘密は固く守られた　尚士
口説かれているのか薔薇がまた届く　きよし
乱れた世まっ赤な薔薇がつく吐息　章子
きっと薔薇やさしさ隠すための棘　ダン吉
戦嫌い今九条に薔薇あげる　耕治
ほめられてしかたがなしに薔薇を剪る　富子
バラ色の老後にまさかのパンパース　月子
バラ好きのお方へ高い方にする　太郎
薔薇色の人生すばらしいですね　舞夢
不器用な男に薔薇は語りかけ　美籠
上見ればきり無しバラの香と眠る　章久
バラ一杯買うて私の春を呼ぶ　哲男
初めてのバラのリボンで金婚日

電話待つバラは只今八分咲き　哲男
バラの花毟り女の嫉妬心　雅文
目立つのがとても苦手な赤い薔薇　能子
ばらよりも野菊の似合う君が好き　俶子
真実は黙し語らぬ白い薔薇　美籠
意地悪な無口の薔薇が又誘う　孝一
咲き誇る薔薇は今しか考えぬ　楓楽
青いバラの花ことばまだ知りません　修

佳

凛とした薔薇は掟を破らない　森子
ばら一輪夫の詫び状かも知れぬ　昭
七重八重お面被った赤いバラ　とし子
ばらをいま震わす風のはかりごと　雅文
百本のバラを描いて冬の底　千歩

人

反骨の思いで咲かす青い薔薇　希久子

地

薔薇もらいしばし休戦しましょうか　章子

天

嬉しいと薔薇の花買う癖がある　扶美代

軸

バラ愛でる如く泡盛の香も愛す

課題「転　機」　河内　天笑選

鉛筆が折れた転機かも知れぬ　求芽
転んだら命の重さ変わります　尚
目が合っただけで転機が訪れる　義
リタイヤが区切りあんさん別れまひょ　淳司
華麗なる転身でしたイナバウアー　保州
定年を転機にケチを修業中　一歩
初入選活字になった私の名　(志)千代
挫けない心育てたあのエラー　見清
人生の転機へ一度素に戻る　賢子
リストラが転機になった蛸やき屋　朋月
失敗が転機となってノーベル賞　洋
魔女になる転機をくれた恋がたき　アキ
B面で個性を磨く退職後　美代子
レギュラーを外され意地が点火する　光久
定年を転機に建てるログハウス　美籠
ターニング・ポイント分からぬ温暖化　ただよし
転勤でけじめをつけた腐れ縁　玄也
セコムして青い鳥まで逃がしてる　篤子
否応もなく定年と言う転機　哲男
外圧が歴史の転機握ってた　修好
介護してほんとの夫婦らしくなり　則彦
病抜けの転機になった薬断ち　集一
胎動が女を強い母にする　倫子
敗戦を転機に女強くなる　尚士
リストラをされてベンチャー立ち上げる　理恵
捨てられた時が転機になりました　(奥)五月
暴走の娘を変えた母子手帳　玄也
因習を破り開けた新天地　ダン吉
核をつくりあれからヒト科笑わない　則彦
仲直りの転機になった拭き掃除　東吉
父の死に放蕩息子目を覚ます　美義
ロボットが俺の転機をそそのかす　佳
本当の鬼と出会って世間知る　元紀
欲捨てて裸の僕になる転機　公誠
プライドを捨てたら見えてきた明日　重人
病んでからやさしい人になりはった　千里
これを機に薄味にする何もかも　月子

人

肩書きが変って少し休もうか　尚

地

鐘三つ鳴らして村を出たっ切り　保州

天

十二月八日に新聞が死んだ　柿花和夫

軸

死にそうな目に遭うてから運が向き

平成18年度本社句会の月間賞杯永久保持者は谷口義さん（東大阪市）に決定しました。

平成18年度本社句会皆出席者（順不同）

穴吹尚士　井伊東吉　石堂潤子　太田とし子
石森利明　岩崎公誠　太田　昭　岩佐ダン吉
榎本舞夢　海老池洋　大谷篤子　太田扶美代
河内天笑　川端一歩　柿花和夫　鴨谷瑠美子
川原章久　鍛原千里　木本朱夏　滝本きよし
志田千代　谷口　義　西内朋月　平嶋美智子
西出楓楽　長浜美籠　藤井正雄　前　たもつ
坊農柳弘　村上玄也　森下愛論　宮本三喜夫
森本弘風　山口光久　吉田富美　山本希久子
吉村一風　米田恭昌　吉岡　修　山岡富美子
米澤俶子　（四一名）

■句集紹介

私の川柳

宮本三喜夫著

牛尾緑良

「句はお人柄」と言いますが、どの句を見ても気負わず気取らずの三喜夫さんそのものなのです。

つつましくささやかに生き愉しいよ
春ですね明るい話題つぎつぎに

氏の話しことばがそのまま五七五を形作っていて、呼名の前にお顔が浮かんで来ます。

じゃんけんのグーで何時でも負けている
花見です少し酔ってもいいですか

競うことは無くいつもグループの一員として迎えられることが、その人となりを十分に表しています。

地方紙「わかやま新報」の柳壇は常連で、時事吟は勿論、スポーツをはじめ社会全般に目を向けて居られます。

前例がないと役所は動かない
タマちゃんへごめんなさいね揉めさせて
あくどいね儲けのために人泣かす

健康管理には十分注意されていて、わかやま句会は勿論、川柳塔本社句会もほとんど皆勤されています。

健康は誰も取りには来ませんよ
病んで知る最新機器の有難さ
ありがたい寿命ありてか生かされる
何時までも歩くつもりの靴を買う

タバコは嗜まれませんが、紀南タバコ対策推進協議会の標語では最優秀句を獲得されました。

止めました気兼ねまでして喫むたばこ

しっかり健康をPRして居られます。

最も関心がおありなのは政治面でしょう。

良識の府にも苦言のいる政治
悲喜劇の何が起こるか永田町
国民は馬鹿ではないよ見抜いてる

社会面にも目が光っています。

一人乗るエレベーターが不安です
怖い世よマイホームまで追い出され
事故隠しボロが次々でて来ます

スポーツ面ではこのような句があります。

W杯終わり寝不足おさまった
イチローも世界の顔に成長し
気をもますナイターですが時間切れ

でも、真骨頂はユーモア句ではないかと思います。

常連は小言いいつつ待たされる
長寿会女性パワーに声も出ず
言い訳は止しなさいよと言いたいね

批評は決して外にばかりではありません。ご自分を詠んだと思われる句もあるのです。

裸婦像を見つめる喜寿を忘れた目
平凡なただの市民でございます
節分の豆を数えて歳がばれ
川柳だけに縛られない三喜夫さんを句集から発見できました。日本画とお寺巡りです。奥さんとの四国巡礼は一度きりだそうですが、四国、西国、新西国以外にも県下のお寺巡りは今も続いているとお聞きしました。

雨あがり花を求めて回る寺
寺参り満願できてありがたい
八十歳を越えてますますお元気なのは悠々自適の大らかな心です。

老いてなお好奇心あり夢描く

人生の先輩としてのぼやきは数々あります。

少子化の世相をなげく老いの愚痴
有権者の期待の票を裏切るな
情けない子の育て方知らぬ親

各所に出る「ありがたい」が三喜夫さんの生き方の根幹かも知れません。

この歳で忙しく生きありがたい

まだまだのご活躍を期待して止みません。

老地図

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

すみよし川柳会（前月分）岩崎　公誠報

父親の顔で息子が子を叱る　文子
事故に遭い何も言わずに逝った父　幸子
役者似の父も今では好々爺　和子
子が出来て息子が知った父の愛　明江
パパと呼ぶには程遠い父だった　定子
大家族支えた父の細い脛　りつえ
一徹な父の背中が淋しがり　篤子
沖縄戦帰りし父は耳遠し　美世子
食卓にルールがあって父の席　志華子
酒二合飲むと楽しい父になる　柳昌
今思う深くて温い父の膝　美花
世話好きな父の姿を見て育ち　福世
やめておけ言わんばかりに父の咳　一歩
少数派になり父さんが動じない　ダン吉
生真面目な父の話におちが付き　かりん
父留守の茶の間は軽い風が吹く　蕉子
退職後違った父が見えてきた　舞夢
三つ指を見た事がないと父がいい　日の出
むっつりも孫の前では好々爺　桃花
背もたれを拒み続けた父の椅子　萌
老父の一声生き方を変えてみる　遠野

ローズ川柳会　山崎　君子報

気がつけばたっぷり年齢に甘えてた　てる
少子化にますます増える甘い親　みつ子
甘えては居れぬ寿命は延びている　哲子
あかね色つるべ落しに夕暮れる　トミヱ
病んでから自分に甘くなっている　貴代子
終着駅今日のドラマを締めくくる　孝一
暮れいそぐ秋あれ想いこれ思い　美籠
鈍行で駅弁の味旅の味　いわゑ
曽孫の笑顔見ると財布が甘くなる　武庫坊
気が合うて秋の焼酎滲みとおる　年代
お好み焼いま具に凝って秋深む　義子
バラの香の届くホームで待っている　君子

川柳塔おおとり　福田　登美報

宝くじらくらく暮らす夢で買う　由多香
らくらくの夢が次第にしぼみだす　風花
胃カメラをらくらくのんで飯を食う　螢
らくらくと生きたい暮らしままならぬ　知恵
機械化の農家らくらく米つくり　小生
勝ち組がらくらく外車買い替える　幸次郎
思い出を抱いて時々開けて見る　ヒロ子
赤ちゃんを卵ごときにそうと抱く　清子
抱き合った男同士に嘘はない　以和万津
ひそやかに抱いてる永遠の愛　艶子
新聞の音が夜明けの幕を引く　黙光
音無しの構えで鰯食べている　芳光
さまざまな器具のメロディー家の中　道子
石を積む音み仏に会うまでは　雄々
老残を刻む時計の夜の音　登美

三幸川柳教室　喜田　准一報

君の指恋のリズムで打つメール　宏夫
躓いた背なへ孤独が攻めてくる　幹子
主役から脇役になり海静か　純子
ポロンポロン秋の音符が風に乗り　碧
また坊主値札をつけた魚を釣る　義雄
一途さが今も好きです曼珠沙華　公子
自分史は波の間の間の漂流記　保州
大仏さんが跳んだら届く淡路島　武
学校のつもりで通う内科歯科　かずみ
親のエゴ背負って重いランドセル　昇
あの頃は三歩も下がる師の背中　幸
寄付だけのつながり母校遠くなる　智三
学校の呼出しお洒落して行けず　美枝子
中退の子が一番の親思い　桂香
もう一度本気になって行く夜学　徑子
放課後の夕日に決めた逆上り　町子
学校は首席で出たがまだニート　登美代
微分積分できず困ったことがない　章子
キャンパスの恋を育てたクローバー　朱夏
廃校の庭で校歌を口ずさむ　当代
百均で一ダースあるボールペン　孝義
女です惜しまず使う化粧品　イセ
骨董品祖父の代から蔵の中　信子

上品に見えるメガネが顔を変え　一歩
手を替えて品替え棚の奉仕品　八重子
品性の点で気になるお嬢さん　次根
品質保証手塩にかけた娘が嫁ぐ　み ね
毛並み良し品もあるけどよく吠える　正治
わたくしの笑顔は非売品ですの　和子
交換の効かぬ部品が病んでます　准一

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

まだ脈がありそうだからチョコ贈る　かおり
行詰りふと人生を振り還る　よしみ
勿体ないは筋金入りの戦中派　賢
あるがまま生きて悔いない日を送る　八重子
携帯にサヨナラだけのメッセージ　いさむ
転んでも只では起きぬ奴も居る　放任
曽孫守使い古しの子守唄　あきら
お出掛で麩焼一本添えてある　寿々女
憎たらしこの含め煮は隣のか　貞月
行く道を照らしてくれる亡母の月　ひかり
月兎孫の成長見て跳ねる　初恵
句碑の字に偲ぶ故人の夢の跡　文仙

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

嫁がせて嬉し淋しい父の背　美籠
いい嫁でいつも優しいなんて無理　勲弘
舶来の嫁はん過疎の地位をあげ　求芽
涙腺を緩めて笑う嫁の父　郁夫
おとぼけも稼ぎも嫁に叶わない　稲子
家も田も金もあるけど嫁が来ぬ　武史
手切金の額をメールで聞いて来る　公子
還暦を目の前にして手切金　泰雄
値切っては男が廃る手切金　照子
お姑さんが活発だから肩が凝る　かおり
髪染めて妻活発に今日も留守　活恵
生き生きと生きておいしく飯を食う　比ろ志
やんわりと打たれた釘が効いてくる　重人
やんわりと手玉にとったのはあいつ　とし子
漢方薬続けやんわり効いてくる　庸佑
やんわりと言われて余計腹が立ち　美義
やんわりと声かけられた人と居る　きよし
やんわりと握り返して序章です　乃りこ
やんわりと傷に触れるのは味方　葉子
土壇場になると鬼とも握手する　宏章
坂道の途中で食べる握り飯　典子
正論を握り潰して生き延びる　幸雀
ラストダンスきれいに握手して別れ　萬的
蝉ひとつ助けて軽い庭箒　宵草
貴様と俺意見合わぬが意気が合う　秀夫
豊かさが裏目に絆脆くする　孝一
缶ビール妻と分け合う秋夜長　義一
辣腕の男に見えぬ下がり眉　尚士
関節痛歩調とってる元兵長　治三郎
頼られる神も不安を隠せない　昭

川柳ねやがわ　森茜報

募金箱人間模様垣間見る　勇太朗
思いがけずよろこんでいる募金箱　日出子
貰うより出せる立場を喜んで　一笑

佳句地十選（12月号から）

小玉満江

シグナルを読めず我が子を追いつめる　起世子
炎天下でんでん虫は死んだふり　石花菜
次の世のロマンを覗く万華鏡　螢
一枚のハンカチ日本がどっと湧く　よしろう
薪能果てて鼓にある余熱　朱夏
人の善さ買われこまごま動く金　萬的
団塊の世代を泳ぐ金魚たち　瑞枝
可能性いっぱい秘めたゼロ歳児　楓楽
萬札を出して大根買っている　茂美
ワルツより炭坑節の似合う顔　志津

良心が素通りできぬ募金箱　朝子
にわとりも協力してる赤い羽　あさ子
ちりほどの真心積もる募金羽　高栄
免罪符目に入らぬか胸の羽根　弘風
連休の初日は昼まで眠りたい　亜成
連休に家族の風が柔らかい　ただよし
偶然の出合いにもある一目惚れ　三郎
カメラマン瞬間までの長時間　あやめ
一瞬の美学と思う玉手箱　とし子
一目見た時この人と決めました　洋
蓋取れば秋が飛び込む土瓶蒸し　仁清
悪役が憎いほどいい時代劇　高栄
番組で未踏の秘境見飽きてる　郁夫
ゆっくりとこなすわたしのプログラム　じゅんこ
茜

狭い家別番組を見る夫婦　さち子
生きる番組まだ続けたい余生です　弘一
番組のひと品工夫して夕餉　庸佑
もともとは何も無いぞと経は言う　修
核などと野暮は止そうぜナ兄弟　九好
団塊の心ゆさぶる起業熱　一風
人の世話するのが好きで隣まで　薫
また同じ話を聞いて昼ご飯　かすみ
あんたより背が低いのが腹がたつ　利昭
何時からか金が総てと若い人　ルイ子
天秤にかけたら負けるのは私　博泉
やわらかい言葉で外堀埋めに来る　典子

川柳塔みぞぐち　小西雄々報

遠足のコースに入れた栗拾い　弘子
ロマンの味内に秘めてる甘い栗　公美枝
人間が栗を採るので困る熊　鈴枝
神仏へ供え感謝の栗おこわ　久子
ひと昔袋いっぱい栗拾い　信雄
小粒でも大栗よりも味で勝つ　智恵子
面倒な栗の始末に音をあげた　和代
いが栗も秋の味覚を一人じめ　静江
松茸に栗飯遠い過去のこと　正光
栗饅頭よりも大きな栗拾う　雄々

竹原川柳会　時広一路報

百歳になったらという笑い話　蘭幸
ハンカチの値段を高くした王子　輝恵
たかい高い私を抱きあげた父よ　敬子
コスモスの高さで秋の風といる　笑子
天高し空の青さに気をもらう　静風
高い値がついて重荷になる形見　力
フラメンコに何故か繋がる彼岸花　慶子
曼珠沙華すなおになれる風を待つ　栄恵
曼珠沙華秋を小出しにしてくれず　菁居
曼珠沙華明治女の匂いする　幸子
彼岸花祭り囃子が好きと言う　節夫
曼珠沙華来世はきっと天に咲く　万年
曼珠沙華地上に咲いた秋花火　あゆみ
曼珠沙華静水さんに逢えました　淑子
運動会走ってみたい笛がなる　規代
丸い月心もまるくなりました　寿枝
空よ雲よ人恋う風が頬をなぜ　比呂子
二人して一人前の墨をする　太虚
あなたと歩く道に迷いはあるものか　史子
落ち込んだ時こそ空を見上げよう　千枝
お陰さま子等恋実り核家族　汎美
天皇も稔りの稲穂刈り取られ　房子
種蒔いてまいて実りの時を待つ　厚子
稲束をかかえて感謝実る秋　半徳
実る日を信じなければ汗が泣く　一路

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

一期一会歩きましょうかもうすこし　恵美子
蹴りあげたサッカーボールに賭けた恋　好栄
急かすから見事に茶碗割れました　ちよえ
騙し舟北はいまだに折り続け　かつ子
寿としっかり書いた墨のいろ　伸子
ふところの隅でにっこり亡夫と遇う　聖子
やがて翔ぶ夢を見ている折鶴よ　はるみ
とっておきの話はひとり歩きする　博利
ふところに風穴あけた低金利　清泉

川柳塔きゃらぼく　福代天雀報

みがきあげ石も仏とまつられる　千春
熱から覚めて起きればすでに秋景色　千代
蕎麦蒔けとトンビの群れが低く飛ぶ　すみえ
鈴虫の姿探してめがね取る　章江
発想をかえると笑う置時計　てい子
泣き笑い一人芝居も長すぎる　ゆき
ブレーキが緩んでからの空回り　田鶴
秋つげる竿の先から赤トンボ　晶子
心まで老いさせないぞ手をつなぐ　恵子
大根がおいしくなって足が冷え　繭
夕顔のいのち一晩咲ききって　天雀
食べ比べ食糧難は他国の事　春枝
きょうだいが寄って宴となる見舞い　日枝子
戸棚には要らないものが捨てられぬ　ふみ
足湯して芋たこなんきん読んでいる　寿々子
姉と兄ずっといたから元気出た　那珂子
忘れずに今年も咲いた秋桜よ　雪江
電卓が街の景気を弾き出す　瑞枝
三桁四桁はまだ暗算で大丈夫　やえ

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

這い這いの一直線は母の膝　加津子
楽しみの線たどっているあみだくじ　能子

初対面同じ目線で打ち解ける　ますみ
一線を引いてスープの冷めぬ距離　喜美子
線描きのままで終った恋もある　あずき
この線を越えるとキッと血を流す　欣史子
寺の庭紅葉に酔うて一人旅　弘直
裏金を億までためて信ゆれる　香住
さよならに心が揺れた二三日　慶子
抱きしめて心の揺れを我がものに　シマ子

川柳ふうもん吟社　夏目一粋報

気合い抜けると脳が冬眠してしまう　洋々
親たちよほんこの心読めますか　一瑶
辛抱が薬満期のない夫婦　義徳
万華鏡私の夢と同じ色　節子
気合い入れ邪悪な心ふっ飛ばす　房江
見た目にはほんこ陰では知能犯　あしび
パニックのネズミ思わず猫を噛む　春名
座禅組む気合いの鞭はやがて来る　益子
わが人生失敗ばかり積み重ね　一京
パニックにおちる逆縁の悲しみ　雅女
どんな球投げても妻は打ち返す　美恵子
満期です妻が肩もみ話しかけ　行男
主婦業に満期が来ない恐ろしさ　良子
身のほども忘れ背伸びをしてこける　昌鼓
禁断の実に善人が揺れ動く　美雪
気合いなど無用の街で息をする　かをる
畦を焼く火が野を走りパニックだ　重忠
辛苦経て今日は満期で除隊の日　暢夫
満期除隊の兄へ美人の嫁がくる　孝男

パニックに慣れ過ぎたのが恐ろしい　金祥
満期来たハワイ旅行か特老か　稔
満期まで待てぬ頭脳が老化する　諏訪男
ややややや家宝の壺がこわれてる　秀四
にんげんが満期になった霊柩車　秀夫
ダブル進学家計は赤のパニックだ　由美子
満期まで待たず命が先に行く　はつ江
満期まで待てぬ定期をあてにされ　喜子
天に聞くいのちの満期まだですか　善夫
三歳児のテロ家中がパニックだ　寿子
パニックを一度見たいよカタツムリ　一粋

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

大丈夫あの世で母は待っている　武子
大丈夫青空高し豆を干す　久枝
大丈夫宝が眠る貸し金庫　重忠
赤トンボ大丈夫だよ来て止まれ　節子
大丈夫ですかと親切な声だ　保子
財産は要らぬあなたが傍に居る　弘子
後継ぎはもう大丈夫葉も繁る　睦子
九九が言えるまだ大丈夫ぼけてない　彩子
耳もとで大丈夫だよと言っておく　みさ子
大丈夫だよ樹の下の雨宿り　永子
僕が死ぬまでは日本も大丈夫　照彦
ひっそりと鞄ミステリーかも知れぬ　くに子
陶工の瞳が炎える登り窯　(野)節子
温そうでちょっと道草くう焚火　美恵子
大丈夫薬も毒も持っている　きみ子
大丈夫時どき惚けた風をする　和子

虹を追う足はまだまだ大丈夫　ひろこ
自信あるからご破算にしてもいい　盛桜
鼻息も荒く亥年の母怒鳴る　公子
知事邸に裏金を突く猪が来る　蟹郎
猪も頭をひねる防除策　実満
亥の年へ孫がふえるという至福　くに子
兵眠る北緯六十度の無念　茶子
収穫のラストは猪に遭う畑　忠良
何だろう猪が考えこんでいる　富久江
猪の分を残して芋を掘る　完司
猪突猛進足を鍛えて心技体　螢

川柳塔唐津　仁部四郎報

苦労した話に笑い皺が増え　晴翠
松の内も運転させぬ御神酒屠蘇　勝視
一粒のどんぐり二世も実を落とす　實
六十年一つ違いのまま夫婦　正剣
影に引きずられて恋の灯が点る　蜂朗
よれよれの札にアイロンのし袋　水笑
そうですかのはずであるはず通知表　四郎
日本三大松原と言うがほんとかな　忠良
思春期の息子部屋中裸体貼る　輝夫
　　高明

川柳塔なら　坊農柳弘報

トリックがあります私の誕生日　芙佐女
三面記事トリック二ツ三ツあり　千梢
地の塩で無冠に生きた父の墓　博一
王冠の誘いたましい売り渡す　のりこ
おっとっと本気になると石動く　ふりこ

遊びから本気になった夫婦です　茂雄
虚栄張る本気疑う北の国　東吉
六十の手習い少しだけ燃える　彰治
燃えかすにならぬと覚悟した余生　弘風
予科練で燃えた日もあり若かった　章久
燃えて散る花に似ている恋の道　春雄
燃えるもの抱いて男の一直線　比呂志
落日に燃えつきるもの残るもの　六助
再生の今枯れ草に火が走る　真理子
トリックに弱い男がよく笑う　ダン吉
核ゼロをとさかを赤くして叫ぶ　良一
政界の裏トリックに明け暮れる　和夫
泥かぶる覚悟でいます本気です　國治
明日は晴れトリックもなく夕焼ける　恵美子
三丁目の夕陽に希望燃えていた　朝子
トリックの女の眉は美しい　道子
冠婚葬祭語る由緒もない家紋　美千子
彩りの冠たり夕日沈む海　一風
養虫の知恵をかりたい頬冠り　孝子
年寄りが燃えると消火器が効かぬ　秋雄
自爆テロ神のトリック信じ切る　隆盛
本気ですもう今も同じです　春蘭
恋のトリック使い果たした赤いバラ　富子
野の花の冠母はいま聖女　理恵
青春の本気一気にドア開ける　弥生

川柳茶ばしら　板山まみ子報

最終日帰国土産をやっと決め　秀水
市になって議員はやたらカタカナ語　文男
ダイエット決めていたのに芋届き　かつ子
口コミで田圃の中の手打ちそば　盛夫
もうみんな来ていて遅刻した気分　美千代
食べ残りつい手が伸びてここの肉　百合
ぽちゃぽちゃの孫に頬ずり宮詣り　幸子
外向けの鎧を脱いで缶ビール　まみ子

長柳会　村上直樹報

ふるさとへ帰ればこころ真っ裸　直樹
楽と言う寝ること苦痛病みし床　如水
ふる里で昔に出逢い古希の恋　明子
母逝ってすっかり絶えた里帰り　三和子
母と見た紅葉懐かし里の秋　登美子
食欲の秋体重は天知らず　淳司
寝言ではずばり言いたい事を言う　一慧
寝言では本音がもれる内の人　武男
悪知恵があれば今頃リッチかも　美代子
里山を壊された熊町なかへ　不二雄
ひとときのやすらぎ貰う里の秋　靖子
電車バス船を乗り継ぎ里帰り　たけし
われを知る古里なぜか面映ゆい　正一
ぼんやりとしてる振りして磨く牙　芳野
ぼんやりと過してみたい隠れ宿　英美
ふる里の記憶だんだんうすくなる　よしお
ばっちりと隠しカメラが大殊勲　靖博
里帰り角を曲れば小走りに　正子
ぼんやりと過ぎた年月飛行雲　マサ
里の駅童に戻る国訛り　和代
もういくつ寝ると白寿に手が届く　輝子
明日には明日の風と床に就く　敬二
日だまりでグラビア美女と添い寝する　幸雄
故里で迷子になった出世魚　冨美子
寒の入り紙漉く里の凍みる朝　けい子
パソコンに負けない母の知恵袋　史
終着駅ぼんやり見えてまだ迷路　正美
ばっちりときめて女は帯を打つ　正博
花柄の夜具に孤独を包まれる　和子

川柳塔わかやま吟社　牛尾緑良報

メル友と友だちごっこして孤独　夕胡
異文化にふれて一皮むけた旅　朱夏
さて何と取り替えようか柿の種　大輪
干柿の甘味は母の手のぬくみ　智三
一幅の絵です四郷の柿すだれ　准一
天上天下唯我独尊木守柿　保州
ぶらり旅秋を丸ごと食べてくる　登美代
たましいにビタミン運ぶ旅時間　小雪
旅立ちの駅に未練を置いてゆく　順子
自然美が詩人を作るひとり旅　紀子
愛確認夫婦の旅はまだ未完　輝子
目と舌で京の風情にひたる旅　さち子
満天の星に誘われ旅なかば　和香
親も子も川が流れるような旅　豊太
霊感が走り決断早くなり　三男
お守りを抱いているのに事故に逢い　正博
霊感に勝る私の感受性　泰女
霊感へ心の読みが深くなる　和子
インスピレーション翔ぶ日の私金縛り　冨美子

なんたって直感霊感母の勘　克子
泡沫の恋のメールがまだ消せぬ　あきこ
鳴りやまぬかばんの中のEメール　怜
夫から何故か敬語でくるメール　精子
メールなら愚痴も小言もありったけ　徑子
お節介なメールにくらし乱される　よりこ
ほどほどのメール母と子の絆　英子
返信のメールへむねが疼きだす　寿子
通信販売また騙されたなと思う　三喜夫
ケータイのメールが元で揉めている　よしこ
切なさの消えるメールの片想い　東吉

川柳ささやま　遠山　可住報

合併の模範中味は火の車　精一
問題が解決できた良い目覚め　純子
ニューモデル怒ったような目の車　二英
介護終え鼻唄気どりのしまい風呂　文子
バーゲンに行かず儲けた無駄使い　靖子
九十のモデルは日々を清く生き　多美子
血圧が上がる難題もち歩く　開子
流行の先端運ぶモデルさん　照代
木犀が咲けば師の歌想い出す　かほる
後から誰か来そうな儲け口　つや子
合掌の顔が頼んでいる儲け　哲男
美人ではないが笑顔で売れている　可住

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

根は正直黙ってるのに顔に出る　肋骨
バラ寿司の出来た頃かな里の母　宇乃子
根なし草気楽になれる手本かも　契子
拉致の子がいそいそ帰る夢を見る　春代
日本ハム信じられないアジア一　柳童
根拠なき質問しては党首止め　長一
石頭頑固な父が懐しい　禮子
根は深いたぐっていけば知事の足　信男
人情が好き路地裏に根をおろす　蛍柳
道しるべ石に彫られた文字読めず　雪子
三面記事も読んで他山の石とする　昭子
大根が安くてブリも買うてくる　見清
幹二本根っ子はひとつの夫婦です　よしろう
いそいそと出掛けたけれど待ちぼうけ　正三郎
いそいそと出掛ける妻を見てるだけ　いさむ
石けりで遊んだ頃の温い道　黒兎
閻魔帳極楽行きへ袖の下　勇治
お誘いに亭主小踊り鉄砲玉　勝

西宮北口川柳会　黒田　能子報

枯れ葉散る秋は地にあり天に在り　比ろ志
散らかして気楽になったマイルーム　直
これからも薬は飲まぬ主義でゆく　歳子
忙がし過ぎたこれから貝になってやる　孝一
これからの余生と金の弥次郎兵衛　朋月
生き方を変えて独りの壁を塗る　晴美
運動会ビリで走った子を誉める　順子
背番号もらえるまでの玉の汗　章子
一と七何か良いことありそうだ　春美
部屋番号押すときめきをくれた人　耕治
出しゃばらずほどほどにして手を洗う　光子
出たとこ勝負いまも続いておりまする　忠
オルゴール開けると過去が転げ出る　房子
嫌な役買って出てから出た値打　折杭
未だこれが出来ると自分を励ます夜　てる
この場から他所の家族にする華燭　哲男
少しだけ風ある方が性に合い　二英
お若いと言われ照れてる顔の皺　江美
相槌を打った時から狂いだす　光久
山のお湯木の温もりの下足札　いたる
一鉢の蘭が話題になる平和　春蘭
どれもみな本音ですのよ欲ですの　求芽
力瘤まだまだ子には頼らない　鹿太
定年後妻に逆らうことは無い　五月
尻込みの背中を押したのはあなた　美籠
新人へ十八番という期待　正和
永田町追い出されたり帰ったり　昭三
ニコチンが切れて集中力消える　奮水
試歩の足一歩一歩へ希望の灯　千代
月も満ち欠け人のくらしもこのように　たず子

京都塔の会　都倉　求芽報

日進月歩　医者も患者もおしえられ　春
空遥かまさかまさかの友の葬　ふりこ
やさしさに触れると涙する歳に　鹿太
思い出を落葉に託しプレスする　輝美
襞スカートに畳の目までプレスされ　益子
プレスされ秘密を消したシュレッダー　昌乃
せめてもの肥満の妻が寝押しする　恭昌
ひとつまみの塩は立派な黒子役　綾子

塩少し利かし山行く握り飯　篤子
相続のそれから塩を撒く仲に　福子
塩盛っていちげんさんはお断り　正坊
ひとつまみ姑得心の塩加減　庸佑
波の花盛って幸せ呼び寄せる　きよし
呪文のよう塩控えめと医者は言う　宏子
梅漬ける母はゆずらぬ塩加減　萬的
特上の塩が噴き出す玉の汗　美義
親切もゆき過ぎた時おせっかい　久留美
伝言板約束時間過ぎました　高栄
言い過ぎて闇がだんだん深くなる　典子
あんたには過ぎる人だと言われたが　藤重
過半数　呪文のように永田町　求芽
過ぎ去れば誰も綺麗に見えてくる　則彦
お金なら持ち過ぎたって困らない　満子
財布の合図やめろやめろとバッグから　とし子
合図にも手旗があった戦中派　和友
降参の合図だ引くこともなさけ　百合子
ちょっとした段差へころぶのも合図　啓子
風の合図もみじが山をかけおりる　葉子

あかつき川柳会　山本　柳昌報

卵酒何にきいたか酔っぱらう　美世子
熱燗で消毒をする胸の傷　シマ子
熱燗へ消えた女が舞い戻る　半蔵門
熱燗に告白してる正誤表　藤重
熱燗に湯豆腐がある浄土だな　重人
反省もこめて包帯巻き替える　桂子
反省に押え切れない自我の虫　廣子
反省のペンキだまって塗りかえる　ますみ
土下座する顔は一夜で作り上げ　良知
また口がすべって三日ほどチャック　月子
反省の頭は直ぐに上げたがる　慕情
彬の碑実現の灯が見えて来た　一歩
指先で実りを探る点字の書　柳弘
稲穂たれ畦にすくっと曼珠沙華　勝弘
心まで豊かにさせる黄金波　東吉
枯れひまわりもしっかり種をつけている　美代子
白菜がきっちりと巻きやがて冬　祥昭
平凡な生き方なりの実がついた　修
エルメスのバッグの底でくらす猫　美子
腰痛も母の遺産だあきらめる　生枝
戦争という最大の負の遺産　保州
遺産分け着物一枚だけでした　美花
世界遺産オーイと呼んでみたくなる　律子
くしゃくしゃの遺言状が取り仕切る　正
医の値上げ待合室が空いている　章久
年金で大変なんか孫がきき　千鶴子
戦争ノーこの一点で手をつなぐ　富美
サラ金は命担保に金を貸し　玄也
ニセドルを半額で売る北の国　天笑
美しい国の子供が揺れている　弥生

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

犬の恋塀の高さは物にせず　敏
ハチ公の映画観せたいうちのポチ　耕策
人間に疲れて犬と散歩する　静子
引き綱に愛を通わす盲導犬　かつみ
だんだんと年とるほどに気も弱く　昭平
だんだんと癖まで亡夫に似てくる子　ヨシ枝
年金と骨がだんだんちびってる　アヤ子
飲むほどにだんだん話デカくなる　いさお
だんだんと無口になって行く夫婦　一壺
残り時間だんだん減ってあせります　喜久子
電子辞書だんだん脳が痩せていく　扶美代
皺深くだんだん甘いつるし柿　りつえ
だんだんとあたり明るく御来光　フジ
マスコミに洗い出された裏の顔　志洋
核兵器洗い流せぬ過去がある　光男
過労死の蟻をやさしく雨洗い　惠勇
完全犯罪指紋が消えるまで洗う　美代子
ごめんやすおいでやすとも言わぬ猫　悦子
ダイエットせよと言われたうちの猫　庸佑
相続をねこの額でもめている　真一
捨て猫はもう人間を信じない　泰子
そして朝猫にかかれたことにする　栄一
猫背まで亡母に似て来た歳となる　久仁子
猫よりもましや電話の番できる　六点
独立独歩のら猫にある誇り　みつこ

翠洋会　谷口　義報

よそ見して涙拭く間を待ってやる　正雄
間延びした話とっくり聞く介護　美籠
いさかいを避けて間をとっておく　久峰
歯のすき間空気がもれる舌も出る　蕉子
震えるの恐くて嘘がつけません　さと美
魂の震える本と夜を明かす　富子

湯どうふが震えて箸も動きだす　すみ子
止まらない震え少年Aの罪　理恵
震えながら閻魔の前で嘘をつき　義
ひしひしと祈りの集う万灯会　尚士
ひしひしと名誉も金も役立たず　叡子
子供らの未来ひしひし思いやる　志華子
ひしひしと迫る閻魔を蹴り返す　昭
変化球ひしひし迫る妻の乱　孝一
自守自戒わたしを叱咤して冬に　千歩
ドキュメント辛さひしひし身を攻める　照子
童謡の琴の音静か母偲ぶ　水昇
戦争をしない国こそ美しい　志保美
お茶請けは土産候補の旅の宿　桃花
松茸の香りを嗅いできのこ買う　満作
柿に栗あれば造花も秋気分　絹子
満月に見とれペダルを踏みはずす　捷也
廃物利用臓器売買如何です　春
語らない自然にたえず耳を立て　千梢
何事もなかったように日が暮れる　舞夢
正倉院展如意は孫の手かも知れぬ　恭昌

尼崎尾浜川柳会　山田　耕治報

ぬか漬は母に勝てないそれでよい　よし子
ダブル前上手く着こなすいぶし銀　里江
ぬか漬を肴につまむいろり端　宏一
古漬のような男ですみません　耕治
戦中とダブル　ニュースは北朝鮮　亀与子
女子バレー接戦風呂が沸き過ぎた　昭三
アーンしてと蜜柑をむいてあげた頃　美代子
指ぬきのままでお茶出す顔馴染　イサミ
事故などで散らしてならぬランドセル　五月
ぬか漬の話ながなが垣根越し　勝巳
秋霖に紅葉が映える高野山　朋月
プライドを捨てたら胸のしこり消え　きよし
スローライフ沸点の位置下げてみる　孝一
ぬか漬が素材の珍味醸し出す　正治
エレベーター誰かぬか漬持っている　求芽
デートの日ダブルで席を取っておく　江美
祖父の舌ぬか漬の主言い当てる　桃花
ゴム手袋はめてぬか漬かきまわし　全彦
ふところをひんやりさせて終る旅　鹿太
ひんやりと隣の噂聞いている　美籠

川柳塔のぞみ　播本　充子報

千年を生きても人は進化せず　公誠
テポドンはやっぱり日本向いている　勝
あの二人やっぱり二年もたなんだ　喜子
大中小大きな袋取るばあちゃん　日出子
役どころやっぱり親の七光り　妻子
医者の眼にやっぱり駄目と書いてある　光久
小遣いを黙って足してくれる妻　清
やっぱり娘温い介護に手を合わす　円女
小春日和蚊が耳元で鳴いている　由一
小春日和志功の墓で第九聴く　順風
小春日の予報忙しい洗濯機　きよし
小春日や公園ポチとおじいちゃん　やすお
毎日が小春日和の八十路過ぎ　あやめ
銀杏へ小春日和の散歩道　宣子
妻の膝小春日和の耳掃除　朋月
のこのこと小春日和のひき蛙　康子
童心へ小春日和とハトポッポ　朝子
八十歳平和小春日和の盆の菊　敏
日に二食正直だった皮下脂肪　方子
犬の子も器量良しから貰われる　俶子
死ぬ時はキリストよりもお釈迦様　哲男
家の中やっぱり主人どっしりと　那珂子
休日は妻に代って母を看る　尚士
後継ぎが出来て爺ちゃん楽隠居　舞夢
三代のリレー老舗を守り抜く　シマ子
親に似てまっすぐ生きて黄昏れる　洋子
アンカーとしての見せ場は心得る　扶美代
錦秋の美を北風とつなぐ峰　渓舟
波乱なく予想通りの新首相　東吉
一番にこだわるたかが遊びでも　充子

すみよし川柳会　岩崎　公誠報

丸い鼻母によく似た孫の顔　ヒロ
知らぬ間に後ろ姿が母に似る　明江
おふくろの味とかかげて店開き　定子
長生きも程がよいよと母は言い　芳久
幼き日叱られたのを思い母　俊夫
母がいて部屋がふんわり暖かい　文子
遣り繰りは反面教師の母娘　和子
お喋りで子供の自慢楽しそう　幸子
浮かぬ声聞き逃さない母の勘　萌
晩年の母はあまえてくれました　かりん
母さんの言うたとおりになる不思議　桃花

愛のむち母は涙で仕上げする　蕉子
正論を言えばにらんで返す母　日の出
母の歳になって気持ちが分かりだし　舞夢
ラクダ飼い遊ぶと笑う母の夢　公誠
嫁姑やっぱり老母についてやる　遠野

城北川柳　吉岡　修報

成功を焦ったばかり落馬する　利昭
今頃になって焦るからこける　倫子
ライバルの口笛あの子ついてゆく　修
焦っても実力以上出て来ない　明子
無印の馬にどんどん追い抜かれ　順三
鈴の音に素早く鼠逃げおおせ　昭子
風鈴に彩を問われて風こまる　春蘭
遍路傘風に乗ってる鈴の音　高栄
迷うなと母が持たせた鈴が鳴る　麗
燃えた日を忍ぶ土鈴も秋の音　朝子
特注の鈴を夫にぶらさげる　和夫
神様がこちら向くまで鈴を振る　集一
直感と違うデリケートな隙間　萬的
B面は壊れやすいと書いておく　恵子
何よりもデリケートですこの地球　ただよし
穏やかな余生のはずが騒がしい　叡子
七五三いじめに合わぬよう祈る　一歩
美しい嘘で美しい国裁く　柳弘
お地蔵様に詣る私なりの訳　達子
偉い人ズラリ並んでするお託び　あやめ
ふるさとで変らないのは辻地蔵　志華子
ドア近く女性の側は避けている　弘風
涙する訳は聞かない故郷の海　郁夫
紙おむつ世話の温みを知りつくす　典子
美しい国への道は遥か先　東吉
好景気まだまだ肌に感じない　ルイ子
諦めて罠も仕掛けもない夫婦　とし子
一合で膝が崩れる花の席　はじめ
日本も腹探られる核武装　正
校長よ首をかけても子を守れ　たもつ

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

正直な鏡に老いの姿見る　叮紅
前向きな姿勢に明日がついて来る　淞丘
長男の姿かたちに偲ぶ夫　茂美
その姿親に泣かれる鼻ピアス　たけし
老醜を匿い切れぬ百日紅　多賀子
凜とした後姿をくれた母　幸子
ペン先が時どき嗚咽して止まる　畔
ペンを持つ手に老斑が増えてくる　治代
ペン一本で山の高さは崩される　桂子
赤ペンが私の弱点ついてくる　房子
すこし真面目に万年筆の黒インク　螢
人を斬るペンの機嫌を取っておく　蘭
立ち寄った海で生命を洗ってくる　多喜
寄って来る猫に本音をこぼす夜　知恵子
無理をして寄せてもやはりAカップ　たえこ
寄りそった傘一本にある鼓動　蘭水
手みやげも無くて寄りかど落着かぬ　政子
思いやる心寄りそう千羽鶴　ちえこ
どこまでが人並なのか迷ってる　薫
人並と思っているから生きられる　邦代
人並のこともできないハウスもの　柳歩
人並の顔だと独りほくそ笑む　幸
人並でいい美人なら苦労する　礼子
世渡りが人並ならばいいとする　英子
乱なんて長い人生風みたい　喜美子
雰囲気に波乱が起きる気配する　和歌子
乱れ飛ぶ人の噂に貝になる　捷子
まるい輪が乱れぬように手をつなぐ　静恵
世辞ひとつ言って乱れた心電図　紫晃
乱雑も僕に便利な順序あり　注湖

岬川柳会（先月分）　八十田洞庵報

もうピンチ痩せねば切れぬ足の爪　令子
浴衣着て覚え始めの盆踊り　洋子
脳に風送りこみたい物忘れ　俶子
決めるまで長いがあとは振り向かぬ　年子
ピンチにも不思議と心冴えている　茂平
実る秋知識の泉探してる　富美子
海外へ誰もが行ける世の流れ　とみ
万能の温泉宿で至福どき　里子
聞くはヤボ言葉の裏のかくし味　蛙城
川柳のうまし水湧く泉南に　和美
からっぽの器に入れる母の愛　和香
傷口の深さにめげず火の匂い　洞庵
口外は法度老舗の秘伝味　東吉
輪の中で時々利かすかくし味　珠子
一滴のお酢がうまいのかくし味　悦子
亡き母の歳を越えたら知る苦労　房枝

車です乾杯だけで断つお酒　貞夫

高知川柳社　川竹　松風報

吊り上げるまでは撒き餌もおしみなく　功
吊るされた形で糸瓜涼を呼び　快風
耳たぶが重いと悲鳴イヤリング　ただし
渋柿を吊るすと冬が寄って来る　暖
吊り下げた風鈴風とよく喋る　千鳥
世間体気にして歪み出る親子　和江
空き缶に溜めたお金で夢を買う　幸子
離婚する時のお金は高くつき　悦子
良心のお金ためされ無人市　美々
義理はたす金で人間計られる　京子
世間体前口上が付くお金　哲史
愛と金秤に掛けるのも女　三郎
タンス預金じっと温める暇が無い　良雄
成り金がこれ見よがしに乗る外車　てるみ
金よりもはかり知れない人の恩　正躬

南大阪川柳会　吉川　寿美報

辞書にないキモイダサイウザイの文字　弘子
ただの箱電池の切れた電子辞書　昌紀
手ほどきは辞書にはないが恋はした　修
荒れる子の変化球しかと受けてやる　更紗
トーン上りっぱなし妻の乱気流　寿美
幸せですか握手した手が荒れている　たもつ
酸欠の町でうきわが放せない　柳伸
究極の浮輪母の苦労が乗ってくる　とし子
投げられた浮輪に一つピンホール　ただよし

ともすれば独り善がりになるうきわ　柳弘
夜の街うきわ求める子がたむろ　直子
泳がしておこう空気が抜けるまで　栄子
少年の孤独にうきわ投げてやる　集一
おだやかな妻で笑顔を欠かさない　弘泰
穏やかな幕開けでなし安倍総理　三男
おだやかなお顔で梅を漬ける母　萬的
穏やかな小さい秋のちちろ虫　章久
穏やかな百寿の皺に菊日和　憲太郎
おだやかな中へ本膳並べられ　雅文
寝そべれてあばれた後の児の寝顔　なぎさ
願わくば穏やか生きて南無阿弥陀　東吉
先走り批判の的になるメディア　庸佑
若者が飛びついているニューメディア　ルイ子
CMの海で溺れているわたし　尚士
宣伝戦メディアミックス目覚ましく　初太郎
運のない女が待ってる風媒花　千里
芋たこなんきんメディア時代の幕開ける　弘風
錆びて来た脳をメディアに洗われる　志華子
地球儀をメディアの波が包み込む　郁夫
メディアまず庶民の味方してほしい　楓楽

富柳会　池　森子報

もっともっとねだった時も過去の夢　伸雄
人生の花道飾る葬の列　鐘造
誤作動が続く右脳を花に問う　紅紫朗
形状記憶の中に感覚眠らせる　浩子
ギブアップしたのに夏はまだ続く　扶美代
気分上上あしたの風がみえてくる　冬虹

補聴器が取捨選択をして平和　和子
継続は力貧乏暮しです　淳司
あっけらかんと感覚麻痺の未成年　千華
狐雨橋の真ん中から走る　萩乃
風を読み風を掴んだ射程距離　信子
夢を並べるとシャガールも並ぶ　アキラ
白紙の答案一番怖いのは教師　泰女
こだわりの解けない傘を干しておく　鬼焼
考えることなく背中かいている　宏至
鷺草の翔べぬ翼の風の中　春蘭
欲出してもっと重たい荷を担ぐ　佳子
デパ地下で主婦感覚を取り戻す　淳一
逃げ足の速い雑魚から掬われる　初太郎
まんじゅう屋跡を受け継ぐ無骨な手　彦次
続けてるうちに女神がやってくる　よりこ
貪欲にもっともっとといういのち　あかり
夕映えをもっと輝かせるつもり　深雪
継続は力なれどもこの辛さ　澄子
与作から谺が返るくにの山　欣之
補聴器をつけて噂を聞いている　アキ
縦横の糸に私の席があり　ひろこ
どことなく頼りないのに惚れました　高鷲
あの日から鳴かなくなった蝉が居る　巳代一
見栄を張る余裕の裾が綻びる　森子

岬川柳会　八十田洞庵報

空っぽになってご意見聴くつもり　和美
目分量シェフがつかんだかくし味　里子
空っぽの財布も心充実し　茂平

余裕とは人にも自分にもやさし　年子
建築に偽装学びに履修洩れ　蛙城
空っぽの咽しめらせて唄二曲　桜琴
同窓会あのマドンナも色褪せて　とみ
回復の兆し笑顔になる家族　和香
新聞をきちんとたたみ夕の席　房枝
晩鐘が冬の兆しを包み込む　令子
歳月へ捩子ゆるみくる秋の風　みやこ
艶つやの色香があせてつるし柿　俶子
そのままで何でも言える人と居る　珠子
挙式前おなかが迫り出し焦る親　富美子
通勤の同じ席取り同じ顔　洋子
さりげないあせりに積木くずれてる　洞庵

川柳大阪　長井　善純報

六十は若かった今七十　ひろゑ
家族から浮いた父さん酒びたり　五月
わだかまり無いオープンな手話の指　章久
ゆっくりの散歩で拾ういい話　一歩
深入りはしないと決めている他人　重人
松茸が匂う隣は社長様　司
携帯もカー免許もなく過ごしてる　紀雄
いじくるな私の味が逃げて行く　洛酔
飛ばさなくても世界の怒る核実験　一風
中東に平和の鳩を飛ばしたい　勝弘
一つ飛び近くて遠い拉致の国　かよこ
縁がない金は持たぬが愛はある　信酔
幻の焼酎下げて友が来る　利昭
十五夜のうさぎ平和が好きという　美花

同感と口では言って腹は嘘　ふみこ
同感と言われて嬉し決議案　えみ子
同感の温さの中に居て孤独　柳昌
同感へ心が響くあったか味　朝子
ひな鳥の親が仰いだ空の青　珠生
幻想から覚めて明日の米を研ぐ　まつお
幻に逢いたくなった竹とんぼ　笑風
つまらない事が懐かし花が咲く　喜楽
紅葉が見えぬ島だが秋の風　鉄心
慌てなよ一週間は七日有る　隆司
方言に戻る墓参の立ち話　春蘭
ひばり節ひばりを越える者はなし　美すず
幻かもったいないの琵琶湖駅　東吉
同感というてはそばに寄ってくる　芳香
美しい国虚飾の教育法　柳弘
安心して鳥も飛べない北の空　善純

倉吉川柳会　竹信　照彦報

日の丸でつつんで見たい星条旗　萩江
六ヵ国協議しているマントヒヒ　石花菜
路地裏の総理大臣婆ちゃんだ　玲子
川柳で政治の是非をたしかめる　康子
美しい国に住んでるらしいけど　瑞子
政治などどうあれ私農守る　(前)喜美子
年金をもっと下さい総理どの　和子
弱いからヨロイカブトを身にまとう　鬼一
心臓の弱い人ほど色男　賀寿恵
人間の弱み金が付きまとう　龍枝
冬まぢかよろめき歩むキリギリス　晨一

酒飲んでポロッと弱音吐いている　風露
弱い者いじめの政治まっぴらだ　酔芙蓉
意志弱く三日続かぬダイエット　由紀子
走った頃わたしの体は風だった　克枝
生きるのに夢中歳など忘れたよ　完司
心の臓脈を打つのも命がけ　節子
愛足して引いて夢中に恋をする　螢
恋愛中あばたも笑窪今の妻　日出子
でこぼこの峠夢中で越してきた　幸子
携帯に夢中の孫の請求書　悠子
考える暇はなかった終戦後　次男
パソコンも金もあやつる哺乳類　よしえ
星回り良くないけれど出来ちゃった　泰輔
其処の人恋してますね図星でしょ　満
狼の蒼い目を見た歩哨線　重忠
星光る待つ人がまだ帰らない　和枝
願いごとするには速い流れ星　茶子
満天の星座に探す星一つ　常代
平和主義守る憲法持て余す　照彦

わたの花　山本　宏至報

アルバムは涙腺ゆるむタマテ箱　愛子
人の字を飲んでもトチルあがり性　義明
くやし涙球児が詰める砂袋　ますみ
掛軸の墨に無限の色がある　幸枝
札幌ドーム涙新庄宙に舞う　(本)たえ子
快癒する友の見舞の杖弾む　欣子
お遍路の石積む墓碑に日が落ちる　美晴
庭の柿実りを感謝仏壇に　ふり子

聞いてやれよ無言臓器の叫び声　浩三
思い切り涙流して元気出す　宏至
疑いが笑顔の裏でにらんでる　一風
美術館ムンクの叫びききに行く　ミツ子
なによりも母の涙が身に応え　いつふみ
金婚の妻の時計が標準時　晴美
こうるさい蝿のもみ手にある律儀　俊子
根気よくその日級って半世紀　宏民
涙ひとすじ幻影だけを残す浜　耀一
雀の涙ほどの年金また下がる　正春
うるさいが孫の声なら子守唄　はじむ
苦手など言うておれぬと蚊が攻める　美代子
手配書によく似た顔にうろたえる　君江
赤信号叱りつけたいルール無視　荘治
トンボ舞う田を丸坊主稲刈機　博子
こっちこっちと秋の夕ぐれ猫じゃらし　克美
来た句集一字こぼさず読んでます

川柳塔打吹　野口　節子報

咲くもよし散るも人世の人生図　美知江
散り際の余韻を残す燃える赤　龍枝
紅葉散り一目千両曼荼羅図　滋
欲の皮突っぱって突っぱってから散ろう　克枝
山茶花の咲く道落ち葉からころと　和子
呼ばれていって支払いみんな持たされる　やえ
札束がおれの野心を呼び起こす　重忠
福の神呼んだら酒もついて来る　清
酒が呼ぶような気がする依存症　玲坊
もしもしと闇の深さを呼んでいる　美ッ千
古里を呼び止められるまで歩く　芳光
多才だと自慢をしてもまだ未熟　禎元
多才とかどれも私の遊びです　貴恵
軽やかに多芸多才な粋な人　京子
多才でもすべて未完のあれやこれ　公恵
多才さを売るタレントのお粗末さ　照彦
多才とて生きて仏になれぬもの　三津子
金儲け以外なんでも得意なり　完司
まま事に多才の仕種垣間見る　美代子
回転木馬美人も乗せる老いも乗せ　紀美恵
うすと杵仲良く搗いて丸い餅　久芽代
冬支度まだできぬのに木の葉舞う　孝恵
無作法な古木に絡みつく葛　玲子
とまり木でうさばらしする一人酒　芙美子
裸木となって花咲く春を待つ　かつみ
人々を支えてあげる木になろう　幸子
山に木を植えると海が青くなる　石花菜
木の影にわたしの影が消えてゆく　螢
傷ついた鳥よこの木に来て止まれ　節子

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

春霖の如く少女の泣きやまず　きよし
頑張って一周遅れのテープ切る　成柳
キラキラと目立った頃もありました　美鈴
スタミナのある人何を食べてるの　てる
男だろめそめそするな元気だせ　隼人
スタミナの尽きた蜻蛉に夕茜　愁女
逆転打ベテランの味唸らせる　一吾
スタミナをつけて飛びだつ渡り鳥　井蛙
雨のブルース歌うスタミナ濃い化粧　順風
同情を貰い自分に負けたぼく　銀波
トップギヤだけで走っている若さ　黙人
二度の職スタミナ切れと言わせない　岳水
還暦を迎え涙腺緩くなる　花峯
計量器いらない老母のサシスセソ　慕情
大根を抜いた穴だけ目立つ冬　劦
太陽をキラキラはじく臍ピアス　五楽庵

大原川柳社　山本　玉恵報

再会へ仄かに胸の灯がともる　あすなろ
湯上がりの仄かに君と秋を酌む　真
仄かなる匂いはいずこ風にのり　文代
月の夜仄かに浮かぶ影二つ　あや子
夕闇に仄かな灯り老母が居て　とめの
裏話聞いてもらって腹いやす　静子
秋風に仄かな香り庭の菊　絹子
茶柱を信じ仄かに期待する　たづ子
追伸のペンで仄かな温み知る　美佐子
残像が仄かに浮かぶおぼろ月　南花
少し位嘘も方便世を渡る　地佳平
田舎道仄かな灯り頼りつつ　巴子
夕月も曇り仄かな初デート　喜美子
光明が仄かに見えた医師の笑み　悦子
和服姿仄かに美人漂わせ　辰江
耳朶染めて少女仄かな恋を知る　妻子
まだ妻が仄かに香る鏡掛け　はじ芽
虫の音も仄か終の世知っている　敏夫
宅急便仄かに秋をつれて来る　さちこ

カーテンのゆらぎ仄かな香りのせ　みづえ
老春を仄かに燃やす片羽月　玉恵

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

補聴器の感度を上げて聞く話　重人
子の好きな漫画のキャラは暗記する　啓生
原稿が明日あしたとまだ書けず　庸佑
青空に燃えんばかりの紅葉映え　正坊
予報より予報士の胸見つめてる　和子
ミニ会席いつも満員主婦ばかり　慶子
何にでも興味を示すおばあちゃん　寿美子
無一物になって眠りも深くなり　則彦
無理通し押える道理行き場なく　肋骨
日暮れまでこの指止まれ幼い日　夢
遠い日の思い出ばかり鶴を折る　都代子
嘘ばかり詠まれていると知らぬ妻　尚士
興味から迂闊に乗っていた火傷　萬的
九条派この指たかれ集まろう　勇治
集まったサクラが義理の手をたたく　見清
無人駅私の風が呼んでいる　郁子
展覧会ため息ばかり立ちどまり　タミ
ドングリを集めて嬉しもみじの手　知香子
アバウトを集めて作るモンタージュ　美義
ポスターは汚職をしない顔ばかり　求芽
清流に写る姿をただ眺め　巴子
本心に酒を飲まして泣いている　玲子
Gパンの穴に北風吹き抜ける　宇乃子
正社員ばかり味わう好景気　早人
落ち葉集め秋を焚いてる寺の庭　比ろ志
無になれと警策背なでビシと鳴る　石舟
捨て台詞集めて男黄昏れる　寅次郎
秋ですよ本の欠伸がきこえくる　満寿巳
柿すだれあとは北風待つばかり　(久)千代
子の苦労集めたような母の皺　幸雀

むらくも川柳会　毛利　幸報

毒味だとついつい飲んで酔いつぶれ　英男
格差社会毒になりたいフリーター　彰
夜の街きれいな花には毒がある　美保
信用をしたがうっかり毒もられ　幸
毒まむしふるえがきそうあの模様　定子
見合いする来ぬ農継ぐ男達　喜美
ふる里の柿恋しいと娘の便り　恵美子
物忘れどうにもならぬ歳さみし　ます美
民族の祈り平和の鳩が飛ぶ　愛子
小芋までいのししすべて食べつくし　信夫
老残の咲かぬ蕾もふくらます　義良
グーパー運動今はシャントの命つなぐ　秀子
月光と語る実家の今未来　瑞枝
海青く私の心も広くなる　蘭水
味付けがうまく出来てる試食品　俊夫
日の丸を日本の国でクリーニング　秀夫
私に過ぎた幸せ古書新書　嘉寿子
乗取屋土足のままで入りこむ　宣雄

川柳塔おおとり　福田　登美報

万葉の館で結ぶ五七五　由多香
万葉の館のんびり刻が過ぎ　風花
草木染めらしい古代の布まとい　艶子
開発に昔の土器が掘り出され　小生
文化の日昔むかしの明治節　螢
その昔槍持った日が怖い　清子
嫌なこと昔昔で流します　道子
雨の音昔に返る子守歌　ヒロ子
考古学太古の眠り掘り起こす　以和万津
栄光の昔をたどる車椅子　芳光
ほどほどの躾枯らしたいじめの芽　黙光
百薬の長と雖もほどほどに　幸次郎
ほどほどにあれば十分な遺産　真一
晩酌は何時もほどほど好い気分　知恵
ほどほどの夫婦で切れぬ赤い糸　雄々
家持も踏んだであろう土地に立つ　登美

川柳藤井寺　高田美代子報

見限って心動かされる哀訴　史郎
重い物動かす時は妻を呼ぶ　瑠美子
オレの心金を積んでも動かぬゾ　シルク
よく動く目だな信じていいのかな　みつこ
台詞なし歩いただけの初舞台　志洋
ケイタイで動かぬ証拠撮ってある　雅枝
この壺は動かせません床にシミ　登志子
冗談が思わぬ風の向きを変え　栄一
父さんが動いた明日はきっと雨　ヨシ枝
水鉄砲平和の武器はこれでよい　一歩
青春をわくわくさせた西部劇　耕策
人形を落とす射的は許される　悦子
その昔銃後守れとひもじい日　喜代子

銃の先平和の鳩は止まらない　絹歌
銃を持つ手に平和など望めない　鐘造
独り者同士乾杯しよう秋　六点
ときめいた二人三脚シャボン玉　絹枝
ふたりだけ何はともあれ乾杯だ　武義
よく笑うふたりで喧嘩つづかない　扶美代
ふたありでひとりと思うマグカップ　重人
老いふたりみことよことで用が足り　かつみ
若い二人可愛いミニの鍋でよい　龍一
ハイド氏とジキル博士が僕に棲む　進
二人して黄門さまを見失う　一筒
お互いに意地張り過ぎていたふたり　いさお
親を看る話に更ける姉妹　美代子
人生にふたりでまいた花を摘み　アヤ子
苦も楽も越えたふたりの日向ぼこ　政代
浮き雲よお前もサンマ食べたいか　公輔
婆ちゃんの御節ごんぼも柔らかい　淳司

すみよし川柳会　岩崎公誠報

さあ行くぞ電車の椅子に一直線　伸子
試すほど分からなくなる椅子選び　和子
この椅子が全部見ていた泣き笑い　文子
カルチャーの椅子で友達増え続け　日の出
車椅子世話になるまい一万歩　定子
子の自立テーブルの椅子ひとつ減り　桃花
長椅子よ時にうたた寝床となり　俊夫
誇らしげ家族ささえた古い椅子　ヒロ
よく動く母に似た手がようなまけ　かりん
風向きに尻尾振ってる気障な椅子　りつえ
多選して癒着していた知事の椅子　遠野
ボクサーの椅子は三分毎に出る　蕉子
すばらしい意見飛び出す隅の椅子　舞夢
王様の椅子に座って落ち着かず　公誠

川柳エスポ　山本三郎報

空席にやっと座ると駅に着き　三郎
指体操夫婦の愛を温め合う　さとし
停年で明日が楽しみ料理好き　義恭
生きてます照る日曇る日涙の日　一炊
すきな歌聞いてストレス溶けてゆく　星花
燃えた日もあったあの時若かった　みさと
信じたら互いの背中見るだけで　文好
不用品すてたくも有り捨てきれず　大豊
秋そよと屋台ののれんコップ酒　昭一朗
家族愛いつしか軋む屋台骨　(故)三枝
細腕といえど支えた屋台骨　高栄
屋台引く今宵の月を友として　はつよ
わかるなら調べてみたい我が命　ゆき子
花吹雪ニートの心目覚めさせ　とよ子
朗朗と吟詠に閉め新年会　晩翔
無茶な計画足が拗ねてて気が重い　れい子
闇焦がし新はじける大文字　一幸
野次馬も一度行きたい靖国へ　さち子

岩美川柳会　石谷美恵子報

加齢する度にお金と徳が寄る　圭一郎
ああ歳月老眼鏡を三度替え　孝男
諸行無情歳かようやく悟れだす　一京
重厚なステップ冬がやってくる　完司
夕焼けが明日のステップ踏めと言う　一粋
死ぬまでのステップですか生きるとは　公乃
ステップが何じゃいこれは盆踊り　蟹郎
一本も歯が欠けてないお爺さん　螢
プライドがなんだ私総入れ歯　はるお
傘寿の歯三十本もある自信　重忠
歯に衣を着せた会話が重くなる　節子
歯が立たぬ相手に逃げた事がない　かつみ
義歯入れて好きなお方に逢いにゆく　雅女
鳶の子に鷹の期待はせぬように　一瑶
命までかけた女にする期待　公子
柿八年期待どおりの実が成らぬ　茶子
これ以上期待されては身が持たぬ　睦子
大器晩成そんな期待に夕暮れる　忠良
期待していないと言われ楽になる　稔
期待せぬと言われて闘志湧いてくる　たぬ
熱つづく期待した子の分岐点　幸枝
お月さま期待通りになりません　菖子
まだ期待されているから家事をやる　和子
力いっぱい期待にそった母の看護　克枝
白い歯と涙が光るインタビュー　美恵子

サークル檸檬　吉田あずき報

仲のよい夫婦で派手な喧嘩する　楓楽
金で済む話ならよくあるはなし　房子
味方にも敵にもなれる車間距離　扶美代
飾りつけ派手に住宅地の聖夜　美籠
寄せ鍋のような話へ聞き上手　光久

いまとなれば初恋派手にふくらませ　義子
譲る娘もなくてまだ着る派手な服　あずき
大花火あの派手さにも憧れる　いわゑ
どうせなら派手に転んで自己主張　希久子
母の柄もう派手過ぎる歳となる　正坊
故郷捨てたのは電線の鳴ってた日　棲世
ときどきは怒って角をとり戻す　たもつ
うららかが少し派手めな服にさせ　遠野

堺川柳会　河内月子報

失った鉛筆子等は探さない　さくら
機嫌いい朝のハブラシ笑ってる　篤子
ケータイを落とし私がのっぺらぼう　千代
ご機嫌の猫と昼寝をしています　アキ
不機嫌と一目で分かる父の背な　玄也
蹴っ飛ばす石ころも無い大都会　和夫
見失った妻に迷子で呼び出され　惠勇
人間が上へ上へと棲む都会　潤子
失恋のおかげで今の僕がある　時雄
ひたすらに暖簾と生きたデスマスク　りつえ
大都会風景までも嘘をつく　扶美代
御機嫌よう少しきどって御挨拶　半銭
おねだりは今だじいちゃん上機嫌　俶子
機嫌よく生きて百歳目指します　冬虹
失恋はメンソレ付けて治る傷　朋月
同権の都会で差別する電車　像山
不便さが好きで都会を逃げて来た　泰子
便利さと引きかえましたエトセトラ　みつこ
日めくりの残り数えて出直そう　かりん
便利さを活かし都会で老い二人　梓

カラスさえ都会暮らしの知恵磨く　崩
転倒に奇特な人もいる都会　ルイ子
日暮れ時のんきな妻は出たまんま　楓
久しぶりのどかな風に出る欠伸　鐘造
失ったものは大きく感じます　伸子
久しぶりのんびり昼寝出来た雨　よりこ
一筋の望みを託す電話口　八千代
失せ物を探す眼鏡を先ず探す　雅明
大きい家建って二上山が消え　天笑
コンビニとスーパー競う街に住み　月子

八尾市民川柳会　宮西弥生報

不本意な成績だった一夜漬け　民
若者はまともな日本語が苦手　ますみ
吹く風の心は知らず襟立てる　宏至
螺旋階段こころのあせり見抜かれる　秋雄
ワンタッチ怖い話の中にいる　加央里
孫去って互いの腰を擦り合う　耀一
どんぐりを探す小熊の目に涙　浩三
脱皮から脱皮人間まだ半端　欣之
軽いつもり出会いサイトが牙を剥く　はじむ
何匹も鬼に出会った小商い　一風
良い勝負タッチの差とは言うけれど　春蘭
タッチする愛は絆を丸くする　寿鶴
ここで終ると十三階段だった　定男
吹く風もささやきながら冬告げる　きらり
引分けを狙った時に負けていた　ダン吉
北風が吹いて連絡船に乗る　あかり
フウフウフウ老老介護お粥好き　柳伸
髪一本抜けて秋が背を叩く　弥生

第五十八回　大阪川柳大会

晩秋の彩濃い中、第58回大阪川柳大会は、11月25日（土）北区民センターで、149名の参加を得て、開催された。当日の秀句は次の通り。（太字本社同人）

「留　守」　小林すみえ選
魂があなたの元へ行ったきり　上嶋幸雀

「時　計」　大内　朝子選
小春日へゆるりと回る花時計　西出楓楽

「サムライ」　片岡　湖風選
小春日のサムライ妻が髪を梳く　内藤光枝

「　昼　」　前田芙巳代選
職安へ真昼の顔を置いて来る　竹森雀舎

「　淵　」　赤松ますみ選
年金の淵で漫才見ています　西澤知子

「いまさら」　河内　天笑選
日本で勝てなくなって大リーグ　吉川　卓

「時事雑詠」　井上　一筒選
日本に核の傘立てだけがあり　了味晃平

「羽ばたく」　久保田元紀選
こどもには大きな羽根がついている　齋藤保子

柳界展望

○第27回桜井市市民川柳大会は10月29日(日)に開催。同人の次の句が桜井市市会議長賞を獲得。

縺れ糸ほどけてからがつまらない　安土　理恵

○「第8回横光利一俳句大会」に於て同人の次の句が特選に入選10月28日表彰された。

車椅子三世代押す紅葉狩　出口セツ子

○第48回全国郵政川柳長野大会（参加123名）に於て、総合点第1位を副主幹小島蘭幸氏が獲得。

○ライオンズクラブ女性部の活動の中、川柳部門に於て同人の特選句。

私からわたしへ送る旅土産　榎本　舞夢

○伝統美保存会主催の第18回川柳カレンダー受賞句は次の通り。

ふる里はすべてを許す風がある　原　賢

○第26回ときせん賞に同人三宅保州氏が佳作入選。

▽表　彰△

○川柳藤井寺は11月5日、藤井寺市政40周年記念の式典に於て、文化活動の功により表彰を受けた。

▽出版・講座△

○川柳教室NALC天の川クラブ（前たもつ講師）では、川柳教室百回記念自選句集『天の川2』を発刊。会員14名の自選句を掲載。（B6判66頁）

○宮本三喜夫氏（同人・和歌山市）は、句集『私の川柳』を出版。B6判133頁句集紹介112頁に掲載

○故東野大八先生の長女古藤愛子さんは、先生の蒐集された川柳の資料を保管するため「大八文庫」を設立しておられる。より広く川柳を知ってもらうため「大八講座」を七、八、九月に開講された。次回は一、二、三月。問い合わせ先―〇五七四―二六―一七三四

▽同人動向△

○12月3日の第26回川柳塔鹿野みか月川柳大会出席のため、天笑主幹他3名鳥取市鹿野町行。

○日本美術工芸会展（大阪市立美術館）に於ける刺繍部門に於て同人の榎本舞夢さんが奨励賞を獲得。

新同人紹介

桝本宏子（ますもと ひろこ）

―求芽・楓楽・朱夏・たもつ推薦

▽訂正とお詫び△

11月号＝32頁上段8行目、ライバルに煽てられ→煽られ

12月号＝70頁下段13行目、覆う→覆す　96頁上段5行目、雪よりも→雲よりも　93頁下段11行目、要介護1→要支援1

常任理事会＝12月8日出席者15名　①各地区川柳会代表者会開催日　案件の決定②大阪川柳大会の反省③各地川柳大会・句会への対応について④高野山合祀報告⑤一路賞選者決定⑥各部報告事項

次回1月8日(月)午前10時

11月、12月号は一部地区で配達が遅れ御迷惑をおかけ致しました。川柳塔社では定められた日を守り発送業務をしており、郵便局への問い合せもしております。今のところ局内の事情という回答しか得られません。御迷惑をおかけ致しますがしばらくお待ち下さい。

お知らせ

○郵便振替の番号が一月から変りました。御間違いのないようお確かめ下さい。

（新）口座番号00980―4―298479

献　壽

平成19年

川柳塔鹿野みか月

第26回“みか月”記念大会に際し、皆様から温かい御支援こころから感謝を申し上げます。ありがとうございました。
本年は第27回目の記念の大会に当たる年でございます。
何卒、旧に倍してのご支援をこころよりお待ち申しております。

会長
森山　盛桜

副会長
中原　諷人

相談役
土橋　螢

顧問
小倉　利男
石尾　かつ乃
乾　喜与志
岩崎　みさ江
大角　幸代
大角　正道
太田　幸枝
奥谷　彩子

垣尾　宣子
鹿児島　節子
加藤　公子
加藤　永子
國森　武子
久野　野草
黒田　くに子
児嶋　保子
高原　かおる
竹森　富久江
田中　きみゑ
谷口　百合子
田村　きみ子
徳岡　本丸
土橋　睦子
土橋　はるお

中原　汲香
中原　みさ子
永原　奈津子
西川　和子
原田　菊乃
福西　茶子
山岡　久枝
山口　実満
山根　立亥
山根　八重
横山　房子
吉田　孔美子
吉田　弘子
若林　みどり
ほか会員一同

※事務局：〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279　中原諷人方
電話 & FAX (0857) 84—2100

明けましておめでとうございます

竹原川柳会

平成十九年　元　旦

竹原川柳会創立50周年記念川柳大会へのご支援ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。
今後共よろしくお願い致します。

〒725-0022 広島県竹原市本町１丁目14―３

小　島　蘭　幸　方

会監会
計査長

小島　時岩　三宅　古谷　古節　藤解　田島　福井　森浜　沖原　石内　山房
広蘭　一路　笑不　本朽　子夫　風虚　太静　万年　菁居　正宏　淑子　子子
幸

ほか会員一同

あけましておめでとうございます

平成十九年　元旦

堺　川　柳　会

河内天笑　小寺竜之介　長谷川彰
石堂潤子　齋藤さくら　長谷川春蘭
稲川惠勇　志田千代　原清晋
岩崎公誠　高木世紀子　樋口冬虹
榎本日の出　津守なぎさ　日野愿
榎本舞夢　遠山唯教　藤田泰子
大久保伸子　徳山みつこ　升成好
太田扶美代　冨山ルイ子　宮本かりん
大谷篤子　中井アキ　村上玄也
大橋鐘造　中井萠　八木侑子
荻野像山　中川楓　矢倉五月
奥時雄　中崎深雪　矢野梓
柿花和夫　中野健吾　山本半銭
河内月子　半井酔粋　米澤俶子
神原文　西内朋月　和田つづや
源田八千代　西村りつえ

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩３分）
プレラにしのみや４F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子

西口いわゑ　河原野折杭　長浜美籠
門谷たず子　神原文　七反田順子
奥田みつ子　菊池トミヱ　西内朋月
阿萬萬的　北野哲男　長谷川春蘭
秋元てる　木村貴代子　林昭三
浅野房子　久保田千代　春城武庫坊
井上松煙　蔵田光子　春城年代
石原歳子　黒田能子　古川奮水
岩倉キク子　小林わこ　堀正和
臼井二英　住谷石舟　牧渕富喜子
小熊江美　田中章子　松下比ろ志
小倉藍　田中正坊　丸山一之
片山忠　田辺鹿太　山口光久
亀岡哲子　辻開子　山崎君子
河井庸佑　坪井孝一　山田婦美子
川島諷云児　都倉求芽　山本義子

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会長　竹　治　ちかし
会　員　一　同

事務局　〒693-0052　出雲市松寄下町２８４
吉　岡　きみえ　方
TEL 0853—22—1068

医療法人社団

湯川胃腸病院

理事長　湯　川　紘　未

大阪市天王寺区堂ヶ芝２丁目10番２号
TEL　06－6771－4861

賀春　新しい風を!!

いのちある句を創ろう

川柳塔のぞみ
三周年記念誌上川柳大会

題と選者

「ひらく」赤松ますみ　「雑　詠」前田芙巳代

五十嵐　修　岡崎たけ子

三宅　保州　坂根　寛哉

河内　天笑　新家　完司

投句料　一、〇〇〇円

締切り　二月十日（消印有効）

投句先　〒193-0832　八王子市散田町2—31—3

川柳塔のぞみ　播本　充子

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

川柳塔きゃらぼく

会長　政　岡　日枝子

会　員　一　同

事務局　〒683-0845　米子市旗ヶ崎3-12-13

政　岡　日枝子

TEL　0859-34-1729

あけましておめでとうございます

平成十九年　元旦

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長　成重　放任　　**会員**　角尾いさむ

会計　川崎ひかり　　〃　辻上よしみ

顧問　木村あきら　　〃　山崎　初恵

同人　池内かおり　　〃　赤沢　貞月

〃　原　賢　　〃　中塚寿々女

〃　伊勢八重子

明けましておめでとうございます

NHK川柳教室

河内天笑　安達忠央

藤井正雄　福田満州

指宿千枝子　山田耕治

鴨谷瑠美子　池上清治

志田千代　久保田千代

井上松煙　角谷克治

緒方美津子　藤井則彦

古今堂蕉子　西内朋月

江見見清　松村里江

大崎侑子　山本加お里

謹賀新年

エイシス堺

講師　河内天笑

石堂　潤子　中井　萠
榎本日の出　中野　健吾
榎本　舞夢　原　清晋
大久保伸子　樋口　冬虹
大谷　篤子　升成　好
奥　時雄　宮本かりん
荻野　像山　村上　玄也
源田八千代　伏見　雅明
齋藤さくら　元永　雅子
高木世紀子　矢倉　五月
津守なぎさ　矢野　梓
冨山ルイ子　米澤　俶子

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長　両川洋々

会員一同

事務局　〒680-0033　鳥取市二階町3－102－2
植田一京方

月例会　毎月第4日曜日　13:00～
JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）
4月は吟行会・12月は没句供養大会

明けましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹 斉藤　劦
副主幹 小寺　花峯
福士　慕情
相談役 工藤　甲吉
森中惠美子
顧問 波多野五楽庵
理事 岩渕　黙人
櫻庭　順風
佐治氏加子
浅田　隆樹
肥後和香子
田中　叶
監事 相馬　銀波
小枝ふさゑ
会計 相馬　一花
福士　慕情
ほか同人一同

明けまして
おめでとうございます

熊本川柳会

高野宵草
永田俊子
岩切康子

明けましておめでとうございます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115
山下蟹郎
TEL 0857—72—0762

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会長　鈴木公弘
会員一同

事務局　〒680-0843　鳥取市南吉方3丁目364
安田方　春木圭一郎
TEL 0857—24—2834

平成19年　元旦

頌春　川柳塔唐津

山口　樋口　仁部　宗本　坂保　久丸　市崎　岩上　井上
高明　輝夫　四郎　水笑　蜂朗　正剣　晴翠　勝實　勝視

謹賀新年

川柳塔まつえ吟社

同人一同

事務局　〒690-0015　松江市上乃木9－23－22
三島淞丘方
TEL 0852－21－2810

謹賀新年

大阪川柳人クラブ

会員一同

会長　礒野いさむ

副会長　板尾岳人

幹事長　坂本晴美

事務局　上村　隆

あけましておめでとうございます

もくせい川柳会

穴吹尚士　阿萬萬的
荒巻　夢　安藤寿美子
岩崎玲子　上嶋幸雀
上村　隆　江見見清
樫谷郁子　粕屋都代子
河井庸佑　河津寅次郎
岸田知香子　久保田千代
源田啓生　坂上高栄
神野宇乃子　住谷石舟
田中正坊　谷川勇治
玉置英子　玉置重人
辻川和子　辻川慶子
都倉求芽　富田美義
中内久太郎　野島満寿巳
早泉早人　広島巴子
藤井則彦　松下比ろ志
宮田助骨　安永　春
山門タミ

ほか会員一同

おめでとうございます

京都塔の会

会員一同

明けまして
おめでとうございます

川柳ささやま

会員一同

謹賀新年

三幸川柳教室

事務局　〒640-8111
和歌山市新通七―一七
TEL 073・423・8930
古久保　和　子

主　幹　三宅保州
理事長　木本朱夏
相談役　桜井千秀
副主幹　古久保和子
副理事長　喜田准一
理　事　榎原公子
〃　田中みね
〃　〃　楠見章子
〃　川上智三

例会　毎月第四土曜日　午後一時
和歌山市勤労者総合センター
（和歌山市役所西側）

明けましておめでとうございます

尼崎いくしま川柳会

例　会　毎月第一金曜日　午後一時

会　場　サンシビック尼崎　三階
（阪神尼崎駅西南五分）

明けましておめでとうございます

尼崎尾浜川柳会

長浜美籠
坂本晴美
西内朋月
瀧本きよし
山田耕治
河津正治
坪井孝一
林昭三
松下比ろ志
奥村五月
岩城義芳
西部イサミ
酢谷亀与子
松村里江
木村美代子
村山よし子
軸丸勝巳
田原宏一
小熊江美
南全彦
大川桃花
都倉求芽
田辺鹿太
他会員一同

新年あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

水野黒兎
前田昭子
椋山祥風
藤原桂子
田中蛍柳
栗田久子
二ノ倉よしろう
田辺正三郎
高嶋勝
出口セツ子
米原雪子
江見見清
寺井柳童
唐住実
宮田禄骨
藤澤長一
小牧信男
多田契子
前田いさむ
北川ヤギエ
宇山禮子
中山春代
谷川勇治
神野宇乃子
ほか会員一同

定例句会・毎月第２火曜日午後・豊中市蛍池公民館（蛍池駅前ビル５階）

おめでとうございます

西宮ローズ川柳会

秋元てる
飯西ミサヲ
岩倉キク子
奥田みつ子
小倉藍
亀岡哲子
菊池トミヱ
木村貴代子
坪井孝一
長浜美籠
西口いわゑ
春城武庫坊
春城年代
山崎君子
山本義子

明けましておめでとうございます

はびきの市民川柳会

会員一同

おたまじゃくし川柳会

助川和美
多田郁子
堤楢代
中岡香代
林力子
森元ふみよ
雪本珠子
土橋房枝
山本蛙城

〒596-0076
岸和田市野田町一―六―二
土橋方
電話 〇七二―四三八―三三〇八

川柳ねやがわ

会員一同

会長　山本三郎
事務局　高田博泉

大阪川柳の会

句　会　毎偶数月上旬・大阪駅前第２ビル５階　第１研修室
事務局　〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706　本田智彦 方
TEL（06）6303-7297

代　表
礒野いさむ

世話人
足立淑子
碓氷祥昭
岡良三
坂本和樹
竹森雀舎
内藤光枝
濱田良知
本田智彦
森口美羽
安井英華
吉村雅文

大阪川柳人クラブ
板尾岳人
坂本晴美

「この会は、鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会諷刺の精神を現代に生かす」（会則）

あかつき川柳会

川端一歩　前田紀男
森村美花　森松まつお
岩佐ダン吉
山本柳昌　塩満敏
近藤正　田中正坊
江島谷勝弘　宮崎シマ子
加山勝久

◆第23回句会
●07・1・12（金）14時
●**大阪市立北区民センター**
JR環状線「天満駅」3分
●「一滴・骨・光明・時事吟」

〈事務所〉〒596—0824
岸和田市葛城町891—22
岩佐ダン吉 方
〇七二・四二八・〇三二五

謹賀新年

南大阪川柳会

会員一同

句会場・日にちが変っています
住まい情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋６丁目駅③出口）
原則として第４月曜日・６時から

明けまして
おめでとう
ございます

川柳塔
わかやま吟社

同人一同

事務局 〒641-0012
和歌山市紀三井寺
一一一—二
牛尾 緑良
電話〇七三—四四六—二八五五

明けましておめでとうございます

サークル 檸檬

浅野房子
井丸昌紀
太田扶美代
大塚節子
奥田みつ子
片岡智恵子
久保田千代
田中正坊
鶴田遠野
長浜美籠
西口いわゑ
西出楓楽
西村哲夫
早川棲世
前たもつ
山口光久
山本希久子
山本義子
吉田あずき

賀正

岸和田川柳会

平成十九年 元旦

井芳地狸村
伊東吉
長谷川呂万岩佐ダン吉
寺田甚一原さよ子
不破仁緑山本蛙城
田口穣一宮野みつ江
仲谷弘子小島笑司
中島寿海池田岩夫
永田守雪本珠子
土橋房枝林力子
森元ふみよ堤楢代
中岡香代河越みよ子
林春栄助川和美
三宅ゆり子前田ゆい
小林淳子家路野添
稲葉洋向井清
佐藤文夫佐藤幸子
松岡浅子児玉俊昭
沖泰弘米富淳風

とんだばやし川柳
富柳会

明けましておめでとうございます

池　森子　林　澄子
中井　アキ　河野　彦次
大橋　鐘造　田嶋　伸雄
小野紅紫朗　河野　義彦
中崎　深雪　村山　佳子
久世　高鷲　村田巳代一
前田　登子　ほか一同
森下よりこ

謹賀新年

東大阪市川柳同好会

会長　片岡湖風
会計　森下愛論
会員　一同

あけましておめでとうございます

川柳若葉の会

生嶋ますみ
黒田能子
辻川慶子
永浜加津子
古川喜美子
宮崎弘直
宮崎シマ子
宮本欣史子
山内香住
吉田あずき

あけましておめでとうございます

川柳クラブ わたの花

平川幸枝　赤木妙子
松葉君江　西川義明
生嶋ますみ　寺川はじむ
吉村一風　笠井欣子
村上ミツ子　田邊浩三
山本宏至　松浦愛子
八倉知佐子　小西博子
乾美代子　上田和子
篠原いつふみ　飛永ふりこ
井尻民　土谷耀一
砂田八寿子　葭矢正春
馬場宏　梅原荘治
杉本晴美　梅原克美
脇俊子　今川孝子
本田たえこ　佐藤美はる

明けましておめでとうございます

エイシス東大阪

講師　河内天笑

新井弘子　生嶋ますみ　岩田季子　笠井欣子　吉川寿美　国見蘭香　熊代菜月　古手川光　佐々木満作　佐藤美はる　飛永ふりこ　中岡妙　中村れんげ　西川更紗　堀富重　三宅健一　山本宏至　米田水昇

明けましておめでとうございます

高槻川柳サークル卯の花 一同

月例句会は第三木曜日正午　　高槻現代劇場306号室

謹賀新年

河内長野

長柳会

水谷正子
村上直樹
山岡冨美子
坂上淳司

明けましておめでとうございます

川柳塔なら

宮口笛生
中原比呂志
米田恭昌
坊農柳弘
大内朝子
吉川寿美
居谷真理子
渡辺富子
安土理恵
飛永ふりこ
森中博一
会員一同

明けましておめでとうございます

城北川柳会

会長　小谷集一
会員一同

明けましておめでとうございます
今年もよろしくお願い致します

川　柳　塔　社

主幹　河内天笑

理事長　西出楓楽

副主幹　奥田みつ子

副理事長　小島蘭幸　前たもつ

常任理事　穴吹尚士　井伊東吉　籠島恵子　鴨谷瑠美子　河内月子　川端一歩　木本朱夏　鶴田遠野　長浜美籠　西内朋月　坊農柳弘　松原寿子　村上玄也　山本希久子

川柳塔社常任理事会

句会名	日時と題	会場と投句先
八尾市民 川柳会	14日(日) 午後1時から 今年・ゆったり・挑む・雑詠	山本コミュニティーセンター3F　学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	14日(日)午後2時締め切り 発明・装う・チャレンジ 「乗り物」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時半締め切り 笑う・夢・それなり・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木)午後1時半締め切り 明るい・風呂・ほんのり 本・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3—28—13　神野節子
岸和田 川柳会	20日(土)午後2時締め切り 頭・言う・うきうき・エース	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 藤井寺	**21日(日) 新年句会** 和楽心（詳しくは句報にて） 「題」集	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳 ねやがわ	21日(日) 正午締め切り 天・作戦・占い	寝屋川市市民会館 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半締め切り 日記・魅力・巡る	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	22日(月) 午後6時から 戻る・めちゃ・日本・自由吟	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前9時半から 姿・褒める・勇気・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16　吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	27日(土) 午後6時から 残る・コンビニ・人気・髪	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	28日(日)午後2時締め切り 頭・喜ぶ・いそいそ・「ゼロ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	28日(日)午後2時締め切り 新・ボケ防止・いじめ	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
京都 塔の会	29日(月)午後2時締め切り たっぷり・笑う・順序	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328 ブァン青雲202　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	5日(金)午後2時締め切り 世界・今年・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
富柳会	6日(土)午後2時締め切り 得・たまご・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉吉 川柳会	6日(土)午後2時締め切り めでたい・電波・追う	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川柳会	8日(月) 午後1時から 初めて・輪・狙う・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子
川柳塔 唐津	9日(火)午後1時半締め切り 駅弁・咲く・年度末	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
尼崎 尾浜 川柳会	9日(火)午後2時締め切り 絵皿・ハッピー・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	9日(火) 午後1時から 表(おもて)・始める・しっかり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎
堺川柳会	11日(木)午後2時締め切り 夢・跳ねる・ハワイ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
川柳塔 なら	11日(木) 午後1時から 和む・盃・前進	奈良市立中央公民館4F（近鉄奈良駅④出口歩5分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
城北 川柳会	13日(土)午後1時締め切り 独楽・褒める・ライブ・自由吟	神徳会館2F　地下鉄千林大宮駅2番出口 （神徳温泉裏）大宮商店街西へ5分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 打吹	13日(土)午後2時締め切り 理想・祈る・ウフフ	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3　牧野芳光
川柳塔 まつえ	13日(土)午後2時締め切り 運・猪突・飾る・うきうき	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
川柳塔 みちのく	13日(土)午後5時半締め切り 介護・迎える・気難しい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1　小寺花峯
川柳塔 みぞくち	14日(日)午前10時半から 猪(亥)・乾杯・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

編集後記

☆明けましておめでとうございます。

☆今年も相変わりませず『川柳塔』をよろしくご支援下さいますようお願い申し上げます。

☆今年の抱負といえば、やはり川柳の仲間の輪を少しでも大きくしたいということに尽きます。同人、誌友が増え、新しく川柳に関心を持って下さる友人が増え和気藹々の川柳塔となりますよう皆様のより一層のご協力をお願い致します。

☆昨年に続き同人諸氏にはあちこちで講座を開き、或いは、口コミにより、一人でも多くの方に川柳に親しんでいただけるよう活動を進めていただいております。そして一歩を踏み入れていただいた方には継続をしていただきたいものと想いは広がるばかりです。

編集の重責を負って四ヶ月、「報われぬ努力はあっても無駄な努力はない」この言葉を支えに亥年も前進をするつもりです。

☆京都にはあまり知る人の少ない史跡がたくさんあるようです。頼山陽の晩年の書斎である「山紫水明処」（上京区三本木南町）もその一つです。茅葺き、入母屋造り。当時（一八二八年）はすぐ下を鴨川が流れ、東山、比叡山を一望にする絶景で漢詩からとった山紫水明をこの庵の名とし、日本外史もここで最後の仕上げを行ったといわれています。保存会が管理、見学もさせてくれます。山陽末裔の頼新氏と、母が、大原の同じ老健施設でお世話になっていることから知りました。（希）

ひとこと

敬語

現在使われている敬語の中には元来は尊敬・謙譲表現であったものを丁寧表現として使っているものと、誤用のものとがある。

その一、元来は尊敬表現であったものを丁寧表現として使っているもの、例えば「窓を閉めてください」「早く出掛けなさい」

これらは共に『くださる』『なさる』という尊敬表現の命令形を丁寧表現として使っている。

その二、謙譲表現が丁寧表現として使われているもの、例えば「おいしくいただけます」「その毯を取ってちょうだい」

いただくは『もらう』の謙譲語同じように『ちょうだい』はちょうだいするの命令形で謙譲語です。

その三、丁寧語は元来『です』『ます』という助動詞を用いて、丁寧な文体を作る。接頭語の『お・ご』は、尊敬語の表現ですが、単に丁寧さを表すものとして用いられている。（井上桂作）

★あかねさす白鳥宮に初詣　薫風

★学生時代は体育の授業をいかにエスケープするか、知恵をふり絞った運動おんちであったが、正月2日3日の楽しみは箱根駅伝のテレビ観戦である。

★安東能明著『強奪　箱根駅伝』（新潮社）は箱根駅伝に題材をとった小説。出場校リストには亜細亜大学、関東学院大学、大東文化大学、神奈川大学など駅伝おなじみの実在大学がそのまま文中に登場する。26歳の若者がインターネットや最新のIT技術を駆使して駅伝関係者を誘拐、駅伝を妨害する。

★犯人はTV中継回路にさまざまな技法でもって侵入。犯人に翻弄される中継テレビ局、出場を危ぶまれる大学関係者の焦り、駅伝を乗っ取る犯人の最終目的はなにか？果たして無事にスタートを切ることができるのか、ゴールのテープを切れるのか。さまざまな思惑が錯綜して息をつかせない。

★二時間四十分のテレビ中継には八百五十人のスタッフが駆り出されるという、箱根駅伝の舞台裏をかいま見ることができるタイムリミットサスペンス。今年の箱根駅伝はひとあじ違って楽しめることだろう。（朱）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（3月号）

地名

都道府県
市

姓
雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

きりとりせん

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「満　足」　（1月15日締切）

3月号発表

松本　文子　選 ――共選―― 川上　大輪　選

B　A

地名

市都
県府道

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県府道

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

3月号発表（1月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　奥田みつ子選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「税」（2句）　川上大輪・松本文子共選
一路集（3句）
「駅弁」　相馬一花選
「咲く」　小川てるみ選
「年度末」　水野黒兎選
初歩教室「渡る」（3句）　三宅保州担当

4月号
檸檬抄「満足」
一路集「ロマン」「新入生」「つもり」
初歩教室「もしも」

本社1月句会

とき　1月8日(月)　午後1時開場・2時締切り
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
十八年度初歩教室年間賞表彰式を行います
おはなし　河内天笑
兼題「うっとり」　高島啓子選
「盃」　吉村一風選
「ラッキー」　津守柳伸選
「迎える」　川端一歩選
「一緒」　西出楓楽選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円

本社2月句会

7日(水)　午後1時から

兼題「きっかけ」「礼」「ユニーク」「響く」「覚悟」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第25年度　夜市川柳募集

第8回「海」　但見石花菜選
ハガキに3句　1月末日締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料92円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇七年（平成十九年）一月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六六二九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十九年一月一日発行（毎月一日発行）

いのちある句を創ろう

川柳塔のぞみ 三周年記念誌上川柳大会

題と選者

「ひらく」
赤松 ますみ（大阪府）
五十嵐 修（神奈川県）
三宅 保州（和歌山県）
河内 天笑（大阪府）

「雑詠」
前田 芙巳代（兵庫県）
岡崎 たけ子（北海道）
坂根 寛哉（京都府）
新家 完司（鳥取県）

投句料 一、〇〇〇円（発表誌呈）

投句 各題二句詠・規定用紙または便箋に、〒・住所氏名（雅号）・TELを明記

投句締め切り 平成十九年二月十日（当日消印有効）

賞 各選者秀句に呈賞

投句先 〒193－0832
八王子市散田町2－31－3
川柳塔のぞみ 播本 充子
TEL 042－665－3172

オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050